

平成 11 年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

# 寺東遺跡・別府氏館跡

2000

埼玉県熊谷市教育委員会

平成 11 年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

てらひがし いせき べつぶ しやかたあと  
**寺東遺跡・別府氏館跡**

2000

埼玉県熊谷市教育委員会

# 序

私たちの郷土熊谷は、原始・古代の集落跡等の埋蔵文化財が、数多く分布することで知られています。こうした埋蔵文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証であるとともに、私たちの子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。

しかしながら近年は、様々な開発にともない、日々郷土の景観は変化しております。このような状況において、失われつつある文化財を保護し、次世代に伝えていくことは現在に生きる私たちにとって大きな課題であり、責務であると考えます。

さて、寺東遺跡・別府氏館跡は熊谷市大字東別府字入生田に所在する縄文・古墳・平安時代の遺跡であります。寺東遺跡は熊谷市でも発見例の少ない縄文時代の代表的遺跡です。別府氏館跡は付近に点在する中世に活躍した武士団の城館跡の1つです。また、付近一帯には古墳が分布する地域としても知られています。

これらの遺跡の一部に、配電用変電所が新たに建設される計画がもちあがりました。遺跡の保護と保存について、熊谷市教育委員会と開発業者との間で協議を重ねてまいりましたが、事業計画の変更が難しいことから、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなりました。

本書は、平成10年10月から12月にかけて実施された記録保存のための発掘調査成果をまとめたものでございます。

本書が埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発として広く活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行にいたるまで御協力いただきました東京電力株式会社埼玉支店をはじめ、関電工株式会社、並びに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成12年2月

熊谷市教育委員会  
教育長 飯塚 誠一郎

## 例　言

- 1 本書は、埼玉県熊谷市大字東別府字入生田994番地1他に所在する寺東遺跡（埼玉県遺跡番号59-089及び大字東別府字入生田988番地他に所在する別府氏館跡（埼玉県遺跡番号59-041）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、配電用変電所建設工事及び配電用管路工事に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、熊谷市教育委員会が実施した。
- 3 本事業の組織は、1章のとおりである。
- 4 発掘調査期間は、平成10年10月7日から平成11年12月17日である。  
整理・報告書作成期間は、平成11年5月6日から平成12年3月31日である。
- 5 発掘調査の担当は、熊谷市教育委員会吉野 健・秋本太郎（現群馬県箕郷町教育委員会）が、本書の執筆・編集は、吉野が行い、縄文土器・石器については秋本の、円筒埴輪については越前谷理の補助を受けた。
- 6 写真撮影は、発掘調査は吉野・秋本が、遺物は、吉野が行った。
- 7 出土遺物は、熊谷市教育委員会で保管している。
- 8 本書の作成にあたり、村松 篤、大里郡市文化財担当者会の方々から御教示、御協力を賜った。（敬称略）記して感謝いたします。

## 凡 例

1 本文中、遺構の表記記号は、次のとおりである。

S J … 住居跡、S K … 土坑、P … ピット、S D … 溝跡、S S … 古墳、  
S X … 土器廃棄遺構

2 各遺構の番号は、原則として発掘調査時に付したもの用いた。但し、一部整理作業の段階で変更したものもある。

3 土層断面図中の表記記号は、次のとおりである。

S … 川原石、P … 土器、H … 塗輪

4 遺構挿図の縮尺は、次のとおりである。

遺構全測図 … 1/600・1/100、住居跡・土坑・ピット・溝跡・土器廃棄遺構 … 1/60  
第1区第2面土坑 … 1/30、古墳 … 1/160・1/80・1/40

5 遺構土層断面図及びエレベーション図のポイントの標高は、原則としてその都度表記して示した。  
但し、第2・3・5・6区のピットは標高29.500m、第8区のピットは標高30.000mとし、表記しなかつた。

6 遺物実測図の縮尺は、次のとおりである。

縄文土器 … 1/3・1/5、弥生土器 … 1/3、石器 … 1/2・1/3・2/3、  
土師器・須恵器・形象埴輪・円筒埴輪破片 … 1/4、円筒埴輪 … 1/5

7 遺物実測図の中で、中心線はすべて実線で示し、遺物観察表にはできる限り残存率を記した。また、  
縄文土器・弥生土器・土師器・埴輪の断面は白抜き、須恵器の断面は黒塗りで示した。

8 遺物分布図中の遺物番号は、遺物実測図中の番号と一致している。

9 遺物観察表の凡例は、次のとおりである。

法量の単位は、cmである。また、推定値は括弧付で示した。

色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修1997年版）に照らし最も近似した色相を示した。

# 目 次

序	I	1 寺東遺跡第2区の調査	44
例 言	II	(1) 土坑	44
凡 例	III	(2) ピット	47
目 次	IV	(3) 谷	47
挿図目次	V	3 寺東遺跡第3区の調査	50
表 目 次	V	(1) 土坑	50
図版目次	VI	(2) ピット	55
I 発掘調査の概要	1	4 寺東遺跡第4区の調査	55
1 調査に至る経過	1	5 寺東遺跡第5区の調査	55
2 発掘調査・報告書作成の経過	2	(1) ピット	57
3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織	3	6 別府氏館跡第6区の調査	57
II 遺跡の立地と環境	4	(1) ピット	59
III 遺跡の概要	11	7 別府氏館跡第7区の調査	59
1 調査の方法	11	(1) 古墳	61
2 検出された遺構と遺物	11	8 別府氏館跡第8区の調査	66
IV 遺構と遺物	11	(1) ピット	66
1 寺東遺跡第1区の調査	11	(2) 溝跡	70
i 第1面	11	9 遺構外出土遺物	70
(1) 溝跡	11	V 調査のまとめ	78
ii 第2面	16		
(1) ピット群(住居跡)	16		
(2) 土坑	25		
(3) 土器廐棄遺構	30		

## 挿図目次

第1図 埼玉県の地形	3	第28図 第2区土坑出土遺物	46
第2図 周辺遺跡分布図	6	第29図 第2区第1~23号ピット	48
第3図 寺東遺跡・別府氏館跡位置図	9	第30図 第2区ピット・谷出土遺物	49
第4図 寺東遺跡・別府氏館跡全貌図	10	第31図 寺東遺跡第3区遺構図	51
第5図 寺東遺跡第1区第1面遺構図	12	第32図 第3区第1・2号土坑	52
第6図 第1区第1面第1号溝跡	13	第33図 第3区土坑出土遺物(1)	53
第7図 第1区第1面第2・3号溝跡	14	第34図 第3区土坑出土遺物(2)	54
第8図 第1区第1面溝跡出土遺物	15	第35図 第3区第1~3号ピット	55
第9図 寺東遺跡第1区第2面遺構図	17	第36図 寺東遺跡第5区遺構図	56
第10図 第1区第2面ピット群(1)	18	第37図 第5区第1~5号ピット	57
第11図 第1区第2面ピット群(2)	20	第38図 別府氏館跡第6区遺構図	58
第12図 第1区第2面ピット群出土遺物	22	第39図 第6区第1~7号ピット	59
第13図 第1区第2面第1~4号土坑	26	第40図 別府氏館跡第7区遺構図	60
第14図 第1区第2面第5~7号土坑	27	第41図 第7区第1号墳	61
第15図 第1区第2面土坑出土遺物(1)	28	第42図 第1号墳土層断面図	62
第16図 第1区第2面土坑出土遺物(2)	29	第43図 第1号墳円筒埴輪出土状況	63
第17図 第1区第2面土器窯跡遺構	31	第44図 第1号墳出土円筒埴輪(1)	64
第18図 第1区第2面土器窯跡遺構出土遺物(1)	33	第45図 第1号墳出土円筒埴輪(2)	65
第19図 第1区第2面土器窯跡遺構出土遺物(2)	34	第46図 別府氏館跡第8区遺構図	67
第20図 第1区第2面土器窯跡遺構出土遺物(3)	35	第47図 第8区第1~10・12~15号ピット	68
第21図 第1区第2面土器窯跡遺構出土遺物(4)	36	第48図 第8区第6号ピット出土遺物	68
第22図 第1区第2面土器窯跡遺構出土遺物(5)	37	第49図 第8区第1・2号溝跡、第11号ピット	69
第23図 第1区第2面土器窯跡遺構出土遺物(6)	38	第50図 遺構外出土遺物(1)	71
第24図 第1区第2面土器窯跡遺構出土遺物(7)	39	第51図 遺構外出土遺物(2)	72
第25図 第1区第2面土器窯跡遺構出土遺物(8)	40	第52図 遺構外出土遺物(3)	73
第26図 寺東遺跡第2区遺構図	45	第53図 遺構外出土遺物(4)	74
第27図 第2区第1~3号土坑	46		

## 表 目 次

第1表 第1区第1面溝跡出土遺物観察表	15	第4表 第3区ピット一覧表	55
第2表 第1区第2面ピット一覧表	22	第5表 第5区ピット一覧表	57
第3表 第2区ピット一覧表	49	第6表 第6区ピット一覧表	59

第7表 第1号墳出土円筒埴輪観察表	63	第9表 石器一覧表	77
第8表 第8区ピット一覧表	69		

## 図版目次

図版1 第1区第1面第1号溝跡		図版5 第3区第2号土坑	
第1区第1面第2・3号溝跡		第5区遺構	
第1区第2面遺構(東から)		第6区遺構	
第1区第2面遺構(西半分)		第7区第1号墳	
第1区第2面遺構(東半分)		第7区第1号墳周溝遺物出土状況	
第1区第2面ピット群(1)		第8区遺構	
第1区第2面ピット群(2)		第8区第1号溝跡、第11号ピット	
図版2 第1区第2面ピット群(3)		図版6 第1区第2号土坑出土土器	
第1区第2面第109号ピット遺物出土状況		第1区第3号土坑出土土器	
第1区第2面土器廐棄遺構		第1区第4号土坑出土土器	
第1区第2面土器廐棄遺構遺物出土状況(1)		図版7 第1区土器廐棄遺構出土土器	
第1区第2面土器廐棄遺構遺物出土状況(2)		図版8 第1区土器廐棄遺構出土土器	
第1区第2面土器廐棄遺構遺物出土状況(3)		第3区第1号土坑出土土器	
図版3 第1区第2面土器廐棄遺構遺物出土状況(4)		第1区第1号土坑出土土器	
第1区第2面第1号土坑遺物出土状況		第1区第2号土坑出土土器	
第1区第2面第2号土坑		第1区第3号土坑出土土器	
第1区第2面第2号土坑遺物出土状況		第1区第4号土坑出土土器	
第1区第2面第3号土坑		図版9 第1区土器廐棄遺構出土土器	
第1区第2面第3号土坑遺物出土状況		図版10 第1区土器廐棄遺構出土石器	
第1区第2面第4号土坑		第1区ピット出土石器	
第1区第2面第4号土坑遺物出土状況		第3区第1号土坑出土土器	
図版4 第2区遺構(南半分)		第3区第2号土坑出土土器	
第2区遺構(北半分)		遺構外出土土器	
第2区第2号土坑遺物出土状況		遺構外出土石器	
第2区第3号ピット遺物出土状況		第7区第1号墳出土円筒埴輪	
第3区第1号土坑			
第3区第1号土坑遺物出土状況(1)			
第3区第1号土坑遺物出土状況(2)			

# I 発掘調査の概要

## 1 調査に至る経過

平成9年8月27日、市内大字東別府字入生田において変電所建設予定があるため埋蔵文化財所在の有無の照会があった。この際、熊谷市教育委員会は、当該地は周知の遺跡であるため、埋蔵文化財の詳しい所在を確認するための試掘調査の協力依頼とともに協議書の提出をお願いした。

平成9年11月14日付けで、東京電力株式会社埼玉支店長から熊谷市教育委員会教育長あてに、当該地、別府変電所建設予定地内における埋蔵文化財の所在及び取扱いについての協議があり、埋蔵文化財の所在を確認するための試掘調査を必要とする旨、回答した。

そして、その回答を受けて再び同開発業者から平成9年11月21日付け埋蔵文化財の所在を確認するための試掘調査依頼を受けた。そこで、平成9年11月27日に試掘調査を実施したところ、縄文時代の住居跡、土坑、土器が検出され、埋蔵文化財の所在が確認された。さらに、平成10年4月1日には、同開発業者熊谷営業所長から、この変電所建設に伴う配電用管路埋設予定地における埋蔵文化財の所在を確認するための試掘調査依頼を受けた。これに対して平成10年4月10・13日に試掘調査を実施したこと、同じく縄文時代の遺構、遺物包含層、土器が検出された。本教育委員会は確認調査の結果を受け、寺東遺跡（県遺跡番号59-089）の範囲が拡大した旨、埼玉県埋蔵文化財包蔵地カードの変更増補をした。

これらの結果を受け、平成9年12月1日付け熊教社収第694号で東京電力株式会社埼玉支店長あてに、また、平成10年4月16日付け熊教社発第1号で同埼玉支店熊谷営業所長あてに下記のとおり回答した。

当該地は、現状で保存するか、または埋蔵文化財に影響を及ぼさない方法での開発が望ましい。やむを得ず埋蔵文化財に影響を及ぼす場合は、文化財保護法第57条の2の規定により事前に文化庁へ埋蔵文化財発掘届出を提出し、記録保存のための発掘調査が必要である。

その後、保存策についての協議を重ねたが、工事計画の変更は不可能であると判断されたため、記録保存の措置を講ずることとなった。

発掘調査は、平成10年10月1日に東京電力株式会社埼玉支店・熊谷市教育委員会間で埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を締結し実施することとなった。

発掘調査に先立ち、事業者から文化財保護法第57条の2第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が、寺東遺跡については平成10年5月22日付けで提出され、埼玉県教育委員会教育長から平成10年6月11日付け教文3-147号で発掘調査の実施の指示通知があった。別府氏館跡については平成10年9月1日付けで提出され、埼玉県教育委員会教育長から平成10年10月21日付け教文3-469号で発掘調査の実施の指示通知があった。そして、熊谷市教育委員会教育長は、文化財保護法第98条の2第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の報告を、寺東遺跡については平成10年9月30日付け熊教社発第644号で、別府氏館跡については同日付け熊教社発第645号で提出した。

発掘調査は、平成10年10月7日から開始した。

## 2 発掘調査・報告書作成の経過

### (1) 発掘調査

寺東遺跡・別府氏館跡の発掘調査は、平成10年10月7日から平成10年12月17日にかけて行われた。調査面積は、寺東遺跡が遺跡面積約9,000m<sup>2</sup>の内配電用変電所新設工事及びそれに伴う配電用管路工事によって破壊をうける233m<sup>2</sup>、別府氏館跡が遺跡面積30,000m<sup>2</sup>の内配電用管路工事によって破壊を受ける78m<sup>2</sup>であった。

まず最初に、第1区と呼称した調査区において平成10年10月7日に遺構確認面まで重機による表土剥ぎを行い、10月9日から遺構精査作業を行った。その際、上層の第1面で溝跡が、下層の第2面で多数のピット及び土坑等が存在することが確認され、順次遺構の調査に着手した。第1面の調査は第2面と同時に実施し、終了し次第重機により第2面の遺構確認面まで表土を剥いだ。遺構の検出は、ローム層に掘り込まれた遺構に黒褐色の土が堆積していたため、非常にわかりやすく容易であった。

また、第2区から第8区と呼称した調査区は、現行の道路を掘削しての調査であったため、安全を重視し、配電用管路工事のスケジュールに合わせて調査を実施し、区ごとに調査終了後直ちに管路工事を実施し、埋め戻すという方法を繰り返し実施した。調査区は管路埋設分幅約80cmで非常に狭く、人一人がやっとのスペースで作業は非常に苦労した。また、遺構確認面までの高さも現地表から2mを越え、排土に手間を要した。これらの調査区からも土坑、ピット、溝跡が検出された。また、第7区からは古墳の一部が比較的良好な状態で検出され、驚かされた。

平成10年12月17日には、調査のすべてを終了した。

### (2) 整理・報告書作成作業

整理作業は、平成11年5月6日から始めた。遺物の洗浄・注記作業は発掘調査中に実施したので、復元作業から行い、それと同時に遺構の図面整理作業を行った。12月までに順次、遺物の実測・拓本取り・写真撮影を行い、遺構の最終的な図面整理を行った。12月から平成12年2月にかけて遺構・遺物図面のトレース、遺構図・遺物図版組を行い、2月下旬には、原稿執筆、割付をして、報告書の印刷に入り、校正を行った後、3月31日に本報告書を刊行した。

### 3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

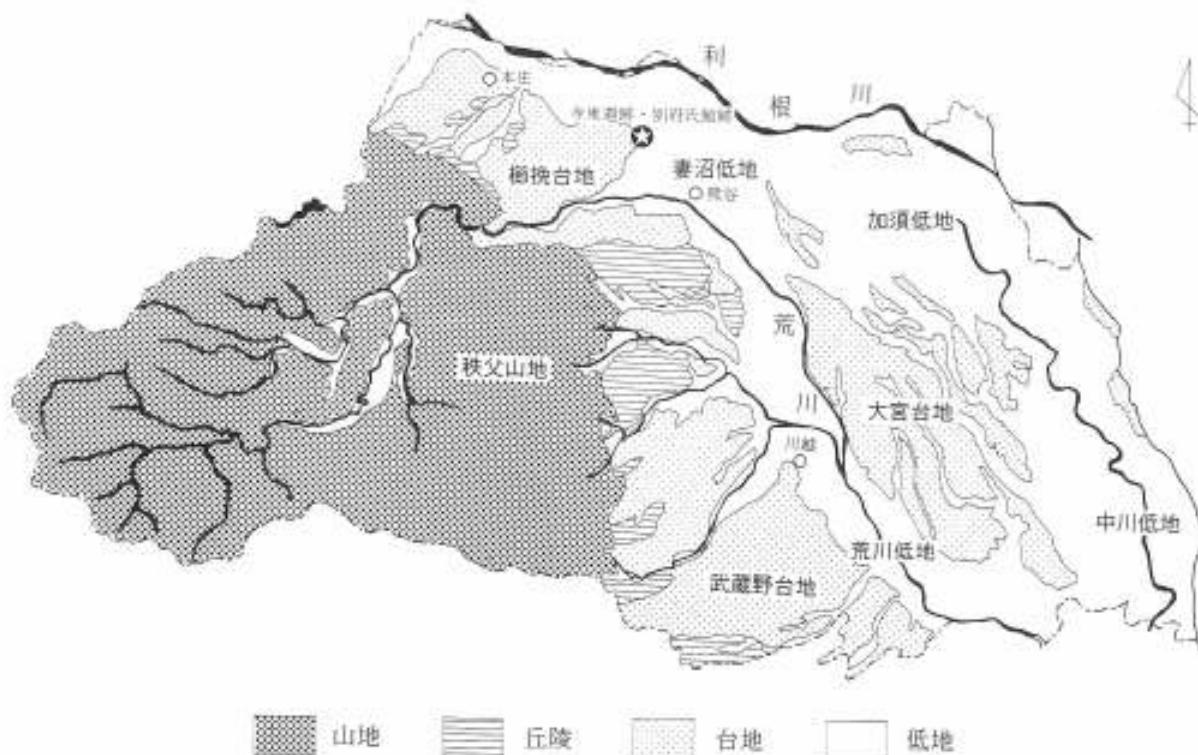
主体者 熊谷市教育委員会

(1) 発掘調査（平成10年度）

教育長	岡嶋一夫 (H10.10.6まで)
	飯塚誠一郎 (H10.10.9より)
教育次長	坂巻 篤
社会教育課課長	氏家保男
副参事	鈴木敏昭
課長補佐	北 俊明
主幹兼係長	金子正之
主任	寺社下博
主任	渡邊 操
主任	吉野 健
主事	松田 哲
発掘調査員	佐々木健策
発掘調査員	市川康弘
発掘調査員	秋本太郎

(2) 整理・報告書刊行（平成11年度）

教育長	飯塚誠一郎
教育次長	坂巻 篤
社会教育課課長	氏家保男
副参事	浅野晴樹
課長補佐	北 俊明
主幹兼係長	金子正之
主任	寺社下博
主任	渡邊 操
主任	吉野 健
主事	松田 哲
発掘調査員	市川康弘
発掘調査員	小林貴郎
発掘調査員	越前谷理



第1図 埼玉県の地形

## II 遺跡の立地と環境

寺東遺跡は熊谷市大字東別府字入生田 994 番地 1 他に、別府氏館跡は同大字東別府字入生田 988 番地他に所在し、JR 高崎線籠原駅の北約 2.0 ~ 2.2 km、荒川から北へ約 5.0 km、利根川から南へ約 6.5 km に位置する。

両遺跡の所在する東別府地区は、熊谷市の北西部にあたり、櫛挽台地の北端及びその北と北東に展開する妻沼低地にある。櫛挽台地は、寄居町末野付近を扇頂に、荒川の两岸に広がる洪積扇状地である荒川扇状地の荒川左岸側の一帯が浸食されてできたものである。そして、本遺跡が立地する妻沼低地は、利根川及びその支流により形成された沖積地であり、熊谷市の大半を覆っている沖積扇状地の新荒川扇状地（熊谷扇状地）と自然堤防が広がる地区に分けられる。本遺跡は、その荒川左岸の新荒川扇状地上、標高約 31 ~ 32 m に立地し水田及び道路となっていた。遺跡を覆っていた土は、関東造盆地運動による地盤の沈降及び荒川の度重なる河川氾濫の影響で、およそ 2 m の厚さをもっていた。

次に、本遺跡を中心に櫛挽台地及び妻沼低地における歴史的環境の一端を簡単に見ていきたいと思う。

まず、旧石器時代から縄文時代であるが、この時期の遺跡の発見例はきわめて少ない状況である。旧石器時代で知られているのは、平安時代の住居跡の覆土中から出土した籠原裏遺跡の黒曜石製の尖頭器が唯一の例である。縄文時代になると、櫛挽台地上さらには妻沼低地上にも発見例が少々増える。本報告の寺東遺跡では前期関山式土器が、三ヶ尻遺跡内の林遺跡でも前期黒浜式期の集落が発見されている。そして、同じく三ヶ尻遺跡内の天王遺跡では中期から後期の集落が発見されており、寺東遺跡でも中期から後期にかけての敷石住居跡、埋甕、土坑が確認されている。妻沼低地では、石田遺跡も存在する。後期に至っては、本遺跡で称名寺式期の埋甕を伴う土坑等が発見されており、豊富な土器群が検出された入川遺跡や深町遺跡も知られる。また、深谷市に目を転じてみると、自然堤防上で発掘調査された中期後葉から後期の遺跡が存在する。本郷前東遺跡・原遺跡・上敷免遺跡・前遺跡等である。このことから、熊谷市だけに限らず深谷市においても妻沼低地の自然堤防上に生活の場を展開していったことが窺える。

一方、縄文時代晩期から弥生時代前半にかけての熊谷市内の発見例はほとんどなく、縄文時代晩期の深谷市の妻沼低地では、前述の遺跡を継承した位置に再び集落が営まれたようである。

次に熊谷市内において本格的展開の知られる遺跡は、現段階では弥生時代中期まで待つことになる。須和田式期の再葬墓が 16 基（うち 3 基は県埋蔵文化財調査事業団平成 2 年度調査）発見された横間栗遺跡、同じく須和田式期の壺が発見されている三ヶ尻遺跡内の上古遺跡が知られる。再葬墓群や土器を伴う土坑が検出されている遺跡は、深谷市上敷免遺跡・明戸東遺跡、妻沼町飯塚遺跡・飯塚南遺跡が知られる。上敷免遺跡では包含層から県内初の前期遠賀川式土器が出土している。地図には示していないが、北島遺跡・平戸遺跡・前中西遺跡も同時期の遺跡として挙げられ、北島遺跡でも再葬墓や土壙墓群が、前中西遺跡では再葬墓と方形周溝墓の 2 タイプの葬送形態が近接して発見されていて特異である。また、行田市小敷田遺跡では関東地方で最も古い段階の須和田式期の方形周溝墓が検出されている。一方、同時期の集落や住居跡が検出されている遺跡としては、関下遺跡・飯塚南遺跡・池上遺跡（地図未掲載）が存在する。中期後半のものは深谷市官ヶ谷戸遺跡・清水上遺跡で中部高地系櫛文土器が出

土している。後期には妻沼低地の各地に遺跡が見られ始め、深谷市明戸東遺跡・妻沼町弥藤吾新田遺跡、東沢遺跡・行田市池守遺跡（後者2遺跡は地図中未掲載）が存在する。明戸東遺跡・東沢遺跡・池守遺跡では吉ヶ谷式土器が、弥藤吾新田遺跡では南関東系の弥生町式土器が出土している。

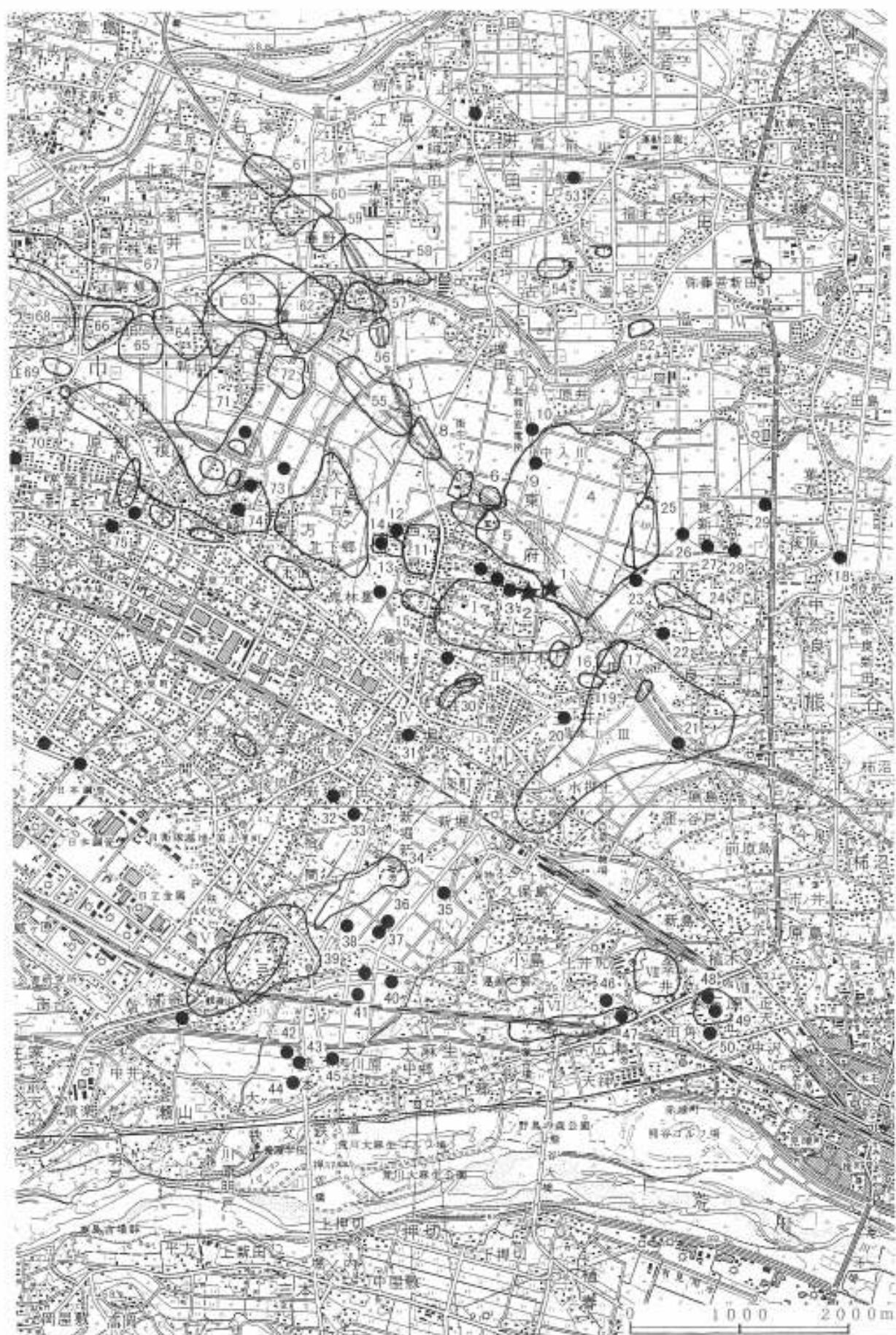
古墳時代に入ると、古墳は台地・自然堤防等の微高地に形成され、集落は台地ばかりでなく低地帯の自然堤防上にも営まれるようになり、次第に遺跡数も増加傾向にある。前期では、妻沼低地に大きく遺跡が展開している。横間栗遺跡・根絡遺跡・別府条里遺跡・一本木前遺跡・中耕地遺跡・東沢遺跡・北島遺跡・天神遺跡（後半3遺跡は地図中未掲載）、深谷市清水上遺跡・明戸東遺跡・東川端遺跡・宮ヶ谷戸遺跡・本郷前東遺跡・上敷免遺跡、弥藤吾新田遺跡、小敷田遺跡等がある。横間栗遺跡では住居跡が3軒、根絡遺跡では住居跡が13軒、北島遺跡では21軒検出されており、根絡遺跡、北島遺跡さらには弥藤吾新田遺跡等は比較的大規模な集落と推定されている。小敷田遺跡では畿内や東海地方等の外来系の土器が多数出土しており、東沢遺跡とあわせて河川跡から鋤・鍬をはじめとした多量の木製農具を出土した遺跡として知られている。また、北島遺跡からも当該期の木製農具が出土している。

墓域の存在としては、上敷免遺跡・東川端遺跡・小敷田遺跡等で方形周溝墓群検出されており、各々9基・5基・17基である。特に東川端遺跡第2号方形周溝墓からは、パレススタイルの大型壺が出土している。

中期の様相は、他の時期と比べて不明な点が多いが、集落が大規模に展開していくのは中期後半以降となるようである。北島遺跡・中条遺跡内の権現山遺跡・常光院東遺跡（後者2遺跡は地図中未掲載）等で造構・遺物が検出されている。北島遺跡では住居跡から須恵器の壺を模倣した土師器小型壺が、権現山遺跡では出現期の壺をもつ住居跡が検出されている。また、集落内の祭祀は東川端遺跡に確認されていて、遺物が集中分布している谷にむかう斜面部で剣形の滑石製模造品が検出されている。また、古墳に目を転じてみると、数こそ少ないが、妻沼低地の福川の自然堤防上に横塚山古墳が存在する。これは、B種横刷毛の埴輪をもつ前方後円墳（後円部は一部欠損）である。

そして、後期になると遺跡は爆発的な増加をみる。台地ばかりでなく自然堤防上にもさらに積極的に進出を図っていったようである。集落は、古墳時代後期から奈良・平安時代へと継続して展開する大規模なものが市内では目立つようになる。櫛挽台地上及び新荒川扇状地上では、櫛の上遺跡で古墳時代後期から平安時代の住居跡が90軒以上検出され、このうち古墳時代後期のものは14軒以上を数える。また同遺跡内の上辻・下辻遺跡でも後期から平安時代の住居跡が50軒以上検出された。三ヶ尻遺跡内の天王遺跡や中学校遺跡でも後期の集落が検出されている。一方妻沼低地の自然堤防上では、一本木前遺跡・天神下遺跡・根絡遺跡・原遺跡・東川端遺跡・新屋敷東遺跡・本郷前東遺跡・上敷免遺跡・砂田遺跡・柳町遺跡・城北遺跡・居立遺跡・飯塚南遺跡・妻沼町道ヶ谷戸遺跡・北島遺跡・小敷田遺跡等が存在する。一本木前遺跡では後期を中心に奈良・平安時代の住居跡が60軒以上検出されており、当該期の祭祀跡も発見され、折り重なるように土師器壺等が出土し、それとともに臼主も出土している。城北遺跡では住居跡157軒が検出され、住居跡内から人、馬・牛等の獣骨が多数出土し、特に人骨が住居跡から検出された例はあまり知られていない。

一方、古墳を見てみると群を形成して築造されているのがわかる。櫛挽台地上の別府古墳群・在家古墳群・龍原裏古墳群・三ヶ尻古墳群・深谷市木の本古墳群・新荒川扇状地上の玉井古墳群・広瀬古墳群・



第2図 周辺遺跡分布図

坪井古墳群・石原古墳群・肥塚古墳群、妻沼低地上の深谷市上増田古墳群・中条古墳群・上之古墳群等が分布する。これらは概ね6世紀から7世紀ないしは8世紀初頭にかけて形成された古墳群である。

別府古墳群は、農夫の埴輪を出土している。本遺跡でもこの古墳群中の1基が新たに発見されている。龍原裏古墳群は川原石乱石積の胴張型横穴式石室を有する古墳群であるが、7世紀末の築造と考えられる八角形の墳形をもつ古墳の存在が知られており、終末期の古墳の様相さらには後述する8世紀初頭創建の西別府廃寺という初期寺院との関係においても見逃すことのできない発見である。三ヶ尻古墳群は、前方後円墳の二子山古墳を盟主墳とする100基以上の古墳で構成される大古墳群であるが、現在でも61基の所在が確認されている（消滅・半壊を含める）。玉井古墳群に含まれると考えられる新ヶ谷戸遺跡1号墳でも川原石使用の胴張型横穴式石室が発掘調査によって発見されている。広瀬古墳群中の宮塚古墳は、上円下方墳という特異な墳形を今に残し、熊谷市唯一の国指定史跡として知られている。

古墳時代後半に自然堤防上の微高地に形成された集落の多くは、増減はするものの奈良・平安時代へと継続されていく。新屋敷東遺跡・明戸東遺跡は、整六式住居を主体に少量の掘立柱建物で構成された集落である。他に上敷免遺跡・柳町遺跡・東川端遺跡・清水上遺跡・根絡遺跡等が挙げられる。奈良時代には、この地域も律令制体制に組み込まれていき、別府条里遺跡等が見られる。このころの中心的遺跡は櫛挽台地上に見られ、この地域には幡羅郡が設置され、台地上に「原郷」の地名が残り、前述のとおり西別府廃寺が存在する。二度の発掘調査によって寺域を区画する大溝、伽藍配置は不明であるが基壇跡、瓦溜まり状造構等とともに軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦が多量に出土し、瓦は8世紀初頭から9世紀後半のものまで確認されており、県内でも滑川町寺谷廃寺に次いで最も古い建立の寺院の一つとし

第2回掲載遺跡一覧表

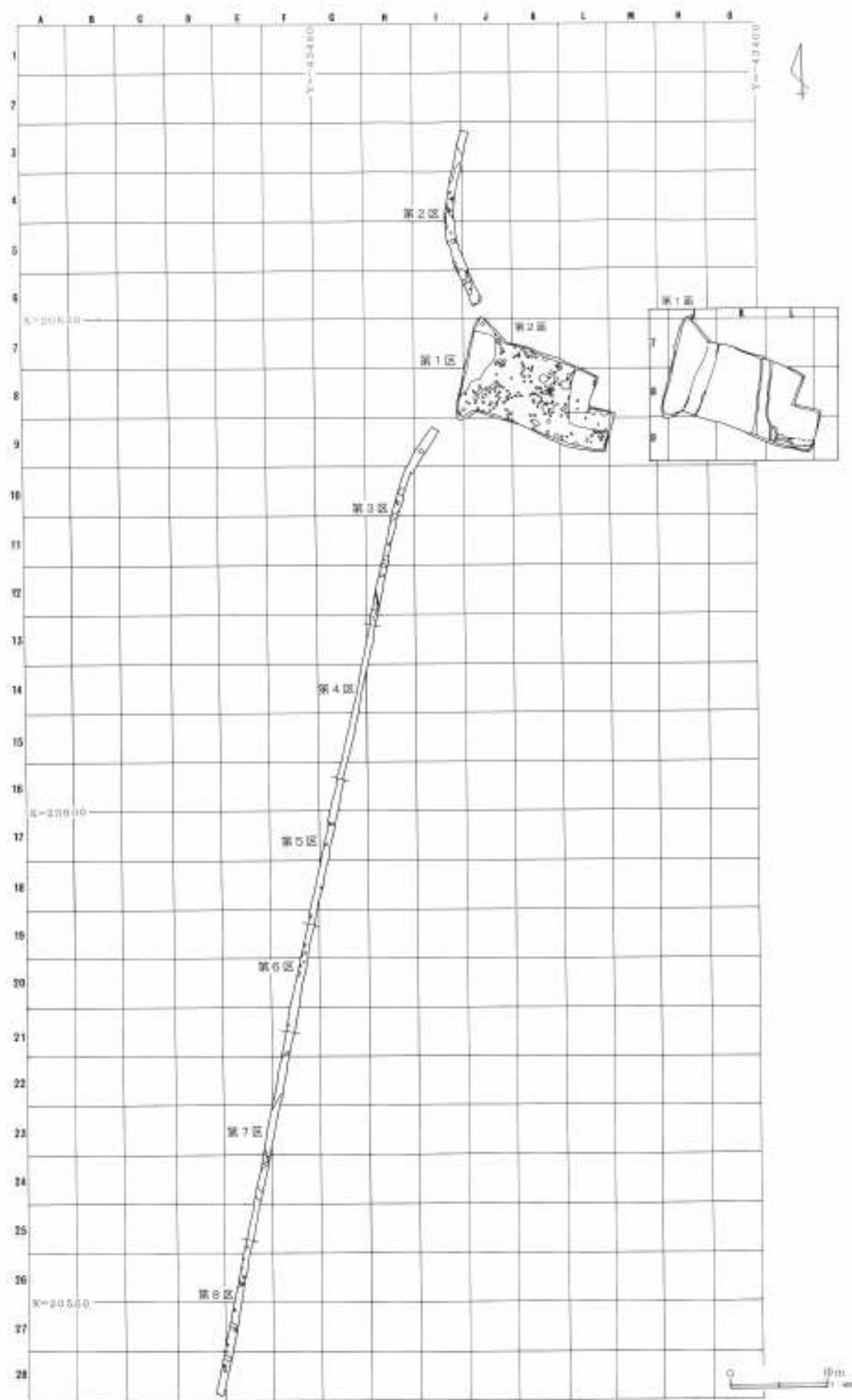
1 寺東遺跡	2 別府氏館跡	3 別府城跡	4 別府条里遺跡	5 石田遺跡	6 関下遺跡
7 横間栗遺跡	8 根絡遺跡	9 深町遺跡	10 入川遺跡	11 西別府館跡	12 西方遺跡
13 西別府廃寺	14 西別府祭祀遺跡	15 原遺跡	16 玉井陣屋跡	17 新ヶ谷戸遺跡	
18 奈良東耕地遺跡	19 水押下遺跡	20 稲荷木上遺跡	21 下河原上遺跡	22 奈良氏館跡	
23 天神下遺跡	24 土用ヶ谷戸遺跡	25 一本木前遺跡	26 中耕地遺跡	27 西通遺跡	
28 東通遺跡	29 横塚山古墳	30 在家遺跡	31 龍原裏遺跡	32 拾六間後遺跡	33 堂西遺跡
34 棍の上遺跡	35 東遺跡	36 黒沢館跡	37 黒沢遺跡	38 若松遺跡	39 三ヶ尻遺跡
40 庚申塚遺跡	41 松原遺跡	42 社裏北遺跡	43 社裏遺跡	44 社裏南遺跡	45 台遺跡
46 高根遺跡	47 天神前遺跡	48 兵部裏屋敷跡	49 御蔵場跡	50 弥藤吾新田遺跡	
51 道ヶ谷戸遺跡	52 飯塚遺跡	53 飯塚南遺跡	54 清水上遺跡	55 前遺跡	56 居立遺跡
57 城北遺跡	58 柳町遺跡	59 砂田遺跡	60 ウツギ内遺跡	61 原遺跡	62 明戸東遺跡
63 新田裏遺跡	64 新屋敷東遺跡	65 本郷前東遺跡	66 上敷免北遺跡	67 上敷免遺跡	
68 八日市遺跡	69 幡羅太郎館跡	70 宮ヶ谷戸堀ノ内遺跡	71 東川端遺跡	72 城下遺跡	
73 東方城跡	74 斧鼻和城跡				
I 別府古墳群	II 在家古墳群	III 玉井古墳群	IV 龍原裏古墳群	V 三ヶ尻古墳群	
VI 広瀬古墳群	VII 坪井古墳群	VIII 石原古墳群	IX 上増田古墳群	X 木の本古墳群	

て認識されている。また、その北西約200mの湯殿神社裏の湧水箇所には西別府祭祀遺跡が所在し、奈良時代を中心とする古墳時代後期から平安時代までの土師器・須恵器と共に馬形・櫛形・勾玉形・有孔円板形・有線円板形・劍形等の滑石製模造品が約160点発見されており、県内でも類例がほとんどない水辺の祭祀の実態を考える上で貴重な遺跡である。西別府廃寺は、この祭祀遺跡との関係を考慮に入れれば、幡羅郡の郡寺的な機能を有すると考えることもできるし、周辺の古墳群を形成した有力氏族との関係も想定できる。奈良・平安時代の集落遺跡としては、在家遺跡・籠原裏遺跡・拾六間後遺跡・堂西遺跡・飯塚南遺跡・新ヶ谷戸遺跡・奈良東耕地遺跡・不二ノ腰遺跡・高根遺跡・北島遺跡がある。特に北島遺跡は7世紀から12世紀の大規模な集落で、多数の住居跡とともに大規模な堀立柱建物跡・道路状遺構・河川跡等興味深い発見がされている。一本木前遺跡の11世紀初頭の住居跡からは、瑞花鷦鷯八棱鏡が出土し、県内初の住居跡出土例として注目されている。

平安時代末から中世になると、武藏七党やその他の在地武士団の館跡が散在するようになる。別府城跡・別府氏館跡・西別府館跡・玉井陣屋跡・奈良氏館跡・黒沢館跡・兵部裏屋敷、深谷市東方城跡・庁鼻和城跡・幡羅太郎館跡等であるが、いずれの居館も実態は不明である。その中で残りの良いもの中に、本遺跡の東に所在する別府城跡がある。別府氏の居館で方形の敷地に土塁の一部と空堀を良く残している。また、三ヶ尻地区に所在する黒沢館跡は、発掘調査によって出耕形に張り出して台形に全周する堀・土塁の一部・2箇所の虎口・柱穴跡・土壙・集石遺構等が検出され、渡辺舉山の記した『訪頃録』に残る「黒沢館跡」の記載と遺構が合致した貴重な例である。遺物としては、14～15世紀の年号が記載された板石塔婆や15～16世紀の瀬戸・美濃焼の陶器・内耳土器・土師質土器等が出土している。北側に所在する桶の上遺跡でも、15～16世紀の土壙・集石遺構とともに比較的深くコーナーをもつ溝跡が検出されており、館跡の一部である可能性が考えられている。墓域としては、三ヶ尻遺跡内の天王遺跡・桶の上遺跡・若松遺跡・社裏北遺跡・社裏遺跡・社裏南遺跡・西方遺跡等があげられ、櫛換台地及びそれを仰ぐ新荒川扇状地上に分布する。桶の上遺跡・若松遺跡では土葬墓・火葬墓等が検出されており、内耳土器・土師質土器・白磁・青磁・常滑・瀬戸等の陶磁器・板石塔婆・石臼等が出土している。また、黒沢館跡及び桶の上遺跡の南西に位置する社裏北遺跡・社裏遺跡・社裏南遺跡では土壙墓群が、台地上の天王遺跡でも墓地群が、さらに台地の縁辺部に位置する西別府地区の西方遺跡では中世から近世にかけての150基以上もの土壙墓が幾重にも重なり合って検出されている。しかし、中世以降の歴史的実態はまだまだ情報不足で、今後の調査成果によるところが多く、情報の蓄積に期待するところでであろう。



第3図 寺東遺跡・別府氏館跡位置図



第4図 寺東遺跡・別府氏館跡全測図

### III 遺跡の概要

#### 1 調査の方法

発掘調査の方法は、1辺5mのグリッド方式を用いて行い、調査区全体を網羅できる様に、北西隅をA-1として東へA・B・C・・・、南へ1・2・3・・・とし、Aラインは北から南へA-1・A-2・A-3・・・と呼称した。Bライン以東もAラインと同様に呼称し、グリッド設定を行った。

発掘調査は、重機による遺構確認面までの表土剥ぎを行った後、上記のグリッド設定を行った。なお、座標は国家座標IX系に基づく基準点測量による。表土剥ぎ後は、人力による遺構確認のための精査を実施し、確認された各遺構は各々手堀りを行った。原則として遺物は必要に応じて写真撮影後、遺構ごとに一括して慎重に取り上げた。遺構は写真撮影した後、実測を行った。そして各々の調査区において最後に遺構全体の写真撮影を行い、全測図の実測を行った。

#### 2 検出された遺構と遺物

本調査によって検出された遺構は、第1区では第1面で平安時代の溝跡3条が土師器壺・甕・台付甕、須恵器壺、形象埴輪が検出された。第2面では遺構は調査区全体に分布し、縄文時代中期～後期の住居跡と推定されるピット群8箇所、ピット181基（住居跡のもの含む）、土坑7基、土器廃棄遺構1基、縄文土器深鉢形土器・浅鉢形土器、打製石斧・石鎌・搔器・石錐・石錘等の石器が検出された。第2区、第3区、第5区、第6区、第8区においても縄文時代中期～後期（後期初頭が主体）の土坑、ピット、溝跡、縄文土器深鉢形土器等が検出された。第7区においては円墳と推定される古墳の一部が検出され、周溝内から円筒埴輪が検出された。遺物の総量は、コンテナ10箱分の出土量であった。

### IV 遺構と遺物

#### 1 寺東遺跡第1区の調査

##### i 第1面

標高30.20～30.40mに堆積する灰色土を地山として古墳時代から平安時代の面が存在した。以下第2面の縄文時代面まで灰白色、灰色、明青灰色の粘土、砂、シルト層が堆積していた。これらは氾濫土と考えられ、約1.10～1.30mの厚さをもっていた。

##### （1）溝跡

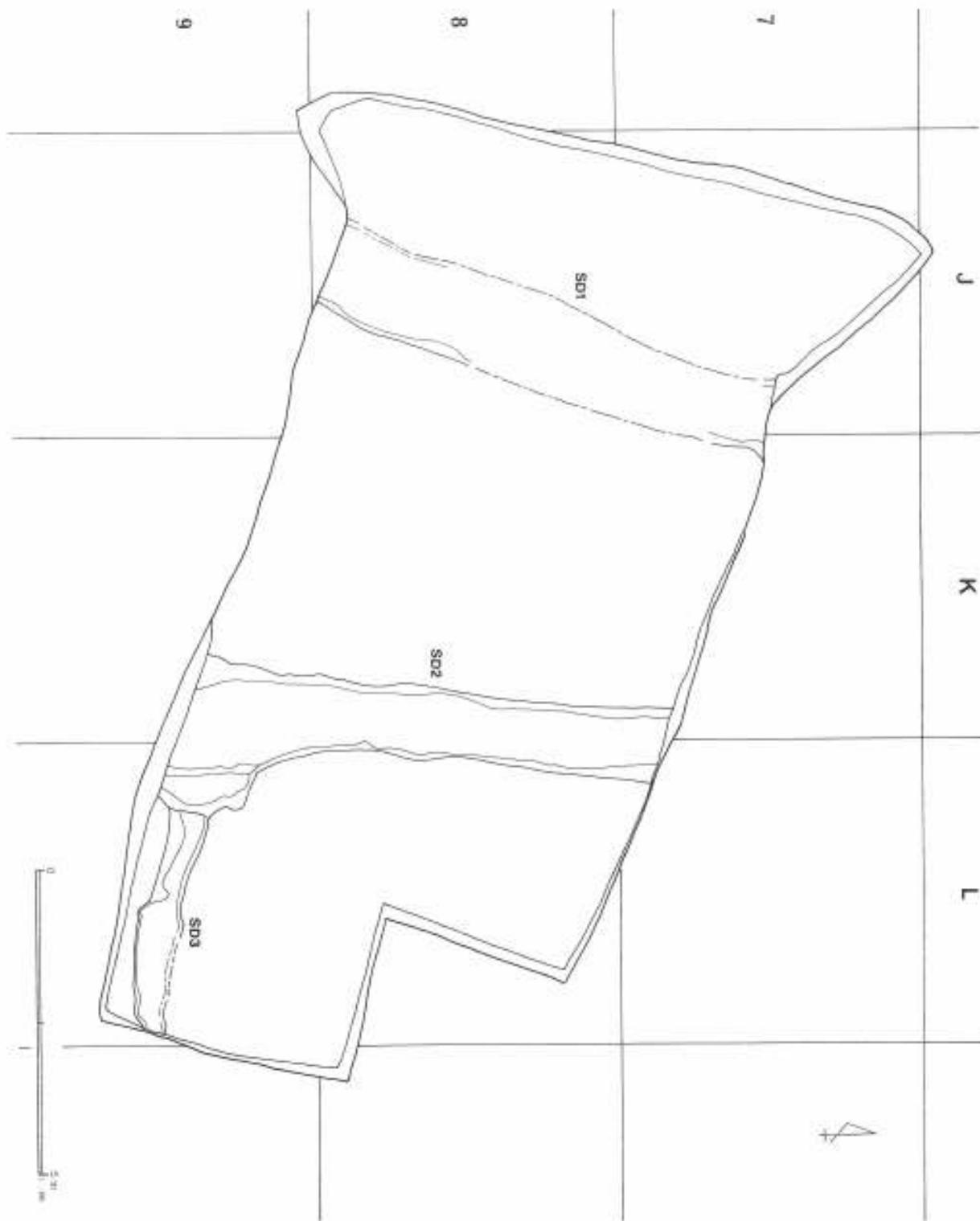
溝跡は第1区の上層の第1面で3条確認された。第1号溝跡は調査区の東部で、第2・3号溝跡は調査区の西部で検出され、第1号溝跡と第2号溝跡はほぼ並行していた。第2号溝跡と第3号溝跡はほぼ直角に接続していた。

以下各溝跡ごとに詳細を記載する。

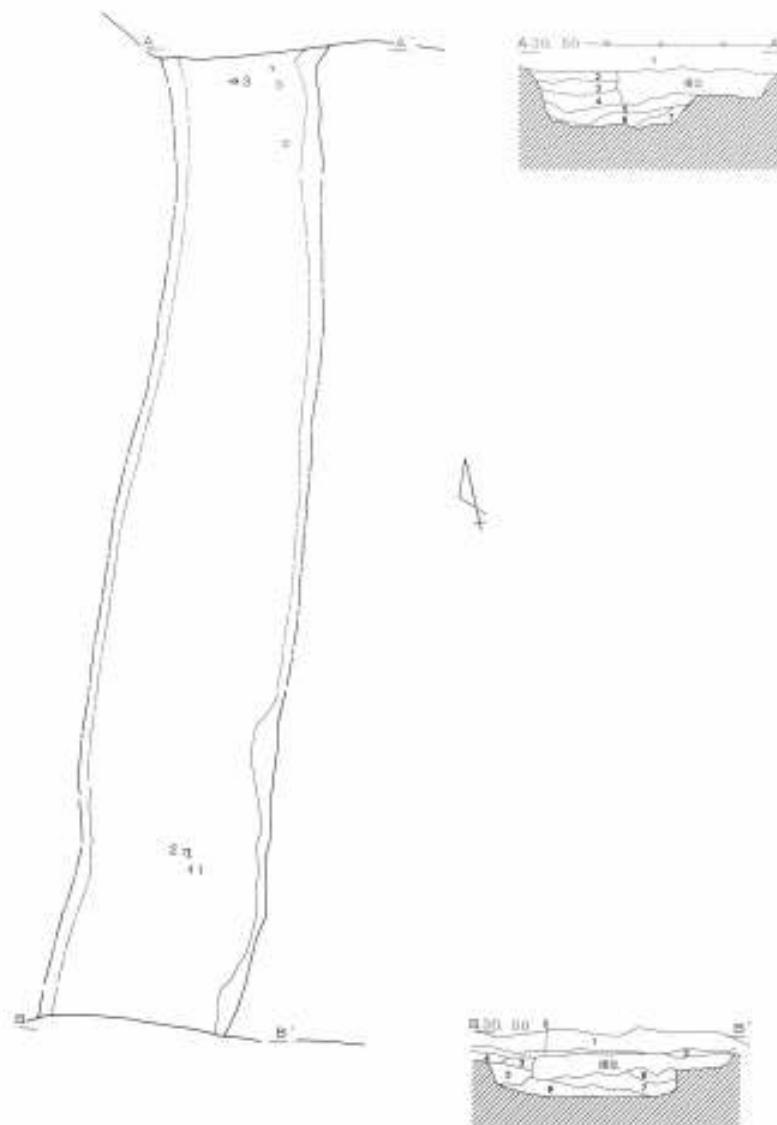
#### 第1号溝跡（第6図、第1表）

J-7・8、K-7グリッドから検出した。やや西に傾き真っ直ぐに南北へと走っていた。

規模は、検出全長7.60m、幅1.18m～1.56m、深さ0.20～0.43mであった。溝幅は、南端部で最大幅をもっていた。断面形状は、箱形ないしは逆台形で北端部が深いものであった。



第5図 寺東遺跡第1区第1面遺構図



第1号溝跡（ルート1）

1 黄土

2 黄灰褐色粘土上 2.3YR-4/1 [Xへくしまる、淡褐色土 2.5YR-3/1、粉分若干、火山灰若干、粒子少量含む]

3 淡灰色粘土 7.5Y-4/1 [淡白色粘土 4Y-3/2 ブロック状、黄褐色土 2.5Y-4/1 ブロック状、粉分少量含む]

4 淡灰褐色土 10YR-4/1 [淡白色砂質土 3Y-3/2 ブロック、粒子若干、灰白色土 5Y-5/1 粒子少量、火山灰若干含む]

5 淡灰褐色質土 3Y-5/1 [淡灰色土 10YR-4/1 多量に混じる、灰白色土 2.5Y-4/2 粒子多量、灰白色 3Y-3/1 ブロック少量含む]

6 淡灰褐色粘性土 3Y-7/1 [褐灰色土 10YR-4/1 多量に混じる、灰白色土 3Y-3/2 ブロック少量含む]

7 淡灰白色土 4/2 [淡灰褐色土 10YR-4/1 多量に混じる、粉分若干含む]

第1号溝跡（ルート1）

1 黄土

2 黄褐色粘土 3Y-7/1 [淡褐色土 7.5YR-3/2 接する、しめる、粉分多量に含む]

3 淡灰褐色粘土 3Y-7/1 [淡褐色土 2.5YR-3/1 粒子少量、淡黄色土 3Y-3/2 粒子少量含む]

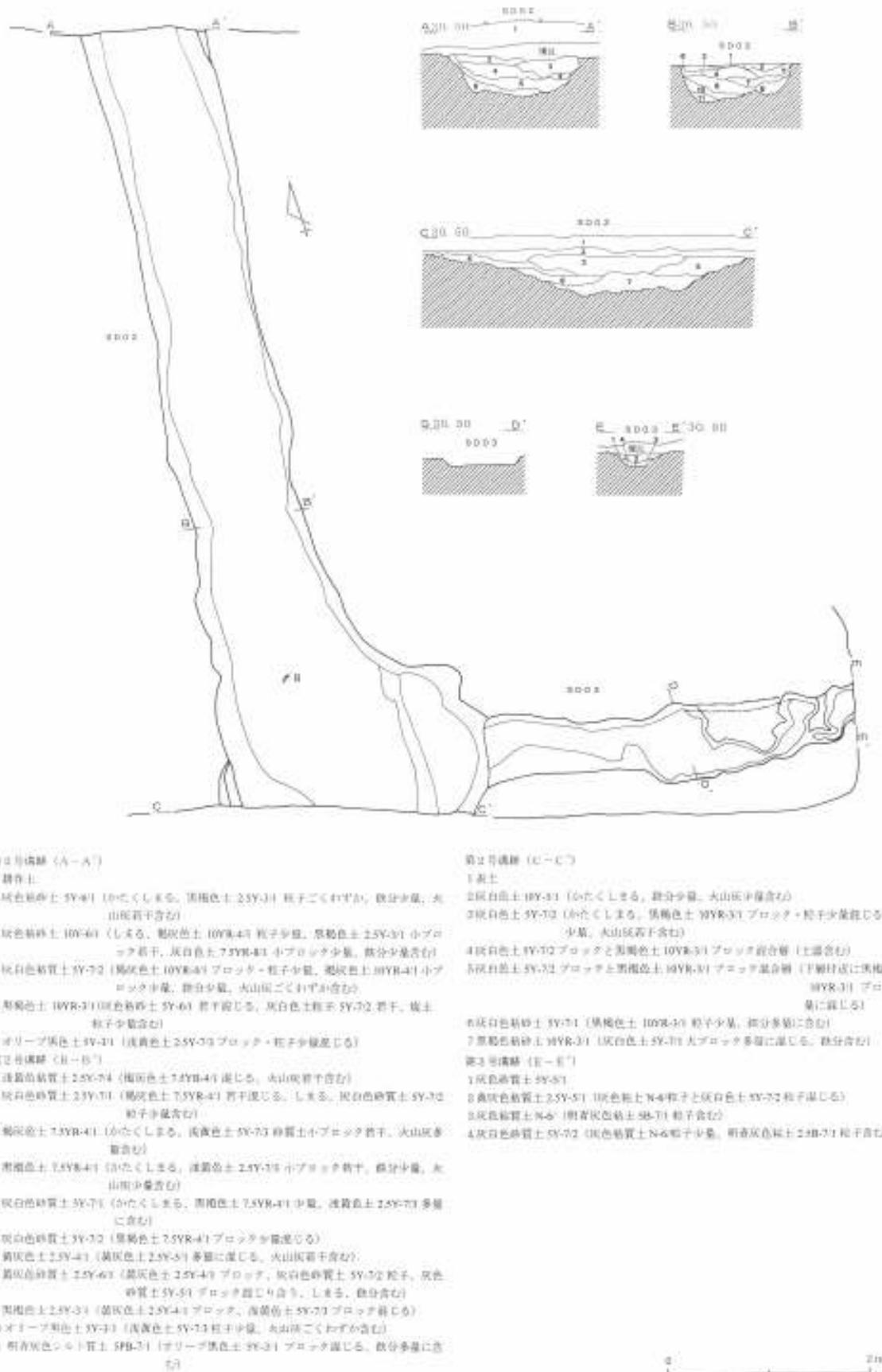
4 淡灰色土 4/4 [淡褐色土 2.5YR-3/1 粒子少量、淡黄色土 3Y-3/2 粒子少量含む]

5 淡灰色土 3Y-3/2 [淡褐色土 10YR-4/1 多量に混じる、火山灰若干、火山灰若干]

6 褐灰色土 10YR-4/1 [淡褐色土 4/4 ブロック状、火山灰若干]

7 黑褐色土 10YR-3/1 [褐灰色土 10YR-4/1 過ごり、浅青色土 3Y-7/3 ブロック少量含む]

第6図 第1区第1面第1号溝跡



第7図 第1区第1面第2・3号溝跡

出土遺物は、少なく土師器壺、須恵器壺、形象埴輪片などが出土した。

時期は、おおよそ9世紀代と考えられる。

#### 第2号溝跡（第7図、第1表）

K・L-7・8・9グリッドから検出した。ほぼ南北に真っ直ぐ走り、第3号溝跡と南端で接続していた。

規模は、検出全長7.85m、幅1.02～2.56m、深さ0.36～0.40mであった。溝幅は、南端の第3号溝跡と接続する箇所で最大であった。断面形状は逆台形状で、最大幅をもつ箇所が最もゆるい傾斜をもつものであった。

出土遺物は、第1号溝跡と同様に少なく、弥生土器壺、土師器台付壺、須恵器壺、形象埴輪片などが出土した。

時期は、おおよそ9世紀末から10世紀初頭と考えられる。

#### 第3号溝跡（第7図）

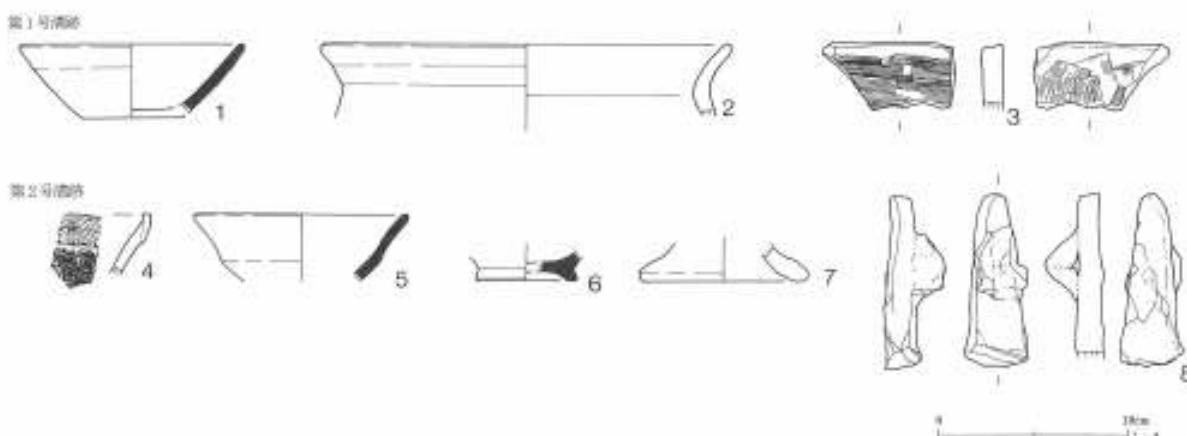
L-9グリッドから検出した。やや南に傾き東西に走り、第1号溝跡と西端で接続していた。

規模は、検出全長3.66m、幅0.50～0.78m、深さ0.08～0.12mであった。溝幅は、中央部で最大であった。断面形状は逆台形であった。

溝は浅く、西部でははっきりとプランが把握できなかった。

出土遺物は、やはり少なく土師器壺破片が出土したが図示可能なものではなかった。

時期は、おおよそ9世紀後半と考えられる。



第8図 第1区第1面溝跡出土遺物

第1表 第1区第1面溝跡出土遺物観察表（第8図）

番号	器種	法量(cm)	手法・形態の特徴等	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	壺	口径12.0 残存高3.7	内外面回転ナデ。 口縁部は直線的にハの字に開いて立ち上がる。	白色粒子、赤褐色 粒子、雲母含む。	灰色10Y-5/1	普通	口縁の15%	
2	壺	口径21.6 残存高3.8	口縁部内外面ヨコナデ。 口縁端部は大きくハの字に開いて立ち上がる。	白色粒子、赤褐色 粒子、雲母含む。	外面：にぶい褐色 7.5YR-5/4 内面：灰黄褐色 10YR-6/2	良好	口縁の15%	
3	形象埴輪 太刀形	残存長7.2 厚さ1.0	裏・裏面剥毛目(端部端は施されてない)。端 部ナデ調整。	赤褐色粒子、白色 砂粒、黒雲母含む。	にぶい橙色5YR- 5/4	普通	柄頭の板 状部の一 部	

番号	器種	法量(cm)	手 法・形態の特徴等	胎 土	色 調	純成	残存率	備 考
4	壺	口径(15.0)	口縁部折り返し部外面單節R上縁文施文。外 面斜め縱方向のミカギ施す。内面ナデ。 口縁基部は角張っている。折り返し口縁。	白色微粒子、赤褐色粒子含む。	外面：褐色 10YR-4/1 内面：オリーブ 黑色5Y-3/1	良好	口縁の一部	
5	壺	口径11.4 残存高4.0	口縁部内外面ヨコナデ(摩滅が著しく不明 瞭)。 口縁部はハの字に開き。体部はゆるやかなS 字を描いて口縁部へと移行する。底径は小さ め。	黒色粒子、赤褐色 粒子含む	深褐色10YR -8/3	やや 不良	口縁の15 %	
6	壺	残存高1.6 底径(5.4)	内外面調整不明。底部回転系切り？高台ナデ つけ。 高台はハの字を呈する。	白色粒子、長石 (43mm大)含む。	外面：にぶい桂 色5YR-6/4 内面：灰黄褐色 10YR-4/2	普通	底部の20 %	
7	台付壺	残存高2.0 底径(9.0)	内外面ヨコナデ。 端部は丸く肉厚。	白色微粒子、赤褐色 粒子含む。	橙色5YR-6/6 にぶい黄褐色 10YR-7/3	良好	脚台部の 40%	
8	形象切輪 太刀形	残存長 9.1 残存幅 3.4 厚さ1.4	粘土板に粘土紙を折り曲げてつくった三輪玉 を貼りつけて、ナデで整形。 右半分・下部欠損。	赤褐色粒子、43mm 大の細礫、黒墨等 含む。	橙色5YR-6/6	良好	柄頭の一 部	玉輪太刀 の柄頭の 護手部塗 (三輪玉の とりつけ 部)

## ii 第2面

第2面は縄文時代中期から後期初頭を中心とした面で、現地表面下約1.8～2.0m、標高29.00～29.10mであった。にぶい黄褐色土で、ソフトローム層である明黄褐色土まで約0.20～0.30mの厚みをもっていた。遺構の覆土は黒褐色土を主体にしたものであった。

### (1) ピット群 (住居跡)

ピットは、総数にして181基検出した。ピットは調査区全体に分布して検出されたが、比較的まとまりをもつブロックがいくつか確認された。これらは住居跡と推定され、8軒分であり第1～8号住居跡と呼称した。出土遺物としては、検出されたピットは少なく全体の約35%で、概ね縄文時代中期～後期で、縄文時代後期初頭を主体としていた。また、破片の資料がほとんどであった。各々の住居跡に関しても、第1号住居跡と第2号住居跡は縄文時代中期が主体だが、第3～6号住居跡は縄文時代後期が主体であった。

以下、住居跡と推定されるピット群を中心に詳細を記載する。事実記載のないピットについては、一覧表を参照されたい。(第10・11図、第2表)

#### 第1号住居跡 (第10・12図)

K-7グリッドから検出した。住居跡の北側大部分は、調査区域外のため検出されなかった。住居跡の西側には第2号住居跡が、南側には第3号住居跡が検出された。柱穴のみが残存し、壁や、壁溝、炉跡は検出されなかった。そのため住居跡の平面プラン、規模は明確ではないが、本住居跡に属すると考えられる柱穴は、推定径約5.0mの範囲から検出されている。

柱穴と推定されるピットは、10基である。深さは、P 56=16cm、P 57=7cm、P 58=12cm、P 60=27cm、P 73=22cm、P 74=19cm、P 75=30cm、P 125=15cm、P 126=8cm、P 180=25cmであった。P 74・P 75・P 180を除いてほぼ環状に巡っており、住居跡の壁に沿って柱穴が巡っており、P 74・P 75・P 180を除いてほぼ環状に巡っており、住居跡の壁に沿って柱穴が巡っている。



第9図 寺東遺跡第1区第2面遺構図

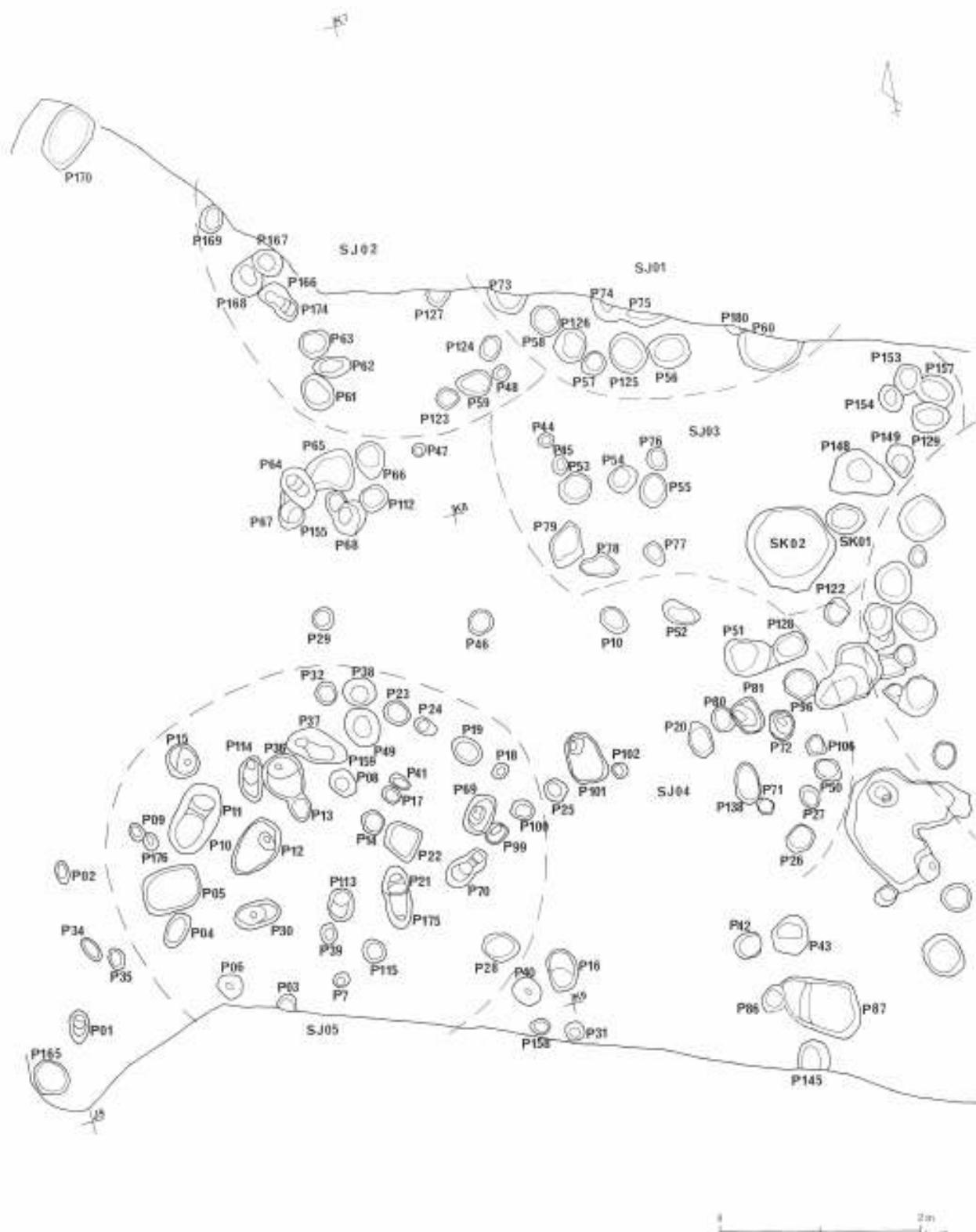
ていたと考えられる。

出土遺物は、いずれも小破片で、図示可能な遺物は、P 126 から出土した第12図1の土器だけであった。深鉢形土器の破片で頸部に横位の隆起線が施され、その下は単節R.L.縄文が施文される。

時期は、縄文時代中期と考えられる。

#### 第2号住居跡（第10図）

J・K-7グリッドから検出した。住居跡の北側は、調査区域外のため検出されなかった。住居跡の東側には第1号住居跡が、南東側には第3号住居跡が検出された。柱穴のみが残存し、壁、壁溝、炉跡は検出されなかった。そのため住居跡の平面プランや規模は明確ではない。本住居跡に属すると考えら



第10図 第1区第2面ピット群 (1)

れる柱穴が検出された範囲は、推定径約5.0mであった。

柱穴と推定されるビットは、12基である。深さは、P 48 = 14cm, P 59 = 12cm, P 61 = 13cm, P 62 = 15cm, P 63 = 10cm, P 123 = 8cm, P 124 = 14cm, P 127 = 9cm, P 166 = 15cm, P 167 = 19cm, P 168 = 20cm, P 169 = 13cmであった。P 59・P 123・P 124・P 61・P 168・P 169はほぼ環状に巡っており、住居跡の壁に沿って柱穴が巡っていたと考えられる。

出土遺物はほとんど検出されず、いずれも小破片で図示可能な遺物ではなかった。

時期は、縄文時代中期が主体と考えられる。

#### 第3号住居跡（第10図）

K・L-7・8グリッドから検出した。住居跡の北側は、第1・3号住居跡及び調査区域外のため検出されなかつた。住居跡の東側には第6号住居跡、南側には第4号住居跡が検出された。柱穴のみが残存し、壁、壁溝、炉跡は検出されなかつた。そのため住居跡の平面プランや規模は明確ではない。本住居に属すると考えられる柱穴は、推定径約5.0mの範囲から検出されている。

柱穴と推定されるビットは、13基である。深さは、P 53 = 8cm, P 54 = 7cm, P 55 = 8cm, P 76 = 10cm, P 77 = 20cm, P 78 = 16cm, P 79 = 16cm, P 129 = 24cm, P 148 = 20cm, P 149 = 21cm, P 153 = 13cm, P 154 = 25cm, P 157 = 21cmであった。

出土遺物はほとんど検出されず、いずれも小破片で図示可能な遺物ではなかった。

時期は、縄文時代後期が主体と考えられる。

#### 第4号住居跡（第10・12図）

K-8グリッドから検出した。住居跡の北側には第3号住居跡が、西側には第5号住居跡が、東側には第6号住居跡が検出された。また、住居跡の北西及び南西の一部は、表土除去の際に掘削し過ぎた影響か柱穴と思われるビットが確認されなかつた。柱穴のみが残存し、壁や、壁溝、炉跡は検出されなかつた。そのため住居跡の平面プラン、規模は明確ではないが、本住居跡に属すると考えられる柱穴は、推定径約4.0mの範囲から検出されている。

柱穴と推定されるビットは、16基である。深さは、P 10 = 20cm, P 20 = 8cm, P 25 = 11cm, P 26 = 11cm, P 27 = 13cm, P 50 = 15cm, P 51 = 16cm, P 52 = 15cm, P 72 = 16cm, P 80 = 6cm, P 81 = 17cm, P 96 = 16cm, P 101 = 9cm, P 106 = 10cm, P 128 = 15cm, P 138 = 10cmであった。P 10・P 52・P 128・P 96・P 106・P 50・P 27・P 26・P 25はほぼ環状に巡っており、住居跡の壁に沿って柱穴が巡っていたと考えられる。

出土遺物はいずれも小破片で、図示可能な遺物は第12図2・3の土器だけであった。2は第27号ビットから出土し、沈線文が施されたものである。3は第96号ビットから出土し、把手状のもので蕨状の太い沈線が施文されている。

時期は、縄文時代後期と考えられる。

#### 第5号住居跡（第10図）

J-8グリッドから検出した。住居跡の南側は、調査区域外のため検出されなかつた。住居跡の東側には第4号住居跡が検出された。柱穴のみが残存し、壁、壁溝、炉跡は検出されなかつた。そのため住居跡の平面プランや規模は明確ではない。本住居跡に属すると考えられる柱穴が検出された範囲は、推

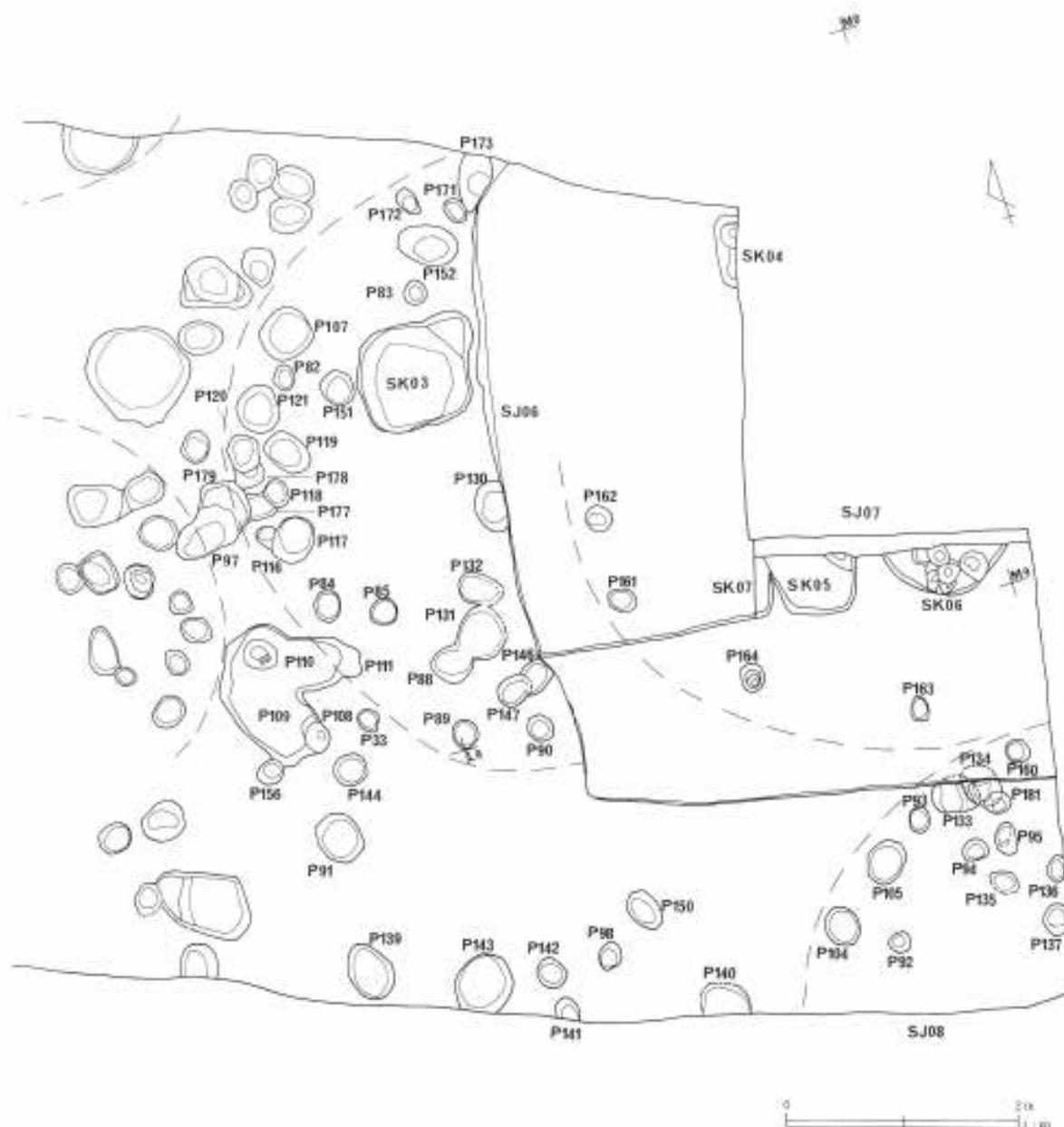
定径約4.5mであった。

柱穴と推定されるビットは、23基である。深さは、P 3 = 14cm, P 4 = 11cm, P 6 = 15cm, P 10 = 20cm, P 11 = 13cm, P 12 = 14cm, P 15 = 17cm, P 19 = 10cm, P 21 = 15cm, P 24 = 9cm, P 28 = 14cm, P 32 = 13cm, P 36 = 21cm, P 37 = 11cm, P 38 = 13cm, P 49 = 15cm, P 69 = 11cm, P 70 = 11cm, P 100 = 10cm, P 113 = 14cm, P 114 = 16cm, P 115 = 13cm, P 175 = 10cmであった。P 32・P 38・P 24・P 19・P 100・P 28・P 3・P 6・P 4・P 15はほぼ環状に巡っており、住居跡の壁に沿って柱穴が巡っていたと考えられる。

出土遺物はいずれも小破片で、図示可能な遺物ではなかった。

時期は、縄文時代後期が主体と考えられる。

#### 第6号住居跡（第11・12図）



第11図 第1区第2面ピット群(2)

K・L-8・9グリッドから検出した。住居跡の東側半分は、第7号住居跡及び表土除去の際の掘削のため検出されなかった。住居跡の東側には第7号住居跡が検出された。柱穴のみが残存し、壁、壁溝、炉跡は検出されなかった。そのため住居跡の平面プランや規模は明確ではない。本住居に属すると考えられる柱穴は、推定径約5.5mの範囲から検出されている。

柱穴と推定されるピットは、21基である。深さは、P 82 = 17cm, P 83 = 31cm, P 84 = 17cm, P 85 = 12cm, P 88 = 14cm, P 89 = 20cm, P 90 = 28cm, P 107 = 23cm, P 117 = 10cm, P 119 = 21cm, P 120 = 13cm, P 121 = 24cm, P 130 = 13cm, P 131 = 11cm, P 132 = 12cm, P 147 = 11cm, P 151 = 24cm, P 152 = 35cm, P 171 = 17cm, P 172 = 18cm, P 173 = 27cmであった。P 147・P 88・P 85・P 117・P 121・P 107・P 152・P 173はほぼ環状に巡っており、住居跡の壁に沿って柱穴が巡っていたと考えられる。

出土遺物はいずれも小破片であったが、図示可能な遺物は第12図4～6の土器で、いずれも第152号ピットから出土した深鉢形土器の破片であった。4は3本の沈線懸垂文、磨消懸垂文が垂下する。地文は単節LR縄文。5は口縁部に刻みのある隆帯が巡り、以下沈線の区画文が施される。区画内には単節LR縄文を充填する。6は口縁部に内側へのかえりがある。横帯区画文を配し沈線文により三角形文を描き、単節LR縄文を充填する。

時期は、縄文時代後期が主体と考えられる。

#### 第7号住居跡（第11図）

L・M-8・9グリッドから検出した。住居跡の北及び東側は、調査区域外のため検出されなかった。住居跡の西側には第6号住居跡が、南側には第8号住居跡が検出された。表土除去の際の掘削のため柱穴一部のみが残存し、壁、壁溝、炉跡は検出されなかった。そのため住居跡の平面プランや規模は明確ではない。本住居跡に属すると考えられる柱穴が検出された範囲は、推定径約5.0mであった。

柱穴と推定されるピットは、4基である。深さは、P 161 = 14cm, P 162 = 25cm, P 163 = 19cm, P 164 = 19cmであった。いずれのピットもほぼ環状にめぐっており、住居跡の壁に沿って柱穴が巡っていたと考えられる。

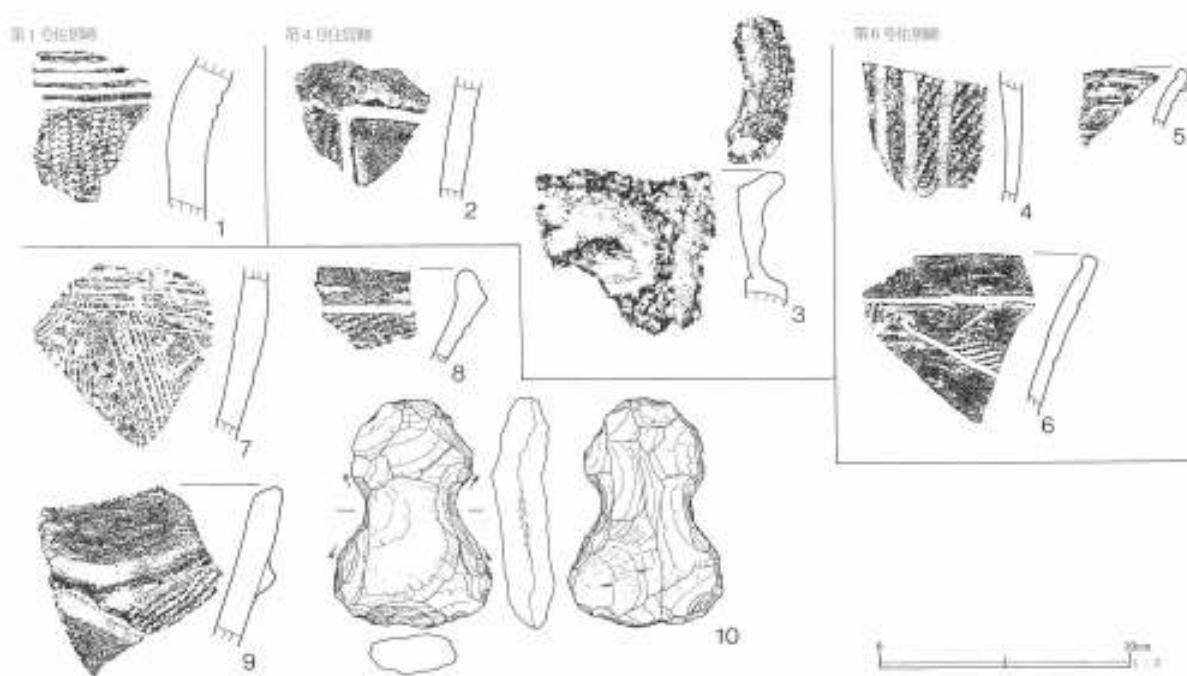
出土遺物は検出されなかった。

#### 第8号住居跡（第11図）

L-9グリッドから検出した。住居跡の東及び南側は調査区域外のため検出されず、住居跡の一部のみの検出であった。住居跡の北側には第7号住居跡が検出された。柱穴のみが残存し、壁、壁溝、炉跡は検出されなかった。そのため住居跡の平面プランや規模は明確ではない。本住居に属すると考えられる柱穴は、推定径約6.0mの範囲から検出されている。

柱穴と推定されるピットは、12基である。深さは、P 92 = 24cm, P 93 = 12cm, P 94 = 16cm, P 95 = 15cm, P 104 = 24cm, P 105 = 19cm, P 133 = 20cm, P 134 = 18cm, P 135 = 15cm, P 136 = 14cm, P 137 = 16cm, P 160 = 12cmであった。P 104・P 105・P 93・P 133・P 134・P 160はほぼ環状に巡っており、住居跡の壁に沿って柱穴が巡っていたと考えられる。

出土遺物は検出されなかった。



第12図 第1区第2面ピット群出土遺物

#### ピット群出土遺物（第12図）

その他のピットから出土した遺物をまとめる。

7は第68号ピットから出土し、深鉢形土器破片で横、斜め、蛇行して施文する。8は第151号ピットから出土し、口縁に沿って沈線文が施され以下單節LR縄文施文。9は第122号ピットから出土し、波状縁の深鉢形土器破片で口縁部に無文帯があり、隆起線の区画内に単節LR縄文施文。

10は第109号ピットから出土した分銅形の打製石斧である。

いずれも縄文時代後期と考えられる。

第2表 第1区第2面ピット一覧表（表中、括弧付数値は推定値）

番号	位置	プラン	長軸×短軸×深さ(cm)	出土遺物	時期	重複關係
1	J-8	橢円形	3.2×2.2×1.0	縄文土器	前期？	
2	J-8	橢円形	2.3×1.6×5	なし		
5	J-8	長方形	6.0×4.6×1.5	縄文土器	後期	
7	J-8	円形	2.0×1.8×9	なし		
8	J-8	橢円形	3.3×2.5×1.0	縄文土器	後期？	
9	J-8	橢円形	×1.5×4	なし		P176
13	J-8	橢円形	×1.4×8	なし		P36
14	J-8	橢円形	2.8×2.7×7	なし		
16	J-K-8	橢円形	3.3×4.7×1.2	なし		
17	J-8	橢円形	2.2×1.7×8	なし		

番号	位置	プラン	長軸×短軸×深さ(cm)	出土遺物	時期	重複関係
18	J-8	楕円形	2.0×1.6×8	なし		
22	J-8	楕円形	4.0×2.8×1.0	なし		
23	J-8	楕円形	3.2×2.8×7	縄文土器	後期?	
25	K-8	円形	2.5×2.5×1.1	なし		
29	J-8	円形	2.4×2.4×4	なし		
30	J-8	楕円形	4.8×2.8×1.1	なし		
31	J+K-8	円形	2.3×2.2×1.2	なし		
33	K-8	円形	2.4×2.2×1.0	なし		
34	J-8	楕円形	3.0×1.4×8	なし		
35	J-8	楕円形	2.2×1.8×9	なし		
39	J-8	楕円形	2.3×1.8×8	なし		
40	J-8	円形	3.2×3.0×1.3	なし		
41	J-8	楕円形	2.5×1.5×7	なし		
42	K-8	円形	3.0×2.8×8	なし		
43	K-8	円形	4.2×4.0×1.8	なし		
46	J+K-8	円形	2.8×2.5×6	なし		
47	J-7	円形	1.7×1.6×1.4	なし		
64	J-7	楕円形	4.6×2.9×1.7	縄文土器	後期	P65, P67
65	J-7	不整形	×3.6×9	縄文土器	後期	P64
66	J-7	楕円形	4.0×3.2×1.1	なし		
67	J-7	楕円形	×2.6×1.3	縄文土器	後期	P64
68	J-7	楕円形	3.8××1.2	縄文土器	後期?	P112, P155
86	K-9	円形	3.0×(2.6)×8	なし		P87
87	K-9	楕円形	×5.6×2.3	縄文土器	後期	P86
91	K-9	楕円形	4.8×4.2×2.1	縄文土器	中期	P138
97	K-8	楕円形	×3.3×2.8	縄文土器	後期	P96, P179
98	L-9	楕円形	2.7×2.2×1.5	なし		

番号	性質	プラン	長軸×短軸×深さ(cm)	出土遺物	時期	重複關係
99	J-8	楕円形	2.5×3.8	なし		P69
101	K-8	楕円形	5.4×3.8×9	なし		
102	K-8	円形	1.8×1.8×8	なし		
108	K-8	楕円形	×2.6×3.0	縄文土器	後期?	P109
109	K-8	楕円形	1.28×2.3	縄文土器、打製石斧	後期?	P108, P110, P111, P156
110	K-8	楕円形	3.5×3.0×1.8	縄文土器	後期?	P109, P111
111	K-8	不整形	×4.2×1.7	縄文土器	後期?	P109
112	J-7	円形	2.8×2.7×1.1	なし		P68
116	K-8	楕円形	×1.8×2	縄文土器		P117
118	K-8	円形	2.6×2.2×1.5	縄文土器	後期?	P177
122	K-8	円形	3.2×2.8×1.9	縄文土器	中期	
139	K-9	楕円形	5.2×4.0×2.0	縄文土器	中期	
140	L-9	楕円形?	×4.3×2.3	なし		
141	L-9	楕円形?	×2.4×2.3	なし		
142	L-9	円形	2.8×2.6×2.3	なし		
143	K-9	楕円形	×5.2×2.2	縄文土器		
144	K-8	円形	3.2×3.0×1.5	なし		
145	K-9	楕円形?	×3.6×2.3	なし		
146	L-8	楕円形	×2.5×1.0	縄文土器	後期?	P147
150	L-9	楕円形	4.0×2.6×2.4	なし		
155	J-7	円形	×2.4×1.1	なし		P68
156	K-8	円形	×2.4×1.7	なし		P109
158	J-9	楕円形	2.4×1.8×6	なし		
159	J-8	不整形	×2.4×1.1	縄文土器		P37
165	I-8	円形	3.6×3.8×7	縄文土器	後期?	
170	J-7	楕円形	×4.2×1.7	なし		

番号	位置	プラン	長軸×短軸×深さ(cm)	出土遺物	時期	系縦關係
174	J-7	楕円形	×2.2×1.0	なし		P166
176	J-8	楕円形	1.8×1.6×8	なし		P9
177	K-8	楕円形	×2.2×	なし		P118, P179
178	K-8	円形	×2.8×	なし		P120, P179
179	K-8	楕円形?	5.2× ×1.4	なし		P97, P177, P178
181	L-9	楕円形	×1.8×2.5	なし		

## (2) 土坑

土坑は、総数にして7基検出した。土坑は調査区のほぼ中央部及び西部に比較的まとまって検出した。第1・2・3・4・6号土坑は単独で、第5・7号土坑は互いに重複して検出した。また、第1号土坑と第2号土坑、第5号土坑・第6号土坑・第7号土坑は互いに隣接して検出した。平面プランは、楕円形ないし方形を呈すもので、深さは、第2・3・4号土坑が遺構確認面から概ね0.50～0.75mと深く、第1・5・6・7号土坑は概ね0.10m前後～0.20m前後に収まり浅い。出土遺物は、第3号土坑が多く、次いで第1・2・4号土坑で、他の土坑は出土しなかった。時期は、概ね縄文時代後期初頭である。

以下各土坑ごとに詳細を記載する。

### 第1号土坑(第13・15図)

K-8グリッドから検出した。

平面プランは楕円形で、規模は長軸0.39m、短軸0.30m、深さ0.09mであった。遺構確認面からの規模は前述のとおりだが、遺物の検出状況から本来の遺構確認面はもっと上面であったことが推測される。出土遺物は、縄文土器深鉢形土器等が出土した。

第15図1～5が出土した土器である。1は深鉢形土器と思われ、胴上半部に横帯区画を配し沈線により三角文を描き、単節LR縄文を横位に充填する。底部外面はザル編み痕残る。復元高27.4cm、胴部最大径27.0cm、底径8.8cmを測る。

2は深鉢形土器で横帯区画を配し沈線による三角文を描き、単節LR縄文充填。

3は深鉢形土器で紐線文土器である。口縁部無文帶下に1条の隆帯を巡らし、隆帯上には押圧が加えられる。隆帯以下には斜格子目文施文。口縁内側には凹線が巡る。

4は隆帯を貼り巡らし端部に縄文施文する。隆帯の結合点には盲孔、隆帯きわは沈線文を施す。

5は突起である。上面中央に穿孔、2方向に角状のものが突出し盲孔が施される。

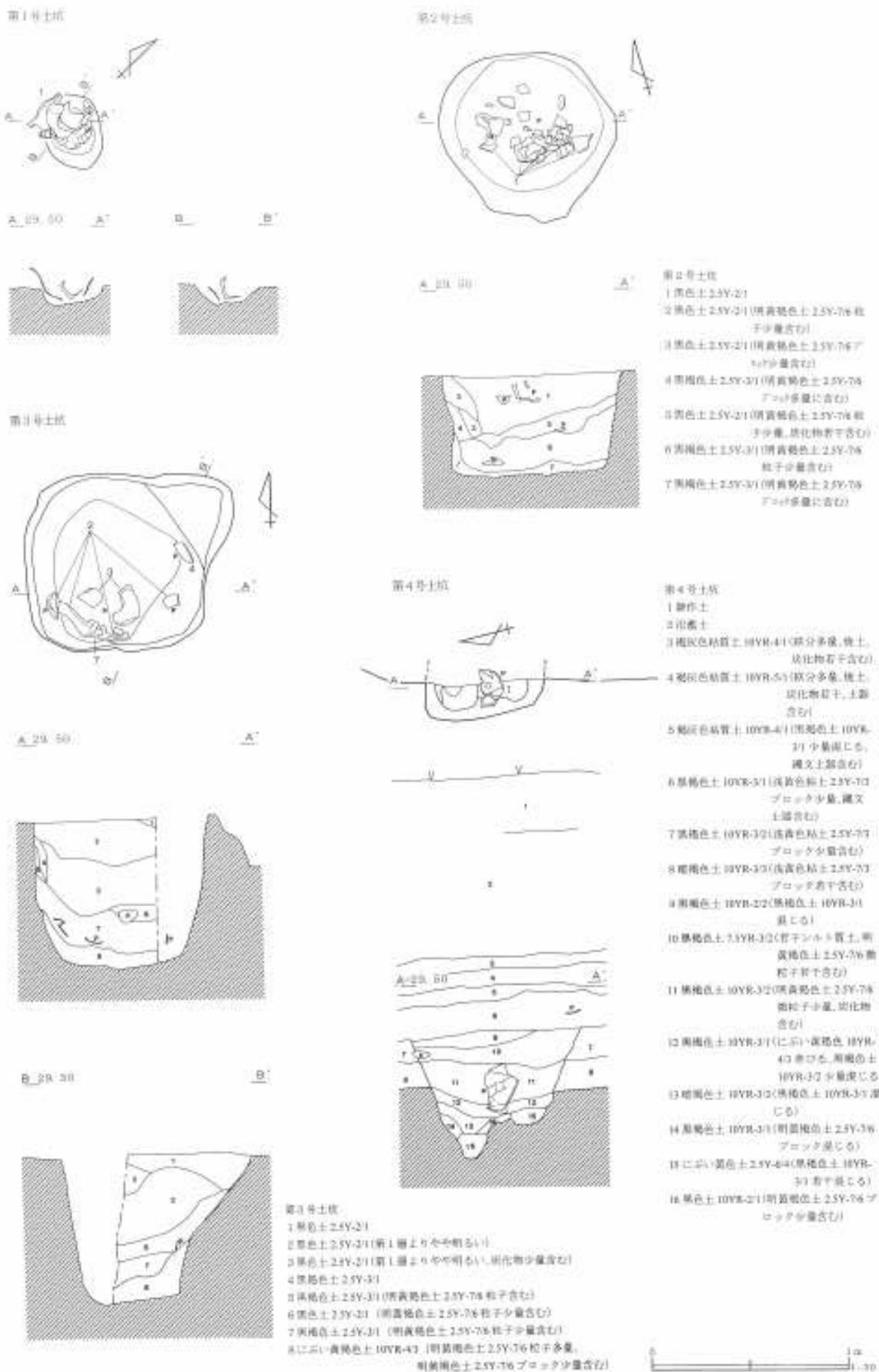
時期は、縄文時代後期と考えられる。

### 第2号土坑(第13・15図)

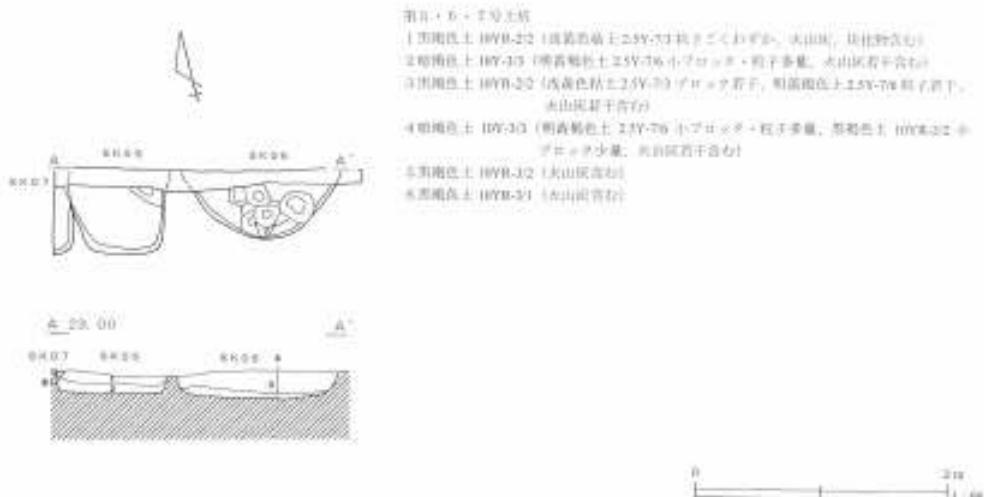
K-8グリッドから検出した。

平面プランはほぼ円形で、規模は長軸0.87m、短軸0.86m、深さ0.50mであった。

出土遺物は比較的多く検出され、縄文土器深鉢形土器等が出土した。



第13図 第1区第2面第1～4号土坑



第14図 第1区第2面第5～7号土坑

第15図1～3が出土した土器である。1は波状縁の突起付の深鉢形土器である。4単位の波状縁の1つの波頂部に突起が付く。円孔が内面から正面まで貫通し、円孔を中心とし盲点を起点とするC字状文が対向して施される。波状縁の1つの口縁部外面に口縁に沿って盲孔を起点とした上向きの扁平なC字状文が施文される。文様はJ字状文を縦に2段に配置するもので、1ヶ所剣先状のものもある。すべて沈線のみで表現されている。器形は胴上半にくびれをもつものである。口径21.3cm、現存高33.4cmを測る。

2は底部である。外面は丁寧に磨かれる。

3は波状縁深鉢形土器の突起部分である。上部孔が内面を向き、下部孔が側面に位置する。内面は中央円孔わきの盲孔を起点としたC字状文が向かって右上に施され、その中央が穿孔される。中央円孔上を橋状の把手がわたり対向する盲孔起点のC字状文が施文される。正面も内面と同じ位置に盲孔起点のC字状文が施文され、側面の孔をわたるような橋状把手が付く。

時期は、縄文時代後期と考えられる。

### 第3号土坑（第13・16図）

L-8グリッドから検出した。

平面プランは不整形な隅丸方形で、規模は長軸1.23m、短軸0.98m、深さ0.75mであった。

出土遺物は多く、縄文土器深鉢・浅鉢・壺形土器等が出土した。

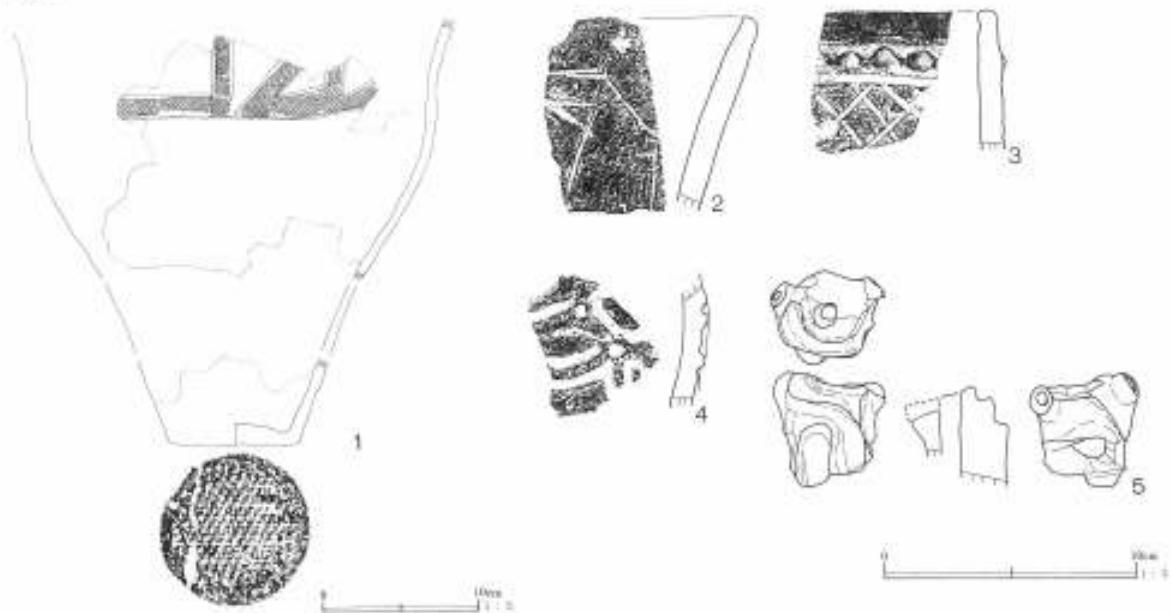
第16図1～8が出土した土器である。1は平縁の深鉢形土器である。器形は胴上半部がくびれたものである。文様は器面の摩滅が著しく不明瞭だが、わずかに口縁部付近に口縁に沿う沈線文及び垂下する沈線文が施文される。胴下半部は磨かれる。推定口径23.5cm、器高37.5cm、底径7.5cmを測る。

2は注口付の波状縁浅鉢形土器である。4単位の波状縁で各々の波頂部に突起が付く。突起は正面から内面へと貫通する円孔を中心にC字状文が施文される。口縁部文様帶は隆帯で区画され波底部で左右に2分割される。口縁部文様帶下に注口が付く。

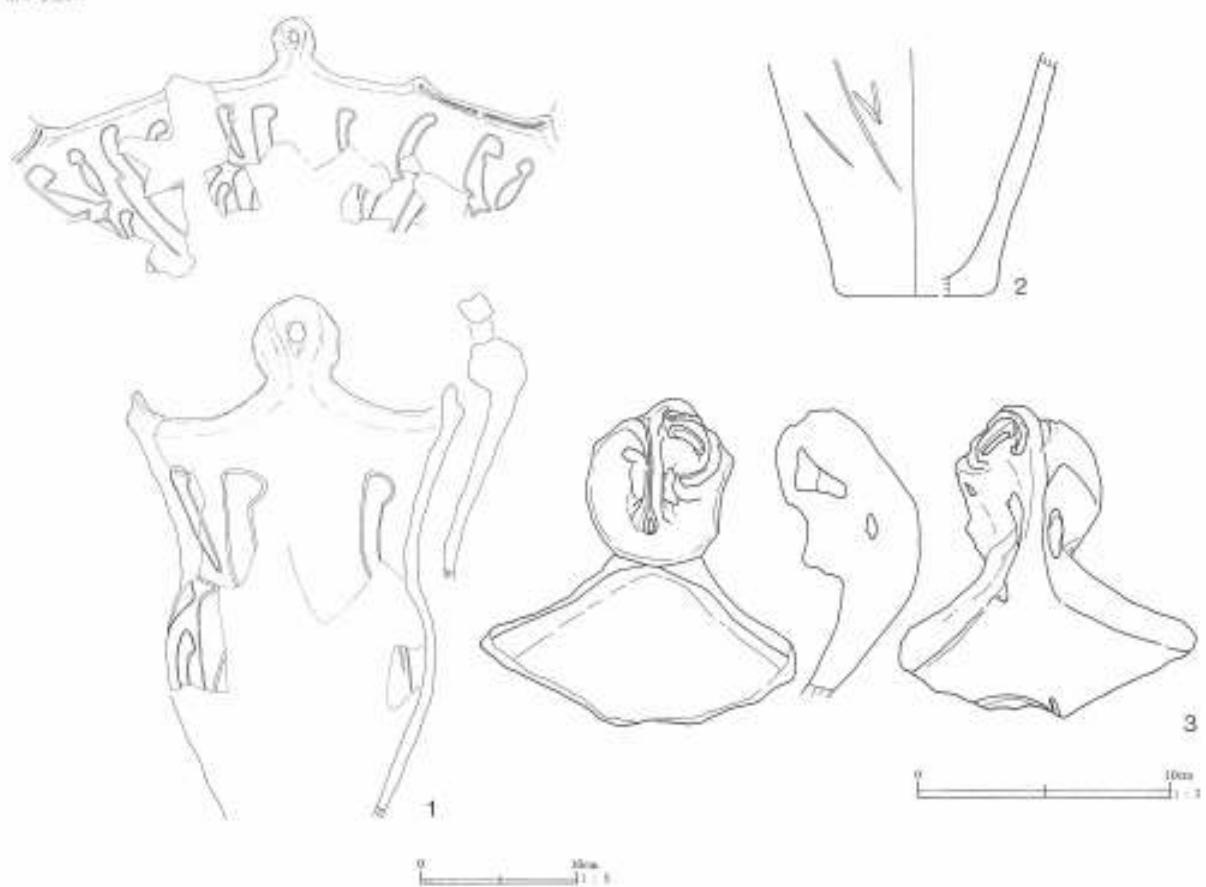
3は頸部がすぼまり橋状把手が付く壺形土器である。把手は4単位付き、逆S字状の隆帯が付く。胴部との境に隆帯が弧を描いて付く。口径17.6cm、現存高9.5cmを測る。

4～7は沈線文で文様を描く土器である。4は口縁に沿う沈線文及びハの字に開いて垂下する沈線文。

第1号土坑

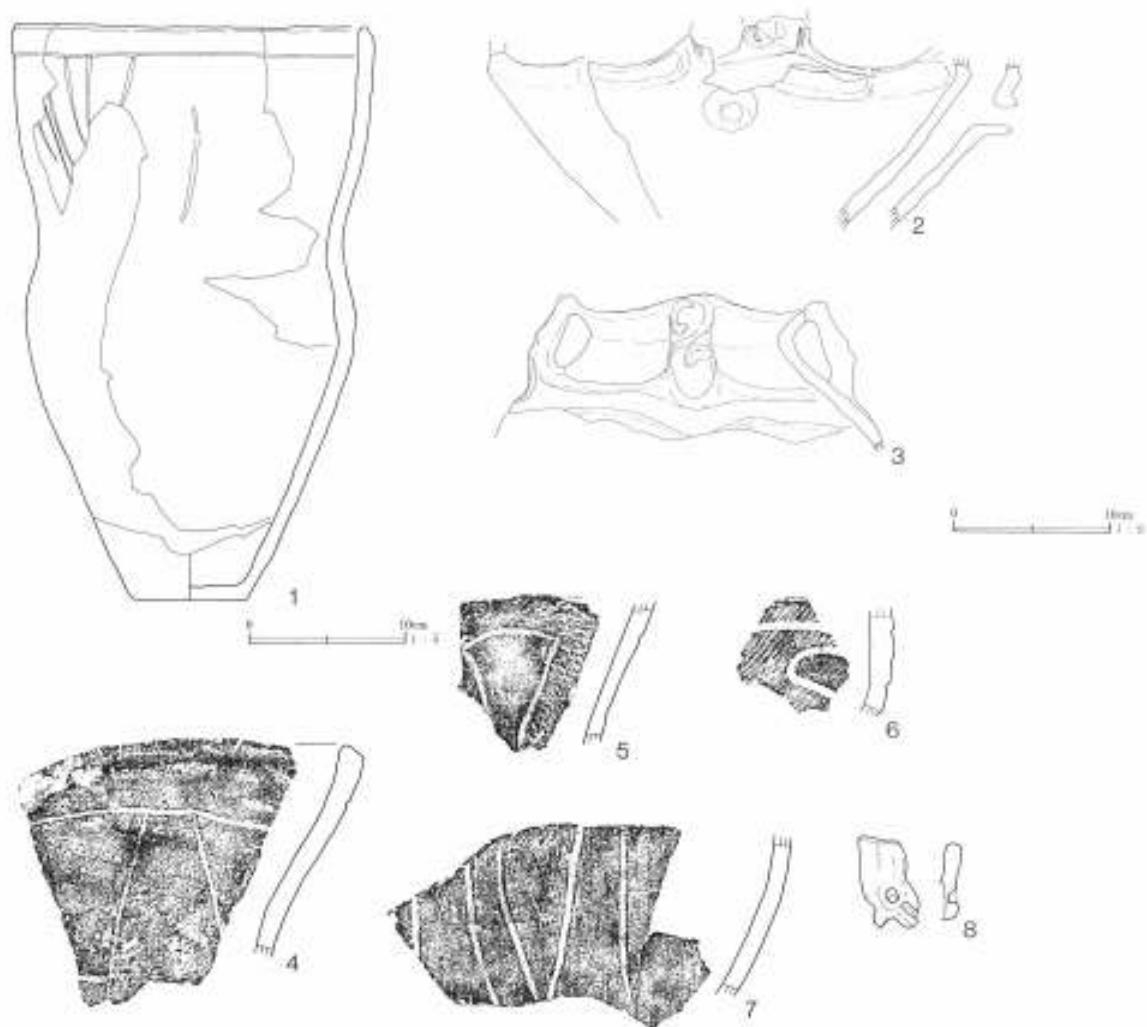


第2号土坑

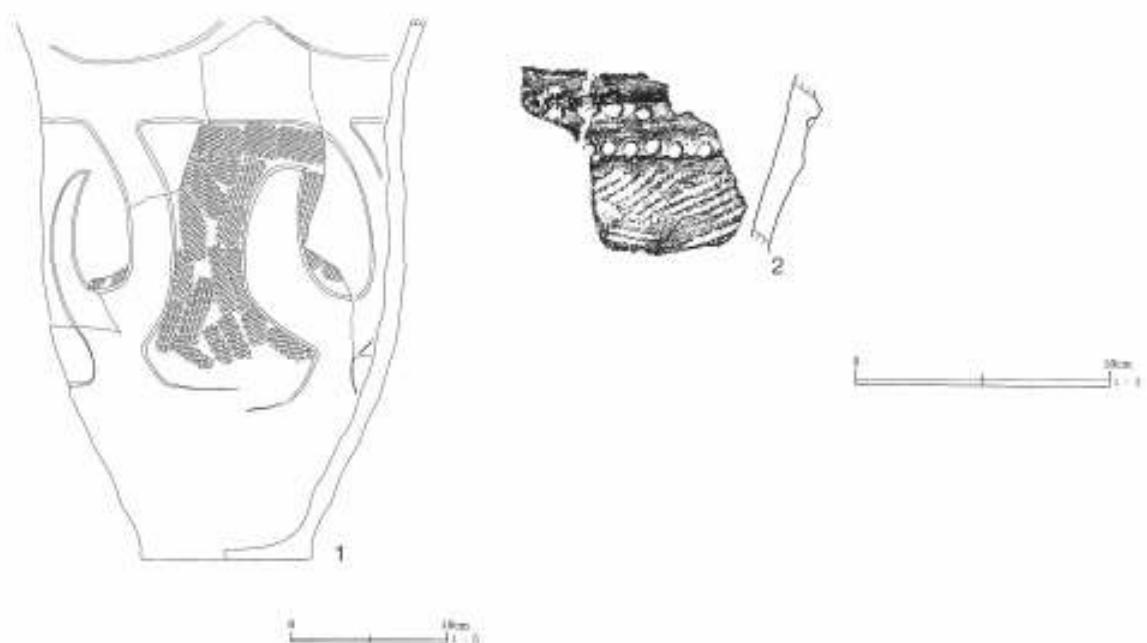


第15図 第1区第2面土坑出土遺物 (1)

第3号土坑



第4号土坑



第16図 第1区第2面土坑出土遺物 (2)

5は鉤状文を区画する。6は地文が単節L R縄文施文。無文部は丁寧に磨り消される。7は垂下する沈線文間に条線文施文。

8は筒状の突起と思われる。正面下半に盲孔が1つ穿たれ、それを中心に両下方に沈線文が施される。上面は半円の筒状を呈する。

時期は、縄文時代後期と考えられる。

#### 第4号土坑（第13・16図）

L-8グリッドから検出した。遺構は、調査区域外へ延びる。

平面プランは長方形と推定され、規模は一方軸0.60m、深さ0.64mであった。土坑内北部がピット状に深く落ち込みがあった。

出土遺物は少なく、第16図1・2が出土した。

1・2は同一個体と考えられ、波状縁の深鉢形土器と思われる。関沢類型の個体である。1は胴上半部には弧状の沈線文施文。縄文を地文としてJ字状文が無文部で沈線文により描き出されている。縄文部は単節L Rを一番上は横位に以下は縱位に充填。無文部は磨かれる。胴下半部及び内面は丁寧に磨かれる。

2は口縁部破片である。口縁部文様帶は2条の隆起線内に2列の刺突文列が区画され、その文様帶以下は弧状の沈線文の区画内に単節L R縄文施文。

時期は、縄文時代後期と考えられる。

#### 第5号土坑（第14図）

L-8グリッドから検出した。遺構は、第7号土坑に壊されていた。また、調査区域外へ延びる。

平面プランは隅丸方形と推測され、規模は一方軸0.74m、深さ0.17mであった。

出土遺物は、検出されなかった。

#### 第6号土坑（第14図）

L-8グリッドから検出した。遺構は、調査区域外へ延びる。

平面プランは円形と推測され、規模は残存長1.28m、深さ0.23mであった。土坑内にピット状の落ち込みが6つほどあった。

出土遺物は、検出されなかった。

#### 第7号土坑（第14図）

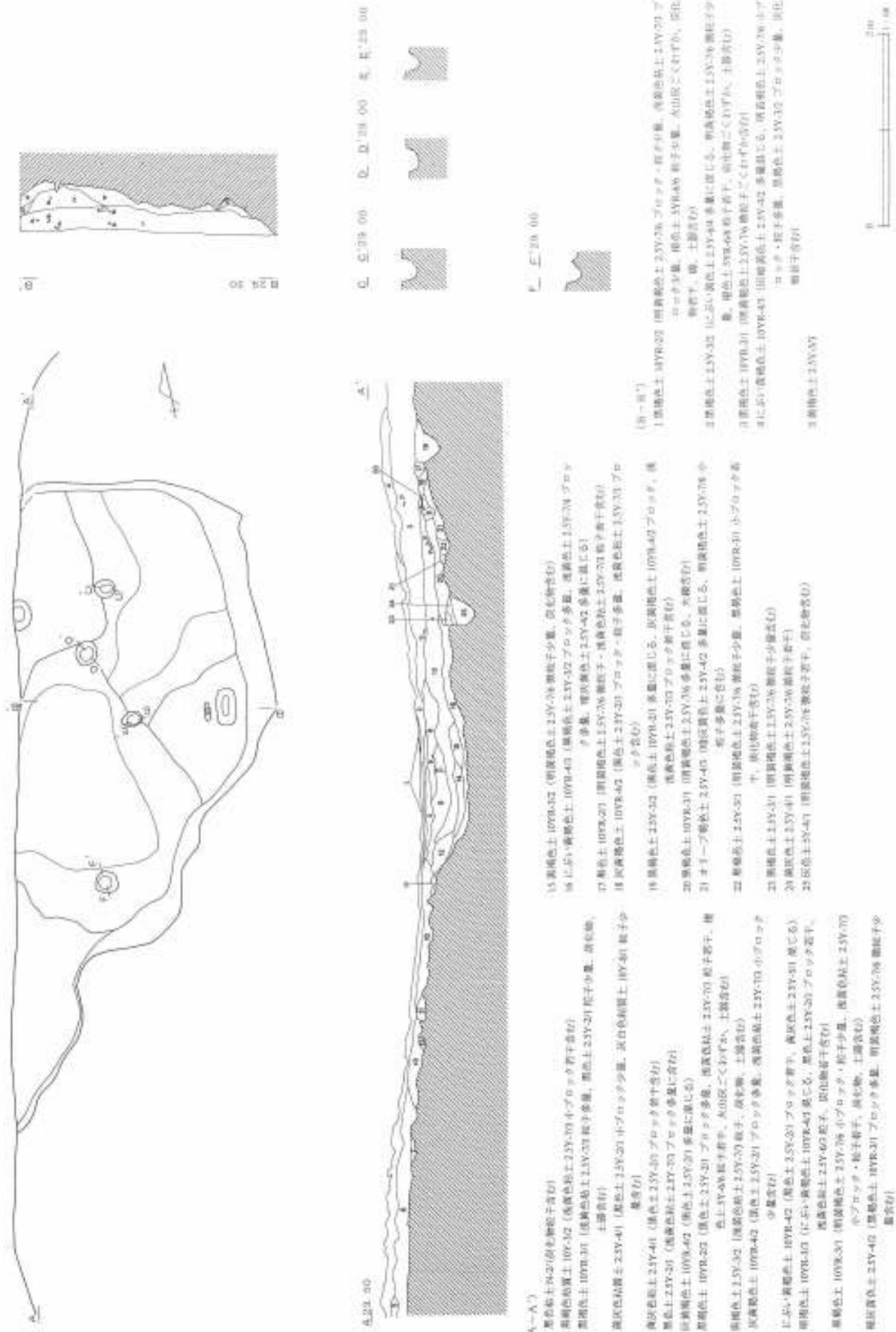
L-8グリッドから検出した。遺構は、第5号土坑を壊していた。また、調査区域外へ延びる。

平面プランは隅丸方形と推測され、規模は残存長0.54m、深さ0.12mであった。

出土遺物は、検出されなかった。

### （3）土器廃棄遺構

土器廃棄遺構は第1区調査区西端、I-8、J-7・8グリッドから検出した。本遺構は土層観察の結果明瞭な掘り込みが確認できず谷状の落ち込みとしか判断できなかった。そこに縄文土器が堆積するように出土した。本遺構が中央及び西端に向かい傾斜をもっている影響か出土位置もこの部分に集中していた。このため、本遺構を土器廃棄遺構と呼称した。（第17～25図）



第17図 第1区第2面土器廻棄遺構

平面形は南北に長い不整形で、北部はほぼ方形状で南部に向かって狭まっていた。西側は調査区域外のため検出されなかった。確認規模は長軸 6.80 m、短軸 2.66 m、深さ 0.53 m であった。中央部の長軸 3.0 m、短軸 2.0 m の範囲が最も深かった。遺構内にピットが 6 基確認された。

出土遺物は遺跡中最も多く、縄文時代前期、中期から後期、弥生時代中期までの土器・石器が出土した。縄文時代中期後半及び後期初頭の土器が最も出土量が多く、深鉢形土器がほとんどであった。石器は石鎌・搔器・打製石斧・敲石・磨石が出土した。土器を時期ごとに出土レベルで見てみると、中期後半（加曾利E式期）：27.50 m 前後～29.00 m 前後、後期初頭（称名寺式期）：28.60 m 前後～29.00 m 前後、後期初葉（堀之内式期）：28.50 m 前後～28.90 m 前後、後期中葉（加曾利B式期）：28.80 m 前後～29.00 m 前後、弥生中期（須和田式期）：28.80 m 前後であった。この出土レベルを見てみると上限は 29.00 m 前後と共通するが、下限レベルはほぼ時期順となり誤認がなかった。時期を追って順番に堆積していったことが読みとれた。

#### 出土遺物（第 18～25 図）

出土した土器を縄文時代前期、中期前半、中期後半、後期初頭、後期中葉、弥生時代中期に分類して掲載する。また、底部、石器をまとめて掲載する。

##### （1）土器

###### 第 1 群（第 19 図 9）

縄文時代前期の土器を一括する。関山式期の土器と思われる。半截竹管による沈線文及び瘤状の貼付文が施されている。胎土に纖維を多く含む。

###### 第 2 群（第 19 図 10・11）

縄文時代中期前半の土器を一括する。阿玉台式期の土器と思われる。10 は竹管による押し引き有節線文が斜め三角形に施文される。11 は有節線文が口縁に平行に施文。地文は単節 R L 縄文施文。

###### 第 3 群（第 19 図 12～21、第 20 図、第 21 図、第 22 図 72～77、第 24 図 146）

縄文時代中期後半の土器を一括する。大半が加曾利 E 式期の土器である。

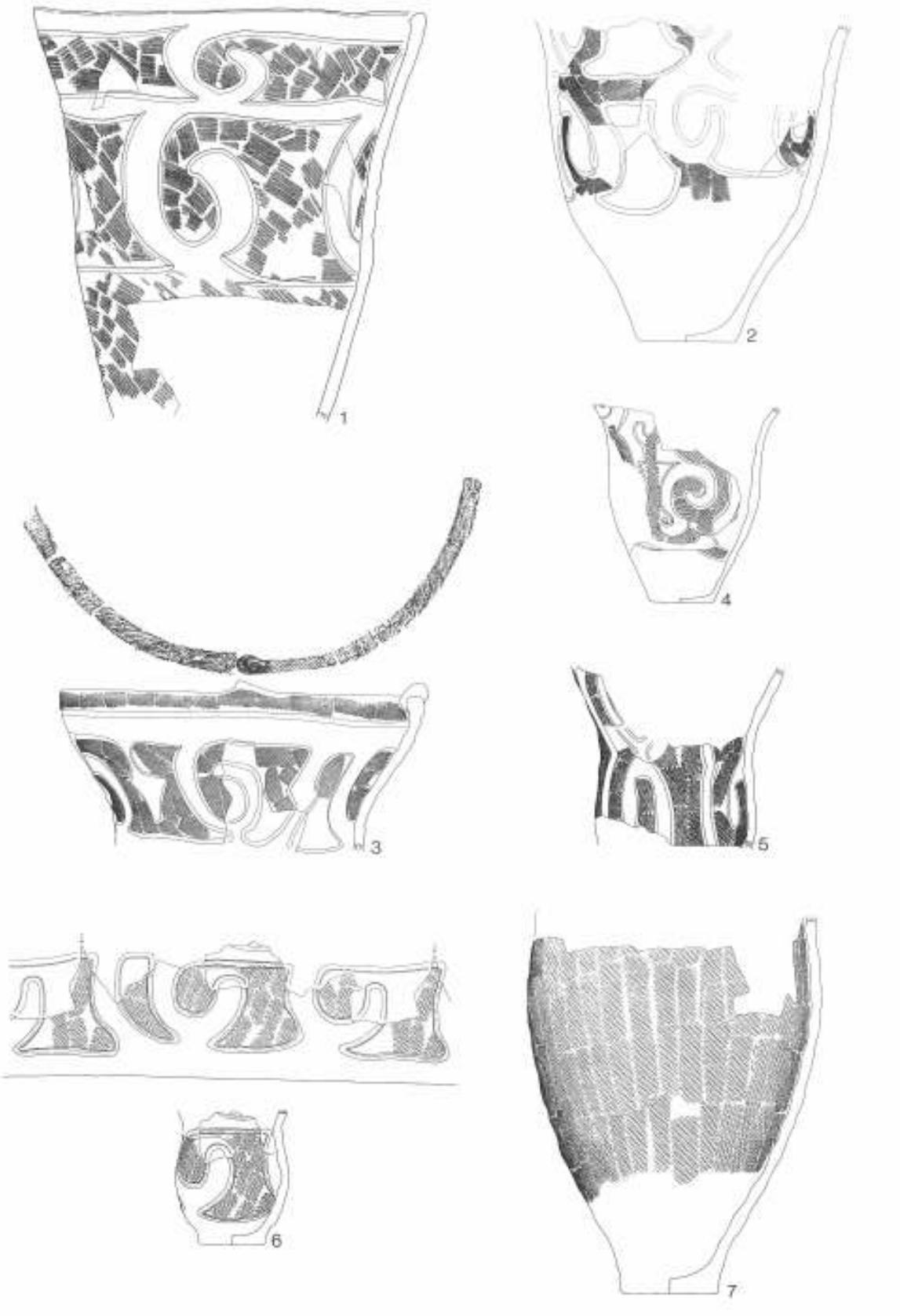
12・13・15・17・36・39 は口縁部文様帯をもつキャリバー形土器である。17 は口縁部に渦巻文と区画文が組み合わされるモチーフのもので、12・15・36 は楕円形の区画文が隆帶によって描き出されており、15 は楕円区画内が磨り消されている。13 も隆帶によって区画文が描き出され、単節 L R 縄文が施文されている。15・17 とも沈線文により胴部が口縁部と区画され幅狭の磨消懸垂文が垂下するが、15 は無文帯が存在する。いずれも地文は単節 R L 縄文を施文する。一方、13・36・39 は蘇手状沈線文が垂下する。14・16・19～21・23 は胴部破片で 2 本沈線間を磨消す幅狭の磨消懸垂文が垂下する。いずれも地文は単節 R L 縄文施文。また、25 は 3 本沈線間を磨消し地文は単節 L R 縄文施文。

18 は微隆起線による区画内に単節 L R 縄文を施文、区画外は磨消されている。

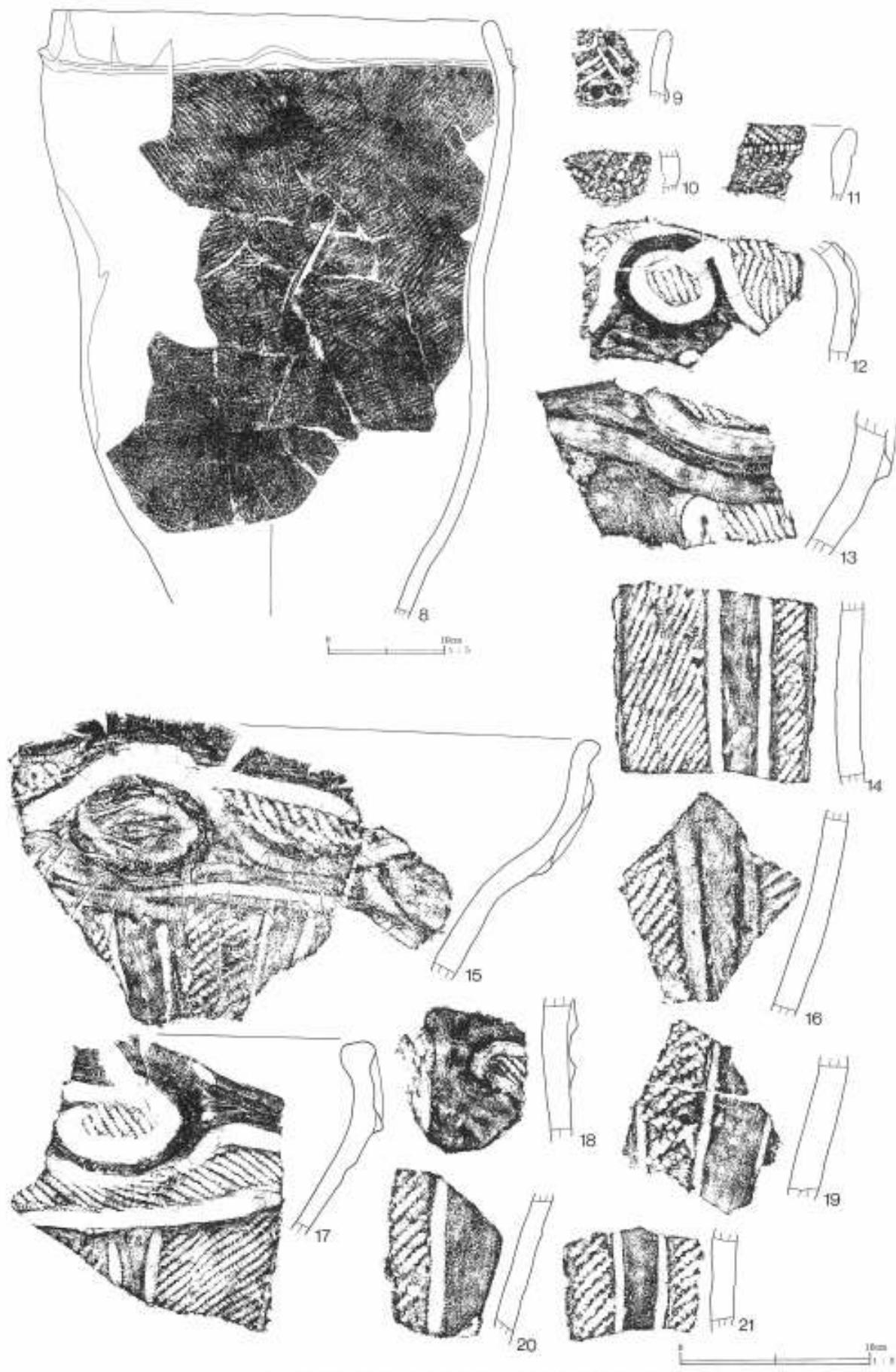
22 は幅狭の磨消懸垂文が垂下する胴部破片である。地文は単節 R L 縄文施文。

27 は隆帶によって無文帯を区画し、胴部には幅狭の逆 U 字状磨消懸垂文が垂下する。地文は単節 L R 縄文施文。30 も逆 U 字状磨消懸垂文が垂下し、地文は単節 R L 縄文施文。

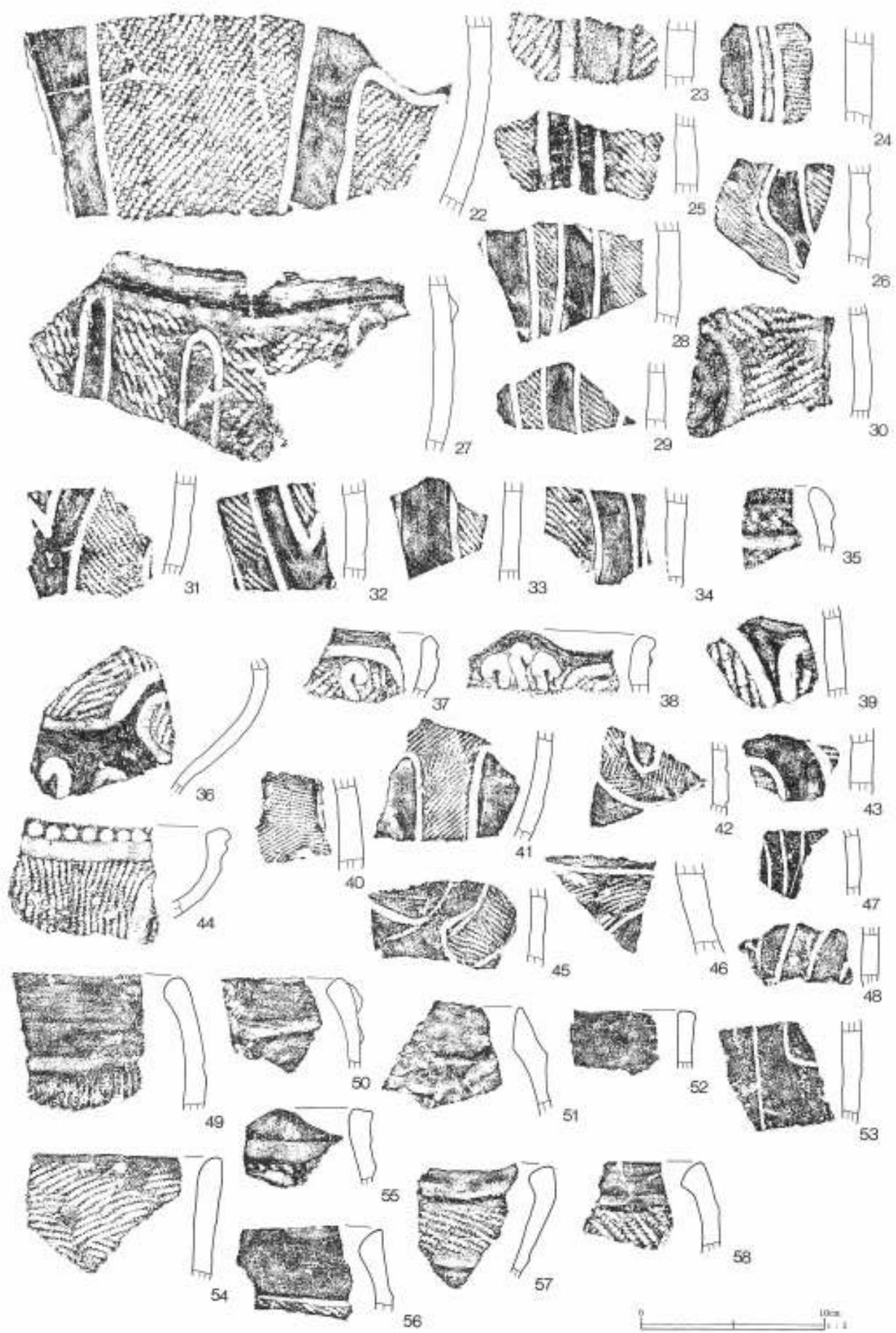
24・26・28・29・31～34・40・41 は磨消懸垂文が垂下するものである。26 は蛇行する 2 本の沈線間の磨消懸垂文である。31 は W 字状の沈線文による区画である。41 は沈線による逆 U 字状磨消懸垂文が



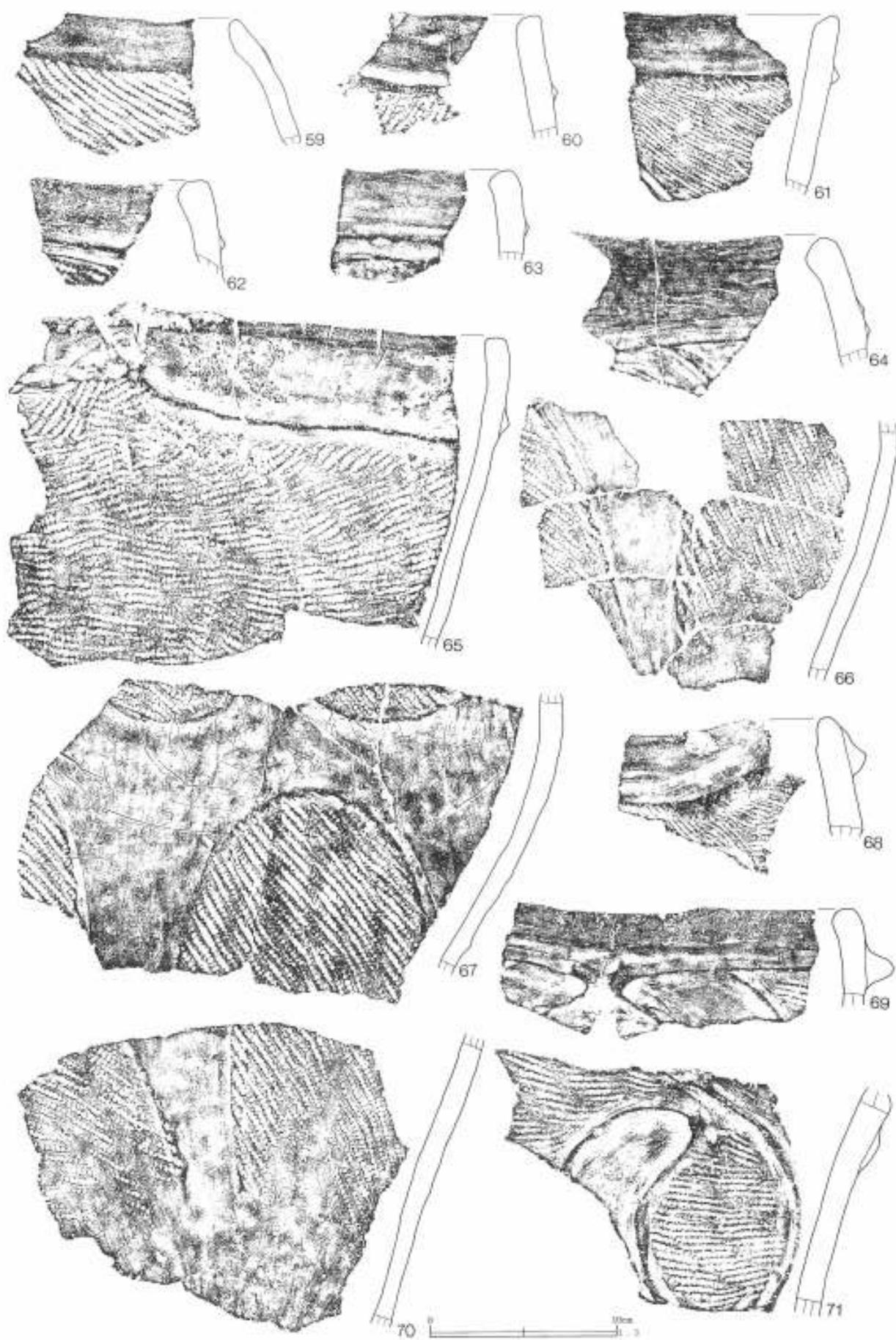
第18図 第1区第2面土器窯窓遺構出土遺物 (1)



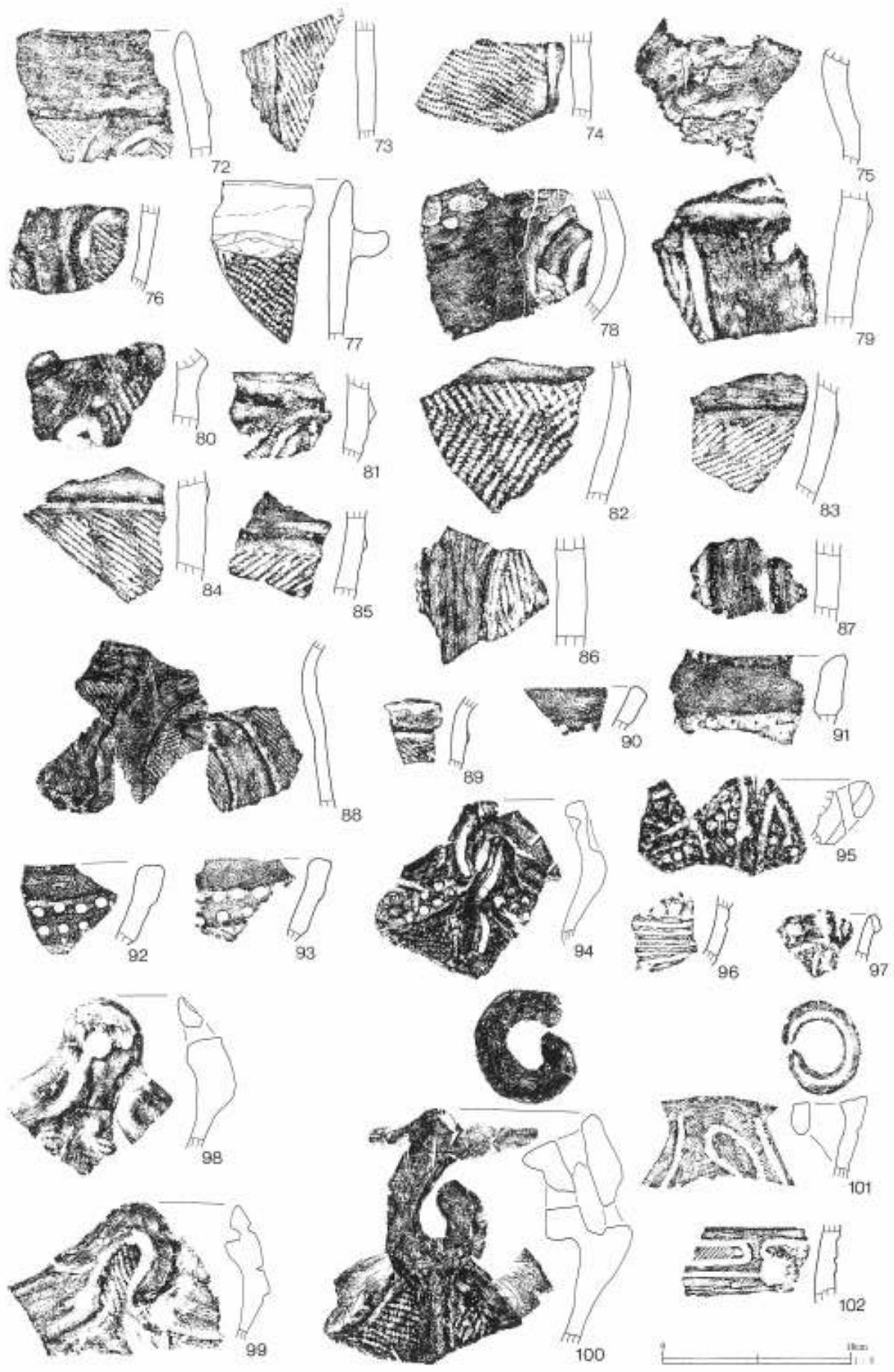
第19図 第1区第2面土器廃棄遺構出土遺物 (2)



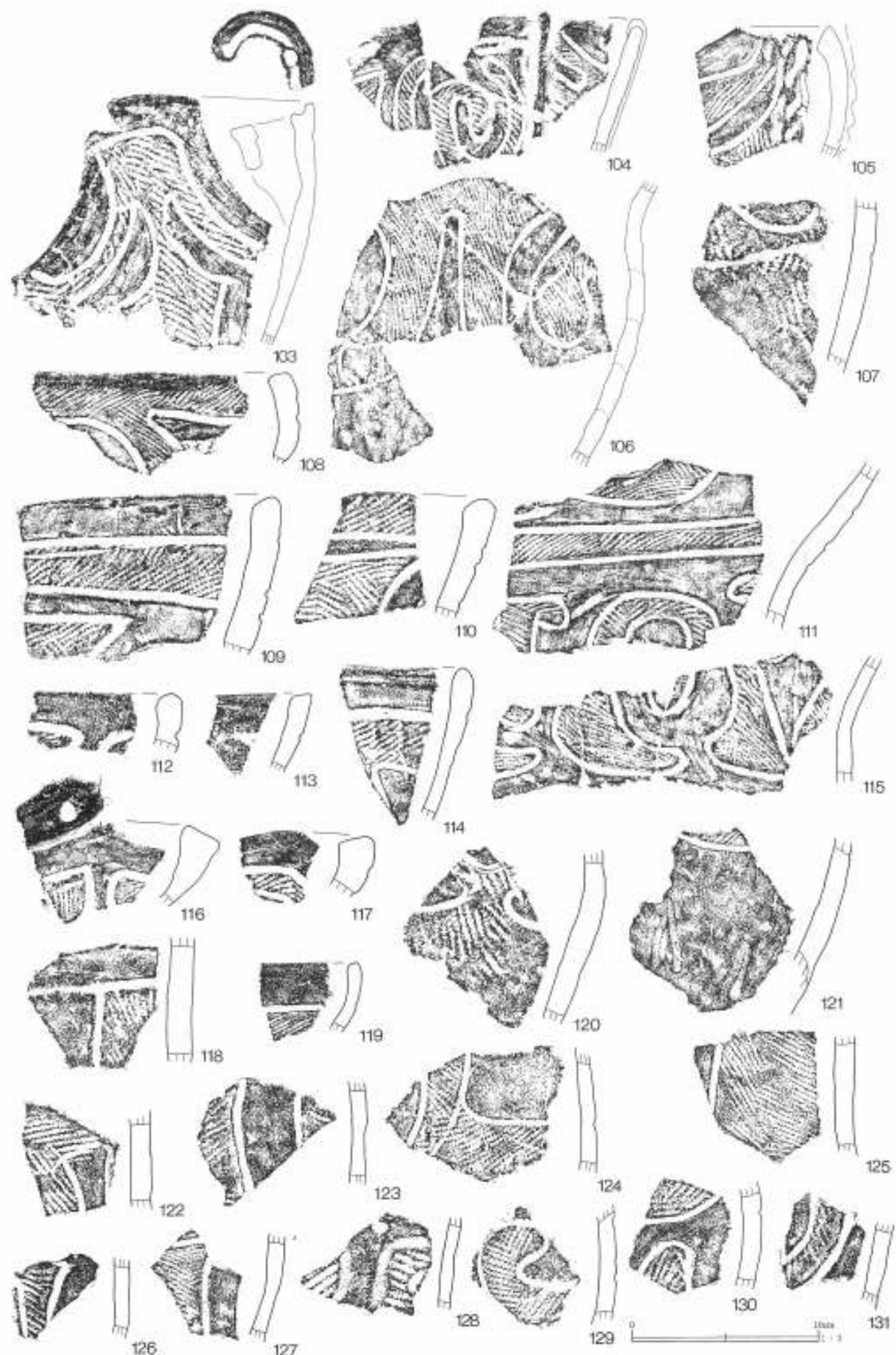
第20図 第1区第2面土器窯棟遺構出土遺物 (3)



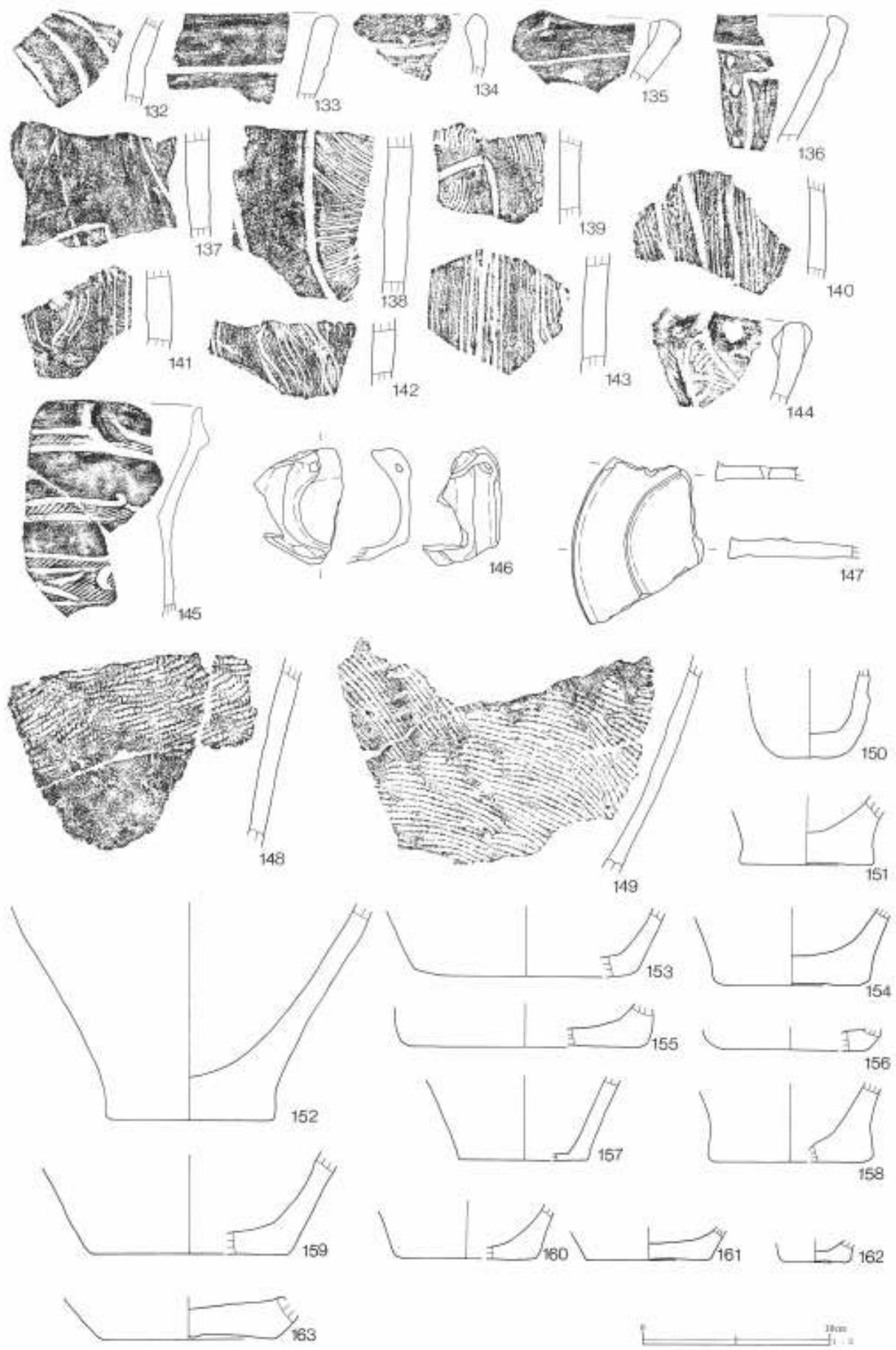
第21図 第1区第2面土器陶器遺構 (4)



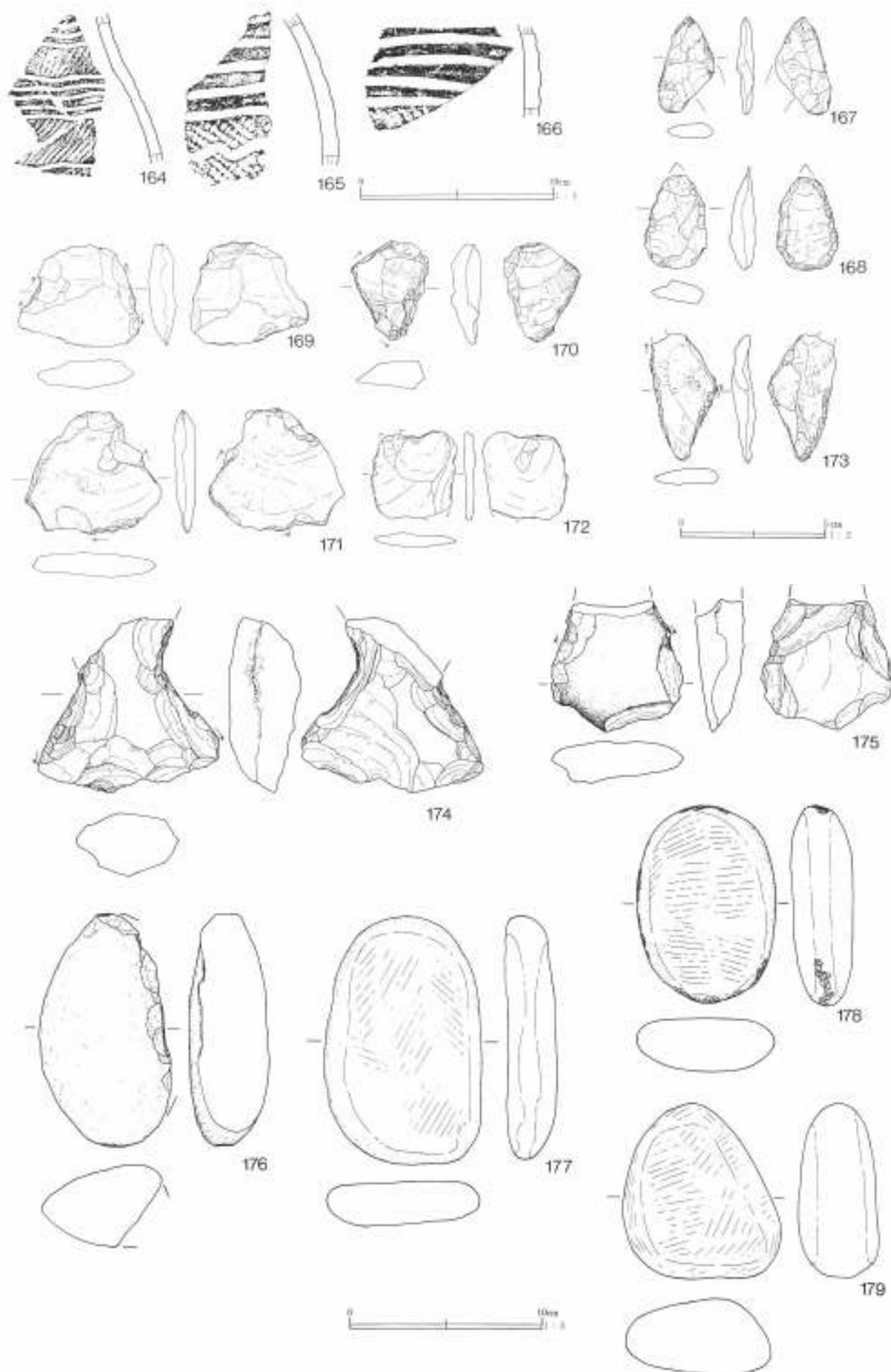
第22図 第1区第2面土器窯窓遺構出土遺物 (5)



第23図 第1区第2面土器廃棄遺構出土遺物 (6)



第24図 第1区第2面土器廃棄遺構出土遺物 (7)



第25図 第1区第2面土器廃棄遺構出土遺物 (8)

垂下する。

37・38は波状縁の土器で、沈線の燕子状懸垂文が口縁部文様帶に施文される。

42・43・45は沈線による渦巻文が施文され、42・45は単節L R縄文が充填され、43は逆に磨消されている。

35・44はキャリバー形土器である。35は口縁部の単節L R縄文施文下に横走の沈線文施文。44は口縁端部に1列の刺突文を施し、横走の沈線で区画したその下に渦巻文と思われる文様を描く。単節R L縄文充填。

47・48・53は沈線文が描かれる。

49は口縁部に幅広の無文帶が沈線によって区画され、縦位の条線文が施される。

50～52・55～59は口縁部が無文で微隆起線文で区画されるものである。51・57は波状縁の土器である。

54は口縁端部付近から単節R L縄文施文する。

60～65・68・69は口縁部が無文で隆帯文によって区画されるものである。61は口縁部が開く器形である。65は口縁部に把手と思われる脱落痕があり、隆帯文下は単節L R縄文施文。68は波状口縁である。69は口縁部に対面する菱形状の隆帯文の区画が施され対面する箇所は突起状を呈する。最初の区画内は磨消しその次の区画内は単節L R縄文施文。

66・67・70～74・76は隆起線で文様が描かれるものである。66・67・70は逆U字状文が断面三角形の隆起線で描かれる。67は逆U字状文が下から迫り上がりその間にU字状文が入り組む構成である。隆起線内は単節L R縄文が施文され部分的に縦方向の磨消しが施される。無文部は良く磨かれている。71・72はJ字状文が描かれ、72は幅広の無文帶がある波状口縁であると思われる。74を除いて単節L R縄文施文される。

75は把手が付く部分破片か。

77は把手が付く口縁部無文のものである把手以下は単節L R縄文施文。

146は内外面とも丁寧に研磨され赤彩されたミニチュアの土器である。上端には把手が付き、その把手を正面にしてみると渦巻状文が表現されている。注口が付くのか、両方に把手が付くのか？

第4群（第18図、第19図8、第22図78～102、第23図、第24図132～144）

縄文時代後期初頭及び初葉の土器を一括する。称名寺式期及び堀之内式期の土器である。特徴から11分類される。

第1類（第18図6・7、第19図8、第22図78～89）

隆帯及び隆起線で文様が描かれる加曾利E式系の土器を含む群である。

8は深鉢形土器で、口縁部無文帶を隆帯を巡らせて区画し、隆帯以下は単節L R縄文を上半は縦及び横位に、中央部は右斜めに施文し、下半は磨く。隆帯は4単位で把手の名残り状の舌状突起が付く。口径38.0cm、現存高52.0cmを測る。

7は称名寺式期から堀之内式期への過渡期の深鉢形土器と思われる。胴下半部を除いて単節L R縄文を縦位に施文する。この縄文は一部に結節が認められる。下半部は良く磨かれている。現存高30.9cm、底径8.0cmを測る。

78は陰帯文で渦巻状文を描く。79は横走の陰帯文下に沈線文を垂下する。80は隆帯文及び痕手状文と思われる沈線文が施される。82～85は無文帶を隆起線で区画、以下縄文施文。86は微隆起線で逆U字状文を描く。87・88は隆起線でJ字状文を描く。88は無文部がJ字状で丁寧に磨かれ、縄文は単節LR施文。

6は縄文を地文としてJ字状文が無文部で隆起線によって描き出されている。隆起線の縄文施文側は細い竹管でなぞられている。縄文は単節LR、無文部はよく磨かれている。現存高11.0cm、底径5.5cmを測る。

#### 第2類（第22図90～96）

隆起線と沈線文で描かれる土器群である。90～94は波状縁の深鉢形土器である。口縁部に2条の隆起線を巡らしその内面に2列の刺突文を施す（90・91は1列のみ残存）。94は波頂部の突起部分である。C字状文が対向するような形状の捻軸状突起である。上面は扁平、内面に盲孔がある。刺突文列下は単節LR縄文施文。95は口縁から垂下する貼付文に付く突起である。上面から孔が貫通する。口縁端及び貼付文に沿って沈線文が施されその区画内に竹管による刺突文施文、単節RL縄文施文。また、口縁部は2条の隆起線が巡り平行する2列の竹管文施文。96は刺突文列下に横位の条線文施文。

#### 第3類（第98～101・103）

称名寺式期の突起を一括する。98はC字状の捻軸を示す捻軸状突起。注口状に孔が貫通する。99はC字状文が対向するような形状の捻軸状突起。内面方向に盲孔が向く。100は円筒状突起と捻軸状突起の中間的形態であり、8字状捻軸環の上部孔が上面に捻るように曲げられた形状の突起。内面と上面に孔が向く。口縁部隆帯区画に単節LR縄文施文。101は円筒状突起。上方を向き孔が貫通する。上面にはC字状文施文。側面には沈線文と区画内に細かい単節RL縄文施文。103も円筒状突起。上方を向き孔が貫通する。上面には盲孔を起点とするC字状文が施文される。側面は沈線文による区画内に無節RL縄文施文。内側は丁寧に磨かれる。

#### 第4類（第22図97、第23図104～106）

称名寺式期の貼付文が付く土器群である。97は波状口縁の土器に瘤状の貼付文が付く。104は口縁から垂下する貼付文が付く。J字状文が描かれる。無節RL縄文が縦位に施文される。内面は丁寧に磨かれる。あるいはアスファルトが付着する。105は口縁から垂下する鎖状隆線が貼付文として付く。沈線文間に無節RL縄文施文。106はJ字状文が描かれ、単節RL縄文が縦位に施文される。外面下半部及び内面は丁寧に磨かれる。

#### 第5類（第22図102・107）

称名寺式期の中津系土器である。102はコの字状沈線文区画内に単節LR縄文施文。107は地文単節LR縄文施文。沈線文区画内は無文。

#### 第6類（第18図1～5、第23図108～131）

沈線間に縄文が充填される称名寺式期の土器群である。

1はJ字状文を2段に配置し、5単位である。縄文を地文としてJ字状文が無文部で表現される。縄文は単節LR。口径32.4cm、現存高34.6cmを測る。

2はJ字状文を2段に配置し、細かい単節LR縄文を縦位に充填する。無文部との区画は太くて深い

沈線文である。現存高 26.0 cm、底径 8.0 cm を測る。

3 は沈線文により口縁部を区画し上面まで縄文を施文する。上面には盲孔のある突起がある。無文帶を挟んで胴部に J 字状文と劍先状文を描き単節 L R 縄文を充填する。無文部は良く磨かれる。口径 30.5 cm、現存高 13.8 cm を測る。

4 は J 字状文と劍先状文を縦 2 段に連続して配置し、単節 L R 縄文を充填する。無文部は丁寧に磨かれる。現存高 16.1 cm、底径 5.4 cm を測る。

5 は J 字状文を縦 2 段に配置し、無節 L 縄文を縦位に充填。器形は胴部が大きくくびれる。

108 ~ 110・113・122・124・126・127・129 ~ 131 は J 字状文をモチーフとするものである。

115 は J 字状文を連続して描き細かい単節 L R 縄文を充填する。

111 は J 字状文と O 字状文モチーフを横帯を挟んで上下に描き無節 L 縄文を充填する。

116 は上面に盲孔がある突起部分の口縁部である。

#### 第 7 類（第 24 図 132 ~ 135）

沈線のみで文様が描き出される土器群である。132 が胴部破片、133 ~ 135 が口縁部破片である。

#### 第 8 類（第 24 図 136・137）

沈線間に列点を施す土器群である。いずれも刺突文による列点である。

#### 第 9 類（第 24 図 138・139・140）

沈線文間に条線文を施文する土器群である。139 は蛇行状条線文施文。140 は全体に条線文施文。

#### 第 10 類（第 24 図 141 ~ 143）

条線文を施文する土器群である。141・142 は蛇行状条線文を施文。

#### 第 11 類（第 24 図 144）

堀之内式期の土器である。口縁部で口唇部にねじれた装飾を施し、正面に浅い盲孔が付く。沈線文区画内及びねじれ装飾から垂下する隆帯の端部に無節 L 縄文施文。

#### 第 5 群（第 24 図 145）

縄文時代後期中葉の土器、加曾利 B 2 式期のものである。複段の横帯文が描かれる。並行沈線と「( )」状文を施す。口縁部にはノの字状文が張り付く。単節 R L 縄文施文。内外面とも丁寧に研磨されている。器形としては内面に稜をもつ。

#### 第 6 群（第 24 図 148・149）

縄文のみの土器を一括する。いずれも胴部破片である。148 は単節 L R 縄文施文、下半磨かれる。149 は無節 L ? 縄文施文。

#### 第 7 群（第 24 図 150 ~ 163）

底部を一括する。

#### 第 8 群（第 24 図 147）

土製品である。同心円状の文様を隆帯で表現した円形の板状製品である。端部と隆帯文の区画内に 1 ヶ所穿孔がみられる。端面には赤彩が施されているようである。

#### 第 9 群（第 25 図 164 ~ 166）

弥生時代中期の土器を一括する。164 は横走波状沈線文施文部と細かい単節 L R 縄文施文部が交互に

配されている。165・166は横走沈線文及び単節R L縄文施文区画内に波状沈線文を施文する。

## (2) 石器

### 石鏃 (第25図167・168)

いずれもチャート製で無茎である。167は圓基鏃で脚部の片方が欠損し、168は円基鏃で刃部先端が欠損していた。

### 搔器 (第25図169～173)

169・171は撥形、172は方形、170・173は先端が尖る形状である。169がチャート製、170が黒曜石製、171が黒色安山岩製？、172が黒色頁岩製？、173がガラス質黒色安山岩製である。

### 打製石斧 (第25図174・175)

174は分銅形と考えられ、両面に自然面が残る。砂岩製？。175は撥形と考えられ、基部が欠損する。ホルンフェルス製。

### 敲石 (第25図176)

砂岩製で敲打痕がある。

### 磨石 (第25図177～179)

177・179は花崗岩製、178は砂岩製である。178は敲き痕があり、敲石の用途でも使われていたと考えられる。

## 2 寺東遺跡第2区の調査

第1区の北西に位置し、全長約18.4mの調査区である。標高26.80～29.00mであった。地表から遺構確認面までの厚さは約1.9mを測り、明青灰色ないしは灰白色の粘土及び砂の氾濫土が堆積していた。遺構確認面の直上は厚さ0.30m程の黒褐色土の縄文土器包含層が堆積していた。調査区の北部には粘土及びシルトが堆積する谷が西から東へえぐるような形で確認できた。

遺構は土坑が3基、ピットが23基であった。

### (1) 土坑

土坑は、総数にして3基検出した。土坑は調査区の南部にまとまって検出した。第1・2・3号土坑とも互いに重複して検出した。平面プランは、楕円形ないし方形を呈すもので、深さは、0.15～0.20m前後に収まり浅かった。出土遺物は、第1・2号土坑から縄文土器が出土した。時期は縄文時代後期である。

以下土坑ごとに詳細を記載する。

#### 第1号土坑 (第27・28図)

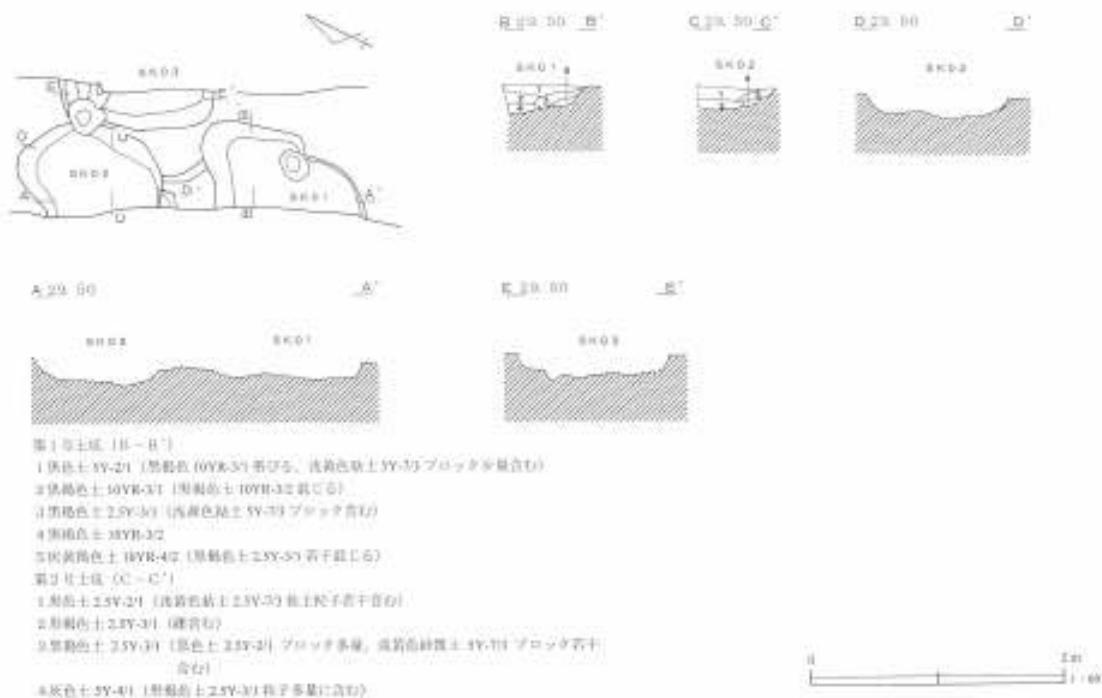
J-5グリッドから検出した。遺構の西側は調査区域外のため検出されなかった。

平面プランは不整形な方形で、規模は長軸1.16m、短軸不明、深さ0.22mであった。土坑内にピットが存在した。

出土遺物は縄文土器深鉢形土器等が出土した。第28図1が出土した土器である。沈線文が垂下する。



第26図 寺東遺跡第2区遺構図



第27図 第2区第1～3号土坑

器面は磨かれている。

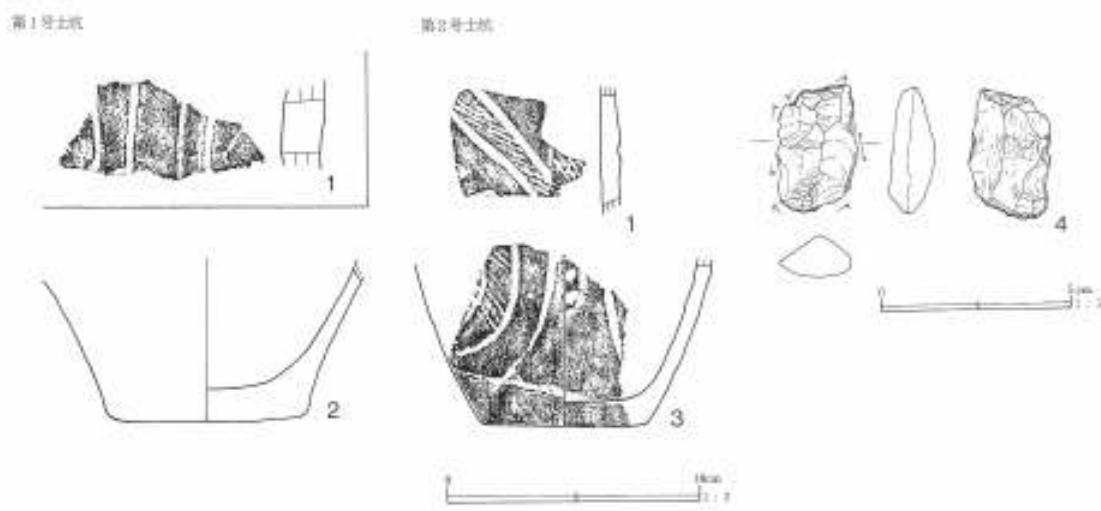
時期は縄文時代後期である。

#### 第2号土坑 (第27・28図)

I・J-4・5グリッドから検出した。遺構は第22号ピットと重複関係にあったが、新旧関係は明らかにできなかった。また、西側は調査区域外のため検出されなかった。

平面プランは梢円形で、規模は長軸1.14m、短軸不明、深さ0.18mであった。

出土遺物は縄文土器深鉢形土器、石器等が出土した。第28図1～3が出土した土器、4が石器である。1は深鉢形土器胴部破片で、横帯区画を配し三角形文を描き無飾縄文を充填する。2・3は底部である。3は鎖状隆起貼付文が垂下する。この貼付文を中心に左右に沈線によるJ字状文が描かれ細か



第28図 第2区土坑出土遺物

い単節LR縄文を充填する。

4はチャート製の方形の搔器である。

時期は縄文時代後期である。

### 第3号土坑（第27図）

J-5グリッドから検出した。遺構は第21・22号ピットと重複関係にあったが、新旧関係は明らかにできなかった。また、東側は調査区域外のため検出されなかった。

平面プランは隅丸方形状と推定され、規模は長軸1.22m、短軸不明、深さ0.17mであった。

出土遺物は検出されなかった。

### （2）ピット

ピットは、総数にして23基検出した。ピットは調査区の南部及び中央部にまとまって検出した。第1～13号ピットは単独で、第14・15・23号ピット、第16・17号ピット、第21・22号ピットは互いに重複して検出した。平面プランは、円形ないし梢円形を呈すものがほとんどであった。深さは0.10m前後と0.25m前後のものが主体をなしていた。出土遺物は概ね縄文時代後期初頭であるが、ピット総数のおよそ25%でしか出土しなかった。詳細は一覧表にて記載する。（第29・30図、第3表）

### 出土遺物（第30図）

ピットから出土した図示可能な遺物を掲載する。

1～3は第3号ピットから出土した土器である。1は深鉢形土器の胴部破片である。垂下する沈線文を施す。器面は丁寧に磨かれる。2は突起部分である。沈線文間に刺突文を施す。上面に盲孔あり。3も突起部分と思われる。上面にすり鉢状の盲孔があくものである。

4・5は第4号ピットから出土した土器である。4は沈線によるJ字状文を描き単節LR？縄文を充填する。5は突起状のものである。沈線間に単節LR縄文を施す。上面は欠損しているが対向するC字状を呈する。器面は丁寧に磨かれる。

いずれも縄文時代後期と考えられる。

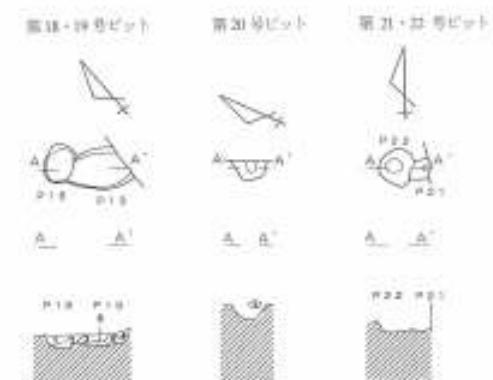
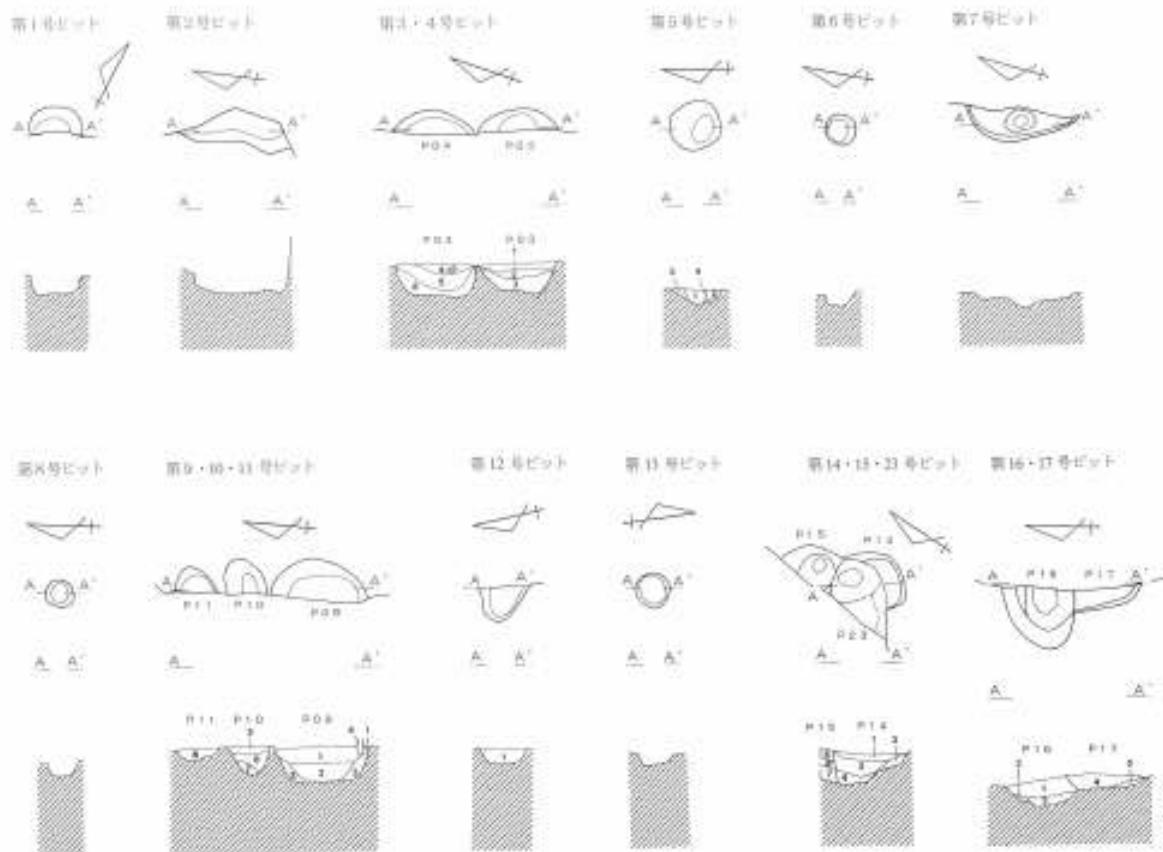
### （3）谷

調査区の北部に検出最大幅4.20m、最小幅0.46mの谷を検出した。谷は西から東へ調査区をえぐるような形で検出され、粘土及びシルトが堆積していた。この谷の南端まで明黄褐色土のローム層が確認でき、遺構検出もここまでと考えられる。この谷の北は、試掘調査の結果ローム層がなくなり粘土層が堆積する箇所になるため、当時は低地であったと考えられる。遺跡の範囲もこの谷までとなっている。

出土遺物は少なく、縄文土器深鉢形土器破片、石器が出土した。（第30図6～8）

6は波状縁の土器で、口縁部破片である。口縁部内外面に口縁に沿って沈線文を施す。内面のものは盲孔を起点にしている。外面はこの沈線文下に隆帯が巡り、その隆帯の上下に盲孔を起点にした沈線文が施される。器面は良く磨かれている。7は胸部破片である。垂下する沈線文内に条線文を施す。J字状文と思われる沈線文も描かれる。

8は磨石である。石材は緑色凝灰岩ではないか。



**第12号ピット**  
1黒褐色土 10YR-3/1 (II-3) 黄色土 2.5Y-6/4 根子混じる、浅黄色土上 2.5Y-10 粒子若干  
食砂)

**第14・15号ピット**  
1黒褐色土 2.5Y-2/1  
2黒褐色土 2.5Y-3/1  
3オリーブ褐色土 2.5Y-3/1 (暗灰青色土 2.5Y-4/2 小ブロック多量に含む)  
4灰色土 2.5Y-4/1 (淡黃色土 2.5Y-3/4 粒子多量に含む)  
5黒褐色土 2.5Y-2/1  
6オリーブ褐色土 2.5Y-3/1  
7灰褐色土 2.5Y-4/1 (II-3) 黄色土 2.5Y-6/4 粒子多量に含む)

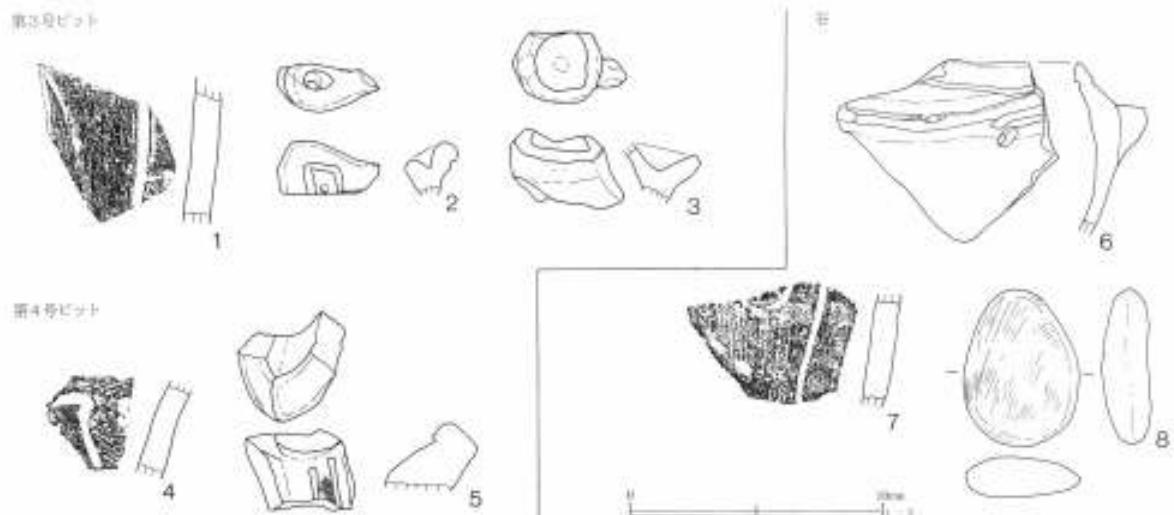
**第16・17号ピット**  
1黒色土 2.5Y-2/1 (深褐色 10YR-3/1 根びら)  
2オリーブ褐色土 2.5Y-3/1 (II-3) 黄色土 2.5Y-6/4 多量に含む)  
3黄褐色土 2.5Y-4/1  
4黒褐色土 10YR-3/2  
5灰褐色土 2.5Y-4/1 (黄褐色 10YR-3/1 根びら)

**第18・19号ピット**  
1黒褐色土 2.5Y-3/1 (深褐色土 2.5Y-3/1 根子若干含む)  
2黒褐色土 2.5Y-3/1 (暗灰青色土 2.5Y-4/2 根びら)  
3暗褐色土 2.5Y-3/2 (暗褐色土 2.5Y-3/1 粒子若干含む)  
4褐色土 2.5Y-2/1 (暗褐色土 2.5Y-3/1 粒子若干含む)  
5黑褐色土 2.5Y-3/1 (暗褐色土 2.5Y-3/1 粒子若干含む)  
6黑褐色土 2.5Y-3/2 (暗褐色土 2.5Y-3/1 粒子若干含む)

**第18・19号ピット**  
1黒褐色土 2.5Y-3/1 (深褐色 10YR-3/2 根びら)  
2黒褐色土 10YR-3/2 (暗褐色土 2.5Y-3/1 ブロック少量含む)  
3オリーブ褐色土 2.5Y-3/1  
4オリーブ褐色土 2.5Y-3/1  
5深褐色土 10YR-3/2 (オリーブ褐色土 2.5Y-3/1 根びら)  
6灰褐色土 2.5Y-4/1 (深褐色土 10YR-4/2 根びら)

0 100 200 300

第29図 第2区第1~23号ピット



第30図 第2区ピット・谷出土遺物

第3表 第2区ピット一覧表

番号	位 置	プラン	長軸×短軸×深さ(cm)	出土遺物	時期	重複關係
1	J-5	円形	4.2××1.4	縄文土器		
2	J-5	不整形	××1.8	縄文土器	中期?	
3	I-4-5	楕円形	6.2××2.4	縄文土器	後期	
4	I-4	楕円形	6.2××2.6	縄文土器	後期	
5	I-4	円形	3.9×3.6×1.2	縄文土器		
6	I-4	円形	2.4×2.4×8	なし		
7	I-4	楕円形	8.6××1.3	なし		
8	I-4	円形	2.2×2.2×1.3	なし		
9	I-4	楕円形	7.5××2.8	なし		
10	I-3-4	楕円形	3.0××2.2	なし		
11	I-3	円形	3.0××1.0	なし		
12	I-3	楕円形?	3.8××1.2	なし		
13	I-3	円形	2.6×2.6×8	なし		
14	I-3	楕円形	5.5×4.8×2.6	なし	P15 (日)	
15	I-3	楕円形	3.4××2.6	なし	P14 (新)	
16	I-3	楕円形	×5.4×2.0	なし	P17	
17	I-3	楕円形	5.2××1.0	なし	P16	

番号	位置	プラン	長軸×短軸×深さ(cm)	出土遺物	時期	重複開區
18	I-3	円形	3.0×3.0×1.0	なし	P19 (II)	
19	I-3	椭円形	×3.3×8	縄文土器	後期?	P18 (新)
20	J-5	円形	2.8××1.2	なし		
21	J-5	椭円形	1.6××9	なし		
22	J-5	円形	2.8×2.5×1.0	なし		
23	I-3	不明	××	なし		P14

### 3 寺東遺跡第3区の調査

第1区の南西に位置し、全長約21.4mの調査区である。標高29.00～29.20mであった。地表から遺構確認面までの厚さは道路の盛土を除いて約1.4mを測り、黄灰色ないしは灰白色の粘質土の氾濫土が堆積していた。遺構確認面の直上は厚さ0.20m程の黒色土の縄文土器包含層が堆積していた。調査区の南部には中間に土手状の高まりを挟んで、東から西へ入り江のような谷が調査区を横切るような形で確認できた。それぞれの谷の最大幅は5.6m、4.7mで、深さは2箇所とも0.50mであった。両の谷は2段に落ち込んでいた。

遺構は土坑が2基、ピットが3基であった。

#### (1) 土坑

土坑は、総数にして2基と少なかった。土坑は、調査区のほぼ中央部と南端に検出した。各々単独で検出した。平面プランも深さも異なるものであった。出土遺物はいずれの土坑も比較的多く、縄文土器の深鉢形土器、浅鉢形土器が出土した。時期は、概ね縄文時代後期初頭である。

以下土坑ごとに詳細を記載する。

##### 第1号土坑(第32～34図)

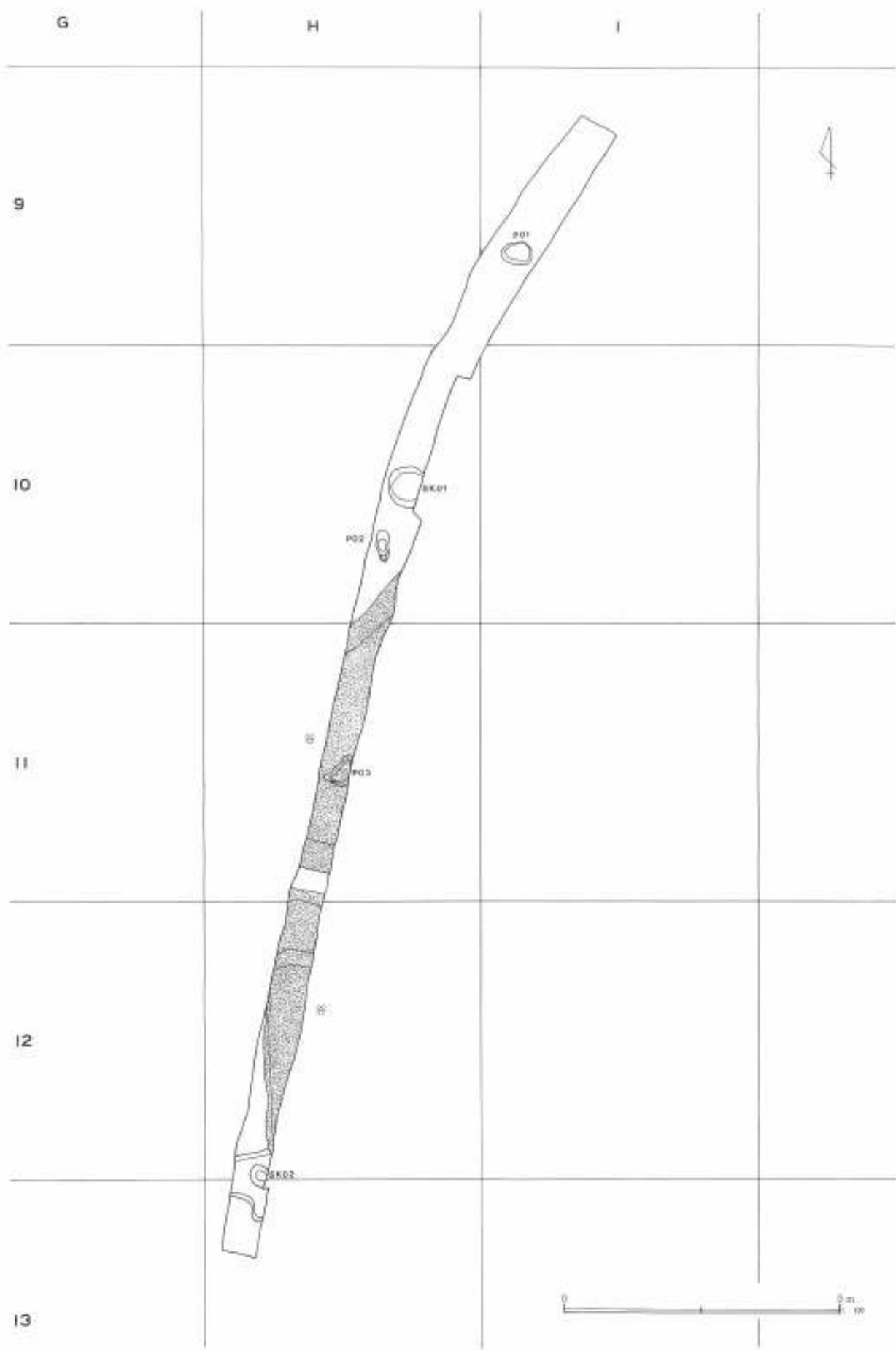
H-10グリッドから検出した。遺構の東側は調査区域外のため検出されなかった。

平面プランは円形で、規模は長軸0.74m、推定短軸0.70m、深さ0.52mであった。

出土遺物は縄文土器深鉢形土器、浅鉢形土器が出土した。遺物はおおよそ上下2層に分かれて出土した。第33図1～14、第34図15が出土した土器である。

1は深鉢形土器である。沈線により上段にJ字状文、下段にJ字状文の鉤部をR字状に描く。沈線文施文後沈線間に列点の刺突文を下方から上方へ向かって施文、その後器面を研磨する。無文部は縱方向に良く研磨されている。器面は所々摩滅していて、赤彩が施されていたと思われるが剥離している。現存高40.6cm、胴部最大径36.3cmを測る。

2～5は1と同一個体と考えられる深鉢形土器の口縁部である。いずれも沈線文によるモチーフ内に列点の刺突文を施す。2・3はJ字状文、4は劍先状文の部分である。また、いずれも無文部は良く研



第31図 寺東遺跡第3区遺構図

磨されており、口縁部は横方向、胴部は縦方向である。10も沈線間に列点の刺突文が施されるものである。

6は深鉢形土器口縁部破片で、口縁部に無文帶をもち、胴部に縦方向の条線文を施文する。

7・8は口縁部破片で、沈線文が施文される。9は胴部破片で、沈線文が施文される。11は垂下する沈線文のみ施文される。

12はR字状文が描かれ、沈線間に条線文が施文される。

13は蛇行する条線文が施文される。

14は底部破片である。

15は浅鉢形土器の突起（把手）部分と思われる。橋状把手の上方に正面から内面へ貫通する孔が穿たれ、側面にも貫通孔がある。内面は上方の貫通孔と下方の盲孔を繋ぐ沈線文を施文する。胴部にも沈線文が施される。

時期は、縄文時代後期初頭から後期初葉である。

## 第2号土坑（第32・34図）

H-12グリッドから検出した。東及び西側は調査区域外のため検出されなかった。

平面プランは南部分が突き出す方形状で、規模は長軸1.26m、短軸不明、深さ0.10mであった。

出土遺物は縄文土器深鉢形土器等が出土した。第34図1～18が出土した土器である。

～4は沈線ないし隆起線で区画し縄文を充填する深鉢形土器胴部破片である。1・2はJ字状文モチーフが沈線によって描かれ縄文が充填される。4は隆起線で区画するものである。3・4は加曾利E式または加曾利E式系の土器と思われる。

5は肉厚の断面梢円形の口縁部破片である。

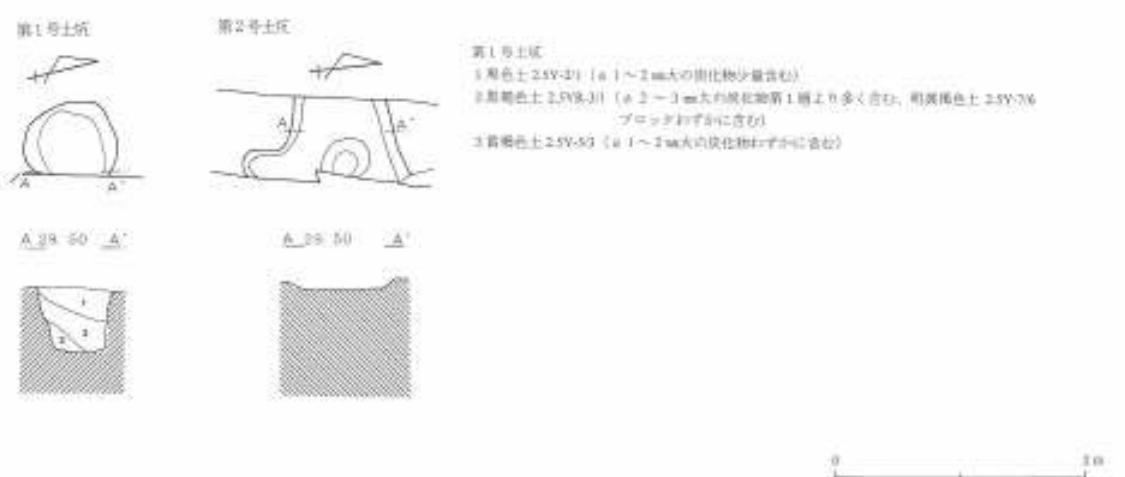
6は沈線文でJ字状文ないしは剣先状文を描いていると思われる口縁部破片である。

7は口縁部の無文帶を沈線文で区画し沈線文下は斜めの条線文を施文する。

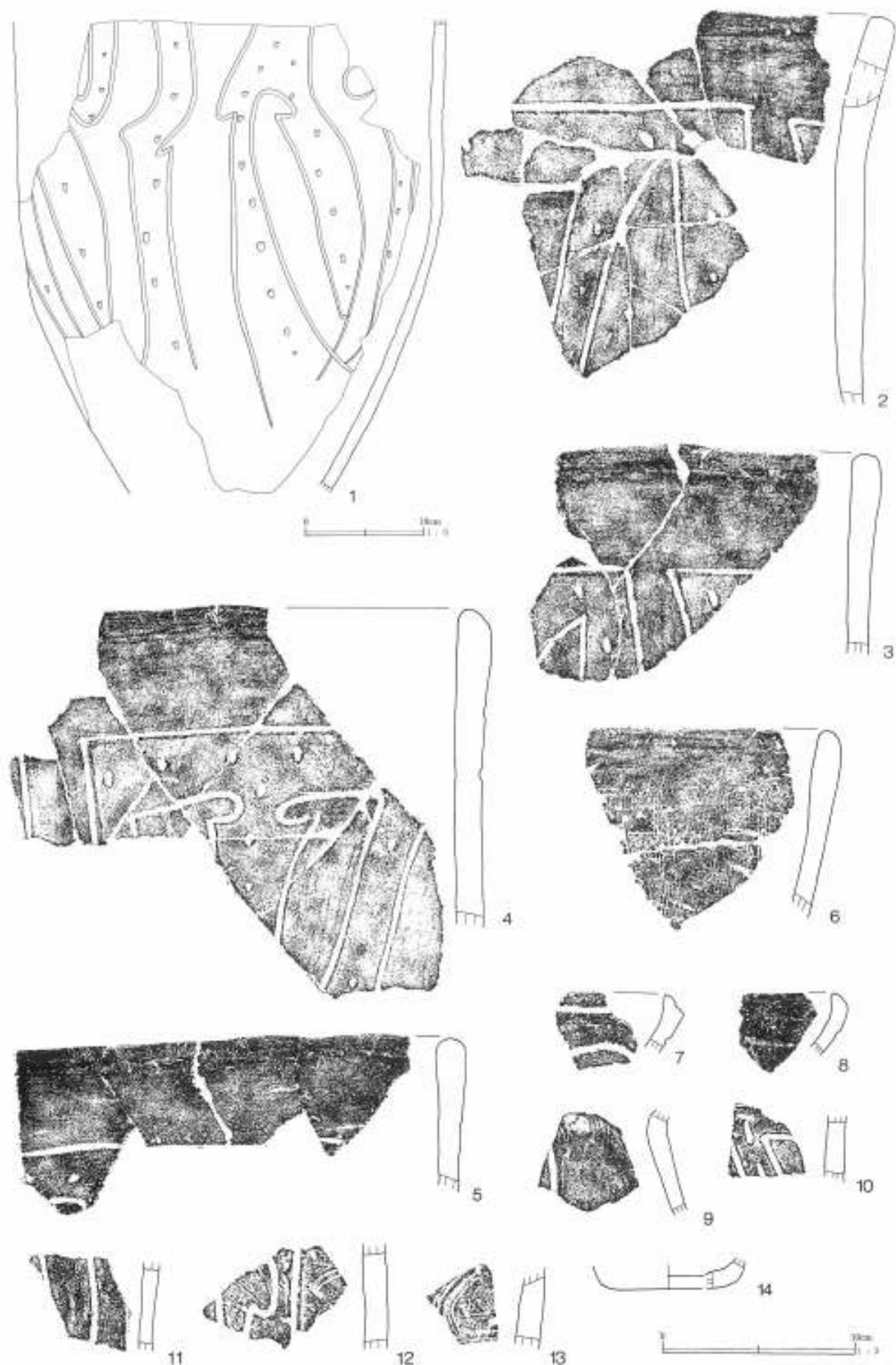
8・12～14は沈線文間に列点の刺突文を施文するもので、12はJ字状文がモチーフと思われる。

10は浅鉢形土器の突起部分で沈線文が強を描いて施文されている。

15は突起部と思われ、正面に一列の刺突文を、上面に扁平なC字状文を描く。

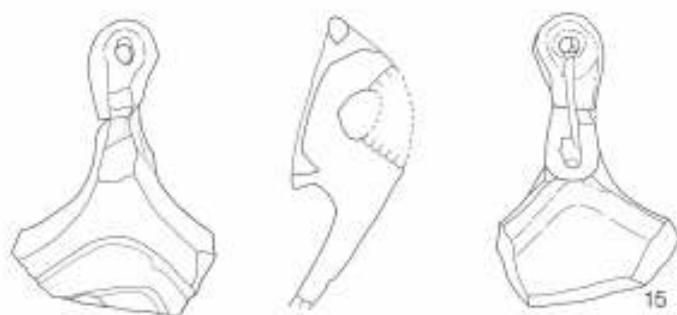


第32図 第3区第1・2号土坑

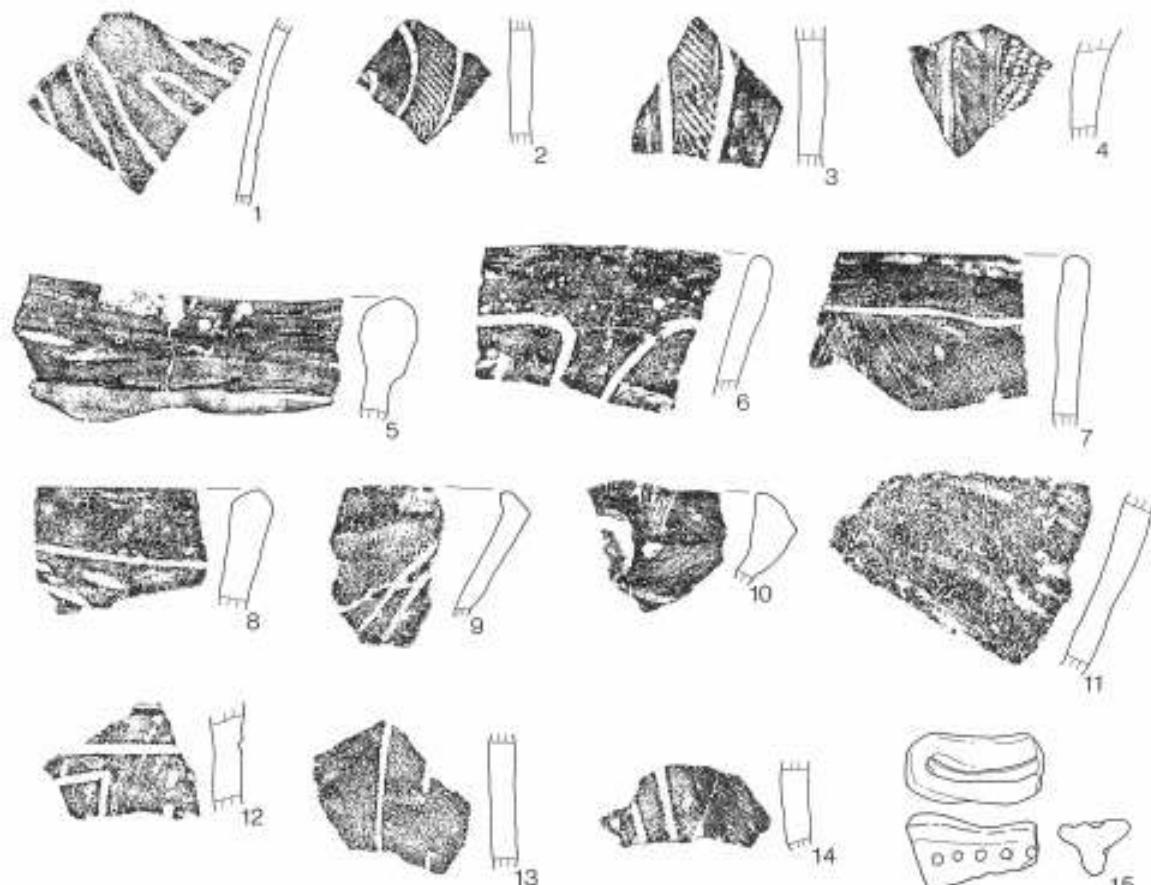


第33図 第3区土坑出土遺物 (1)

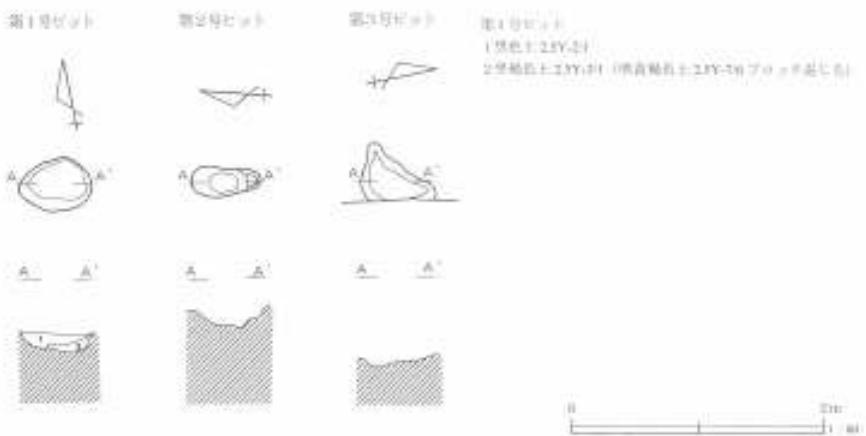
第1号土坑



第2号土坑



第34図 第3区土坑出土遺物 (2)



第35図 第3区第1～3号ピット

16～18は底部を一括する。

時期は縄文時代後期初頭と考えられる。

## (2) ピット

ピットは、総数にして3基と少なかった。ピットは調査区の北部、中央部、北側の谷の中央部にと各々単独で検出した。遺物を出土したピットは第1号ピットだけであった。詳細は一覧表にて記載する。(第35図、第4表)

第4表 第3区ピット一覧表

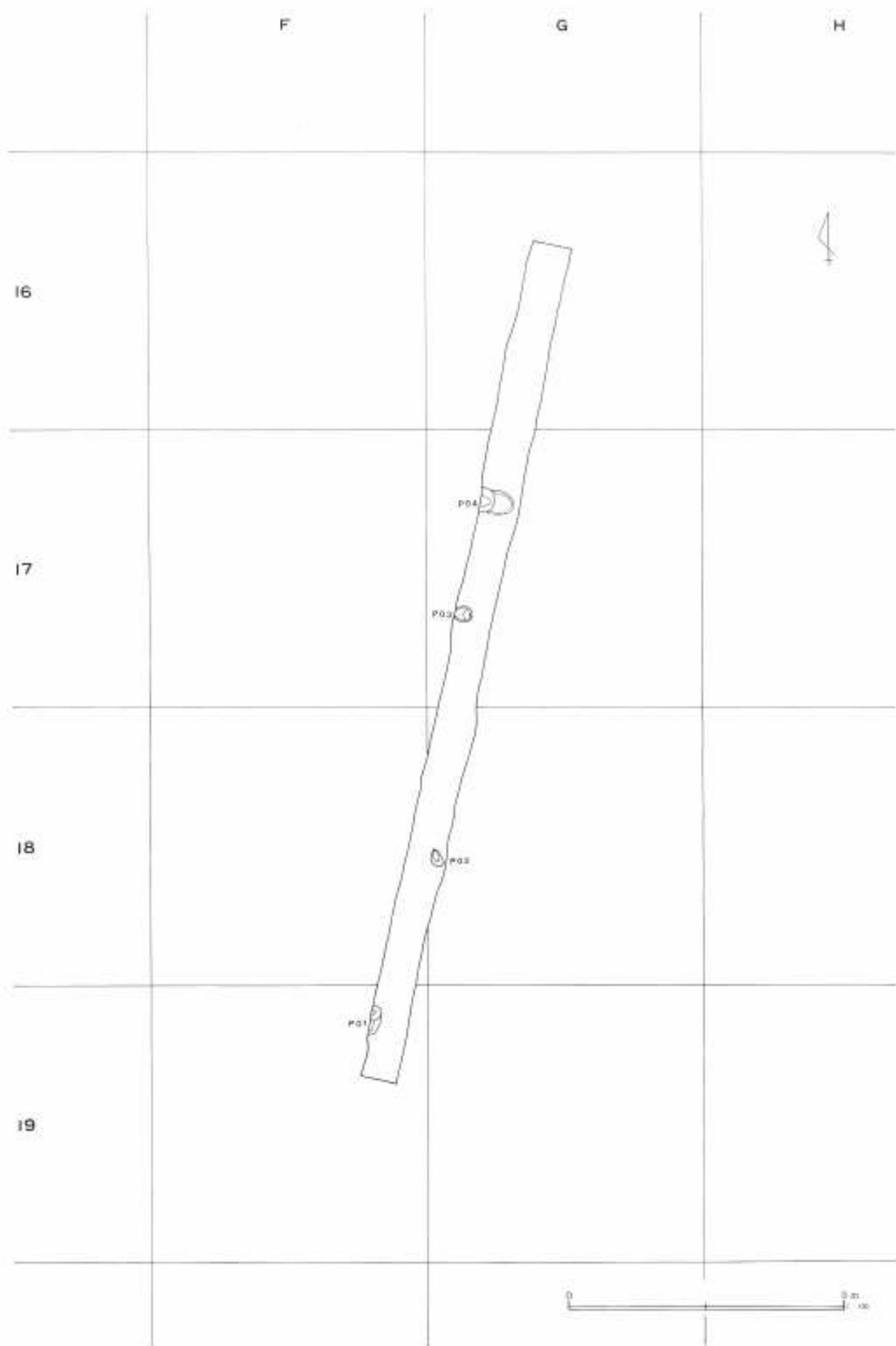
番号	性質	プラン	長軸×短軸×深さ(cm)	出土遺物	時期	重複関係
1	I-9	橢円形	5.8×4.0×1.4	縄文土器	後期?	
2	H-10	長楕円形	5.6×2.4×1.6	なし		
3	H-11	不整形	5.8×3.7×6	なし		

## 4 寺東遺跡第4区の調査

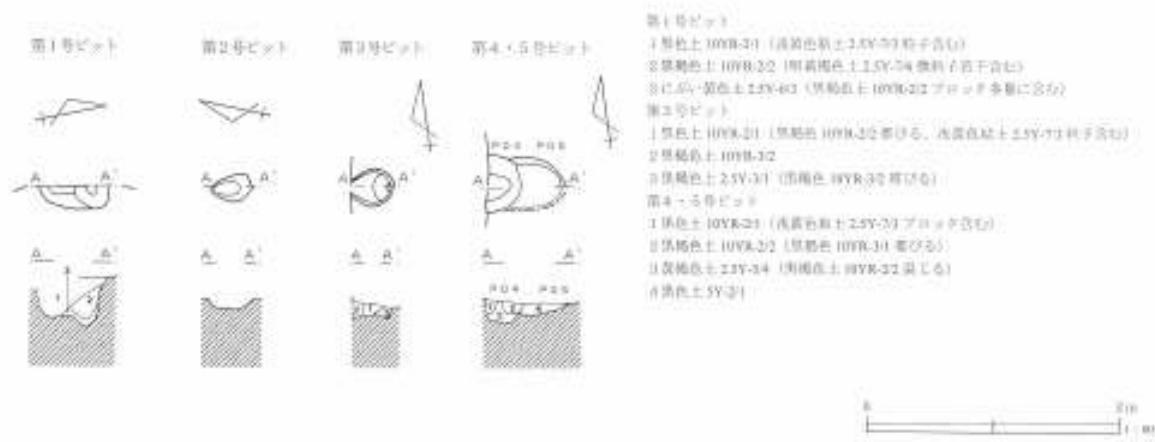
第3区の南に位置し、全長約15.2mの調査区である。標高29.00～29.35mであった。本調査区では遺構が確認できなかった。遺構確認面に相当する層の直上は厚さ0.30m程の黒色土の縄文土器包含層が堆積していた。

## 5 寺東遺跡第5区の調査

第4区の南に位置し、全長約15.4mの調査区である。標高29.00～29.30mであった。地表から遺構確認面までの厚さは道路の盛土を除いて約1.7mを測り、主ににぶい黄褐色、灰黄褐色、暗灰黄色の粘質土が堆積していた。遺構確認面の直上は厚さ0.45m程の黒色土及び黒褐色土の縄文土器包含層が



第36図 寺東遺跡第5区遺構図



第37図 第5区第1～5号ピット

堆積していた。

遺構はピットが5基であった。

### (1) ピット

ピットは、総数にして5基検出した。ピットは調査区に散在して検出した。第1～3号ピットは単独で、第4・5号ピットは互いに重複して検出した。平面プランは、円形ないし橢円形を呈すものがほとんどであった。深さは0.10m前後のものが主体となっていた。出土遺物は検出できなかった。詳細は一覧表にて記載する。(第37図、第5表)

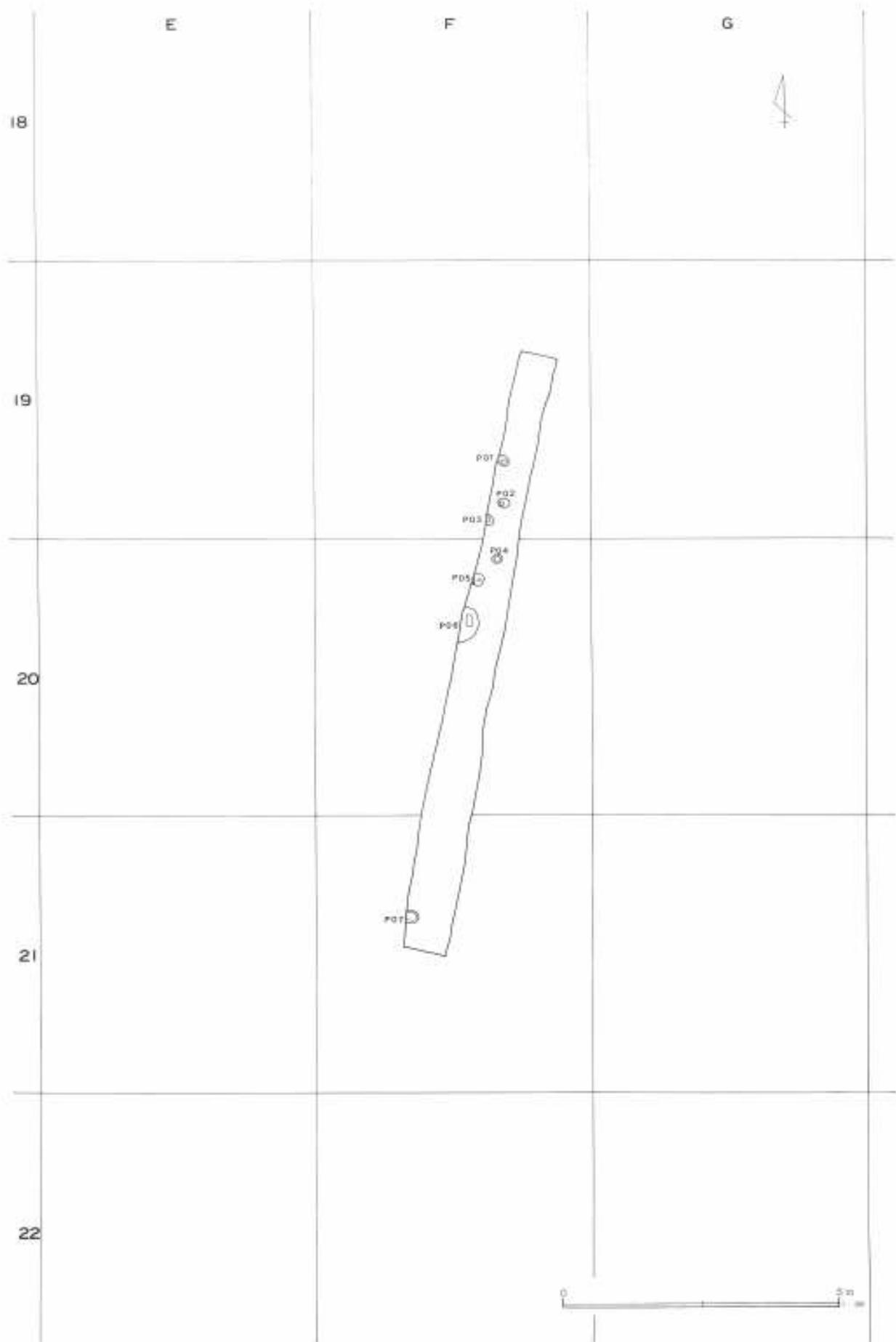
第5表 第5区ピット一覧表(表中、括弧付数値は推定値)

番号	位置	プラン	長軸×短軸×深さ(cm)	出土遺物	時期	重複関係
1	F-19	橢円形	5.4×4.0	なし		
2	G-18	隅丸三角形状	3.3×2.2×8	なし		
3	G-17	橢円形	(3.6)×3.0×9	なし		
4	G-17	橢円形	4.5×1.6	なし	P 5 (E)	
5	G-17	橢円形	×(4.2)×8	なし	P 4 (新)	

## 6 別府氏館跡第6区の調査

第5区の南に位置し、全長約10.5mの調査区である。標高29.25～29.47mであった。地表から遺構確認面までの厚さは道路の盛土を除いて約1.6mを測り、主に灰褐色、灰黄色の粘質土が堆積していた。本調査区では他の調査区で確認された黒褐色土の縄文土器包含層が非常に薄く約0.10mの厚さであった。

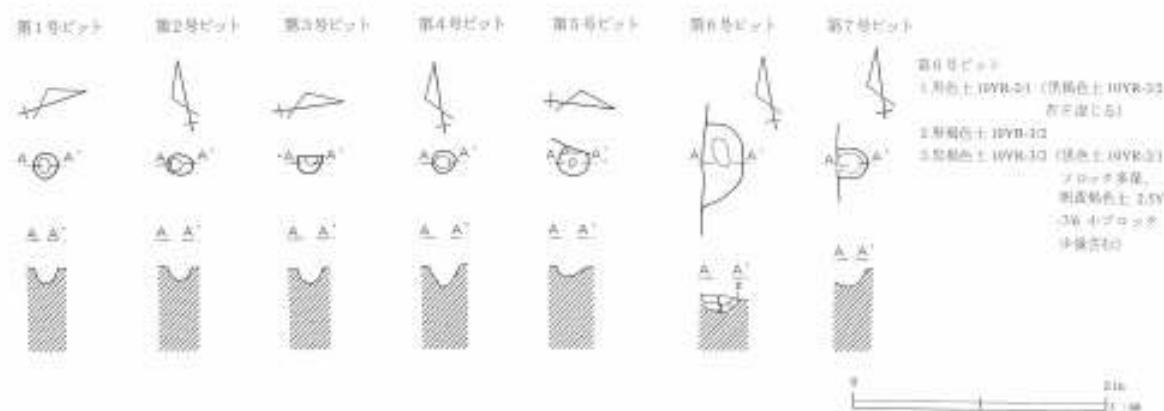
遺構はピットが7基であった。



第38図 別府氏館跡第6区遺構図

### (1) ピット

ピットは、総数にして7基検出した。ピットは主に調査区の北寄りにまとまって検出した。全て単独で検出し、第1～6号ピットは各々隣接して検出した。平面プランは、円形ないし椭円形を呈すものであった。深さは0.10m～0.15mのものであった。出土遺物は検出できなかった。詳細は一覧表にて記載する。(第39図、第6表)



第39図 第6区第1～7号ピット

第6表 第6区ピット一覧表

番号	位置	プラン	長軸×短軸×深さ(cm)	出土遺物	時期	重複関係
1	F-19	円形	2.0×1.8×1.2	なし		
2	F-19	椭円形	2.1×1.7×1.0	なし		
3	F-19	円形?	×1.8×1.0	なし		
4	F-20	円形?	1.8×1.7×1.6	なし		
5	F-20	円形?	2.4××8	なし		
6	F-20	椭円形?	6.2××1.4	なし		
7	F-21	椭円形	×2.4×1.3	なし		

## 7 別府氏館跡第7区の調査

第6区の南に位置し、全長約22.3mの調査区である。標高29.35～29.50mであった。地表から遺構確認面までの厚さは表土を含めて約2.05mを測り、主に灰黄褐色、暗灰黄色の粘質土が堆積していた。本調査区では他の調査区で確認された黑色土の縄文土器包含層が確認されたが、縄文土器はほとんど出土せず、偶然にも古墳が1基確認され、円筒埴輪片が出土した。

遺構は一部だが古墳1基であった。



第40図 別府氏館跡第7区遺構図

## (1) 古墳

古墳は調査区の中央に検出し、第1号墳と呼称した。

### 第1号墳（第41～45図、第7表）

調査区の中央、F-22、E・F-23、E-24グリッドに位置していた。幅狭の調査区であったので東西は調査区域外であった。

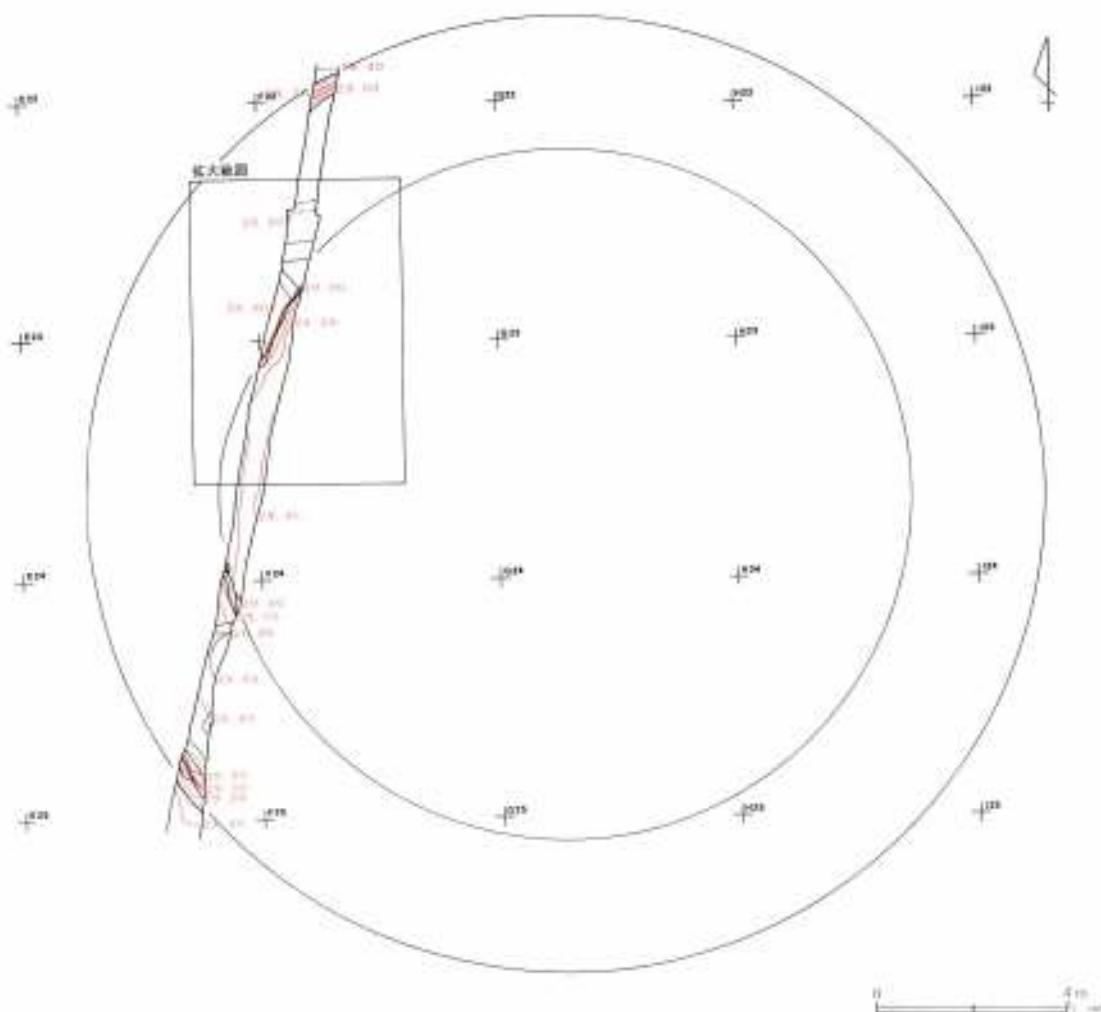
規模は、円墳とすれば推定墳丘径14.4m、推定周溝径20.0mである。

墳丘はわずかに残っていた。周溝は、北の周溝が約0.50mと浅く幅広く、南の周溝が約0.80mと深く狭かった。推定周溝幅は、2.8mである。古墳全体の標高は28.60～29.40mの間である。

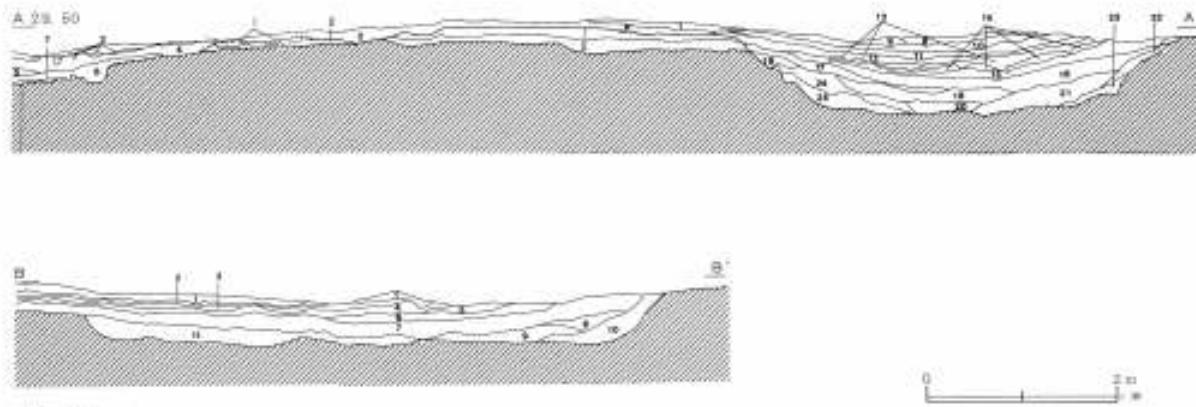
出土遺物はほとんどが北の周溝内及び墳丘の北斜面で出土し、全て円筒埴輪であった。但し、北側の周溝内から1点打製石斧が出土している。

円筒埴輪は、法量、形態、ハケ目等の違いからおおよそ以下の7種類に分類される。

A 第44図1、5・6は突帯の形状、ハケ目の本数が2cmあたり7～8本、内面の口縁部付近のハケ目調整方法などの共通点がある。第44図9も該当する。また、口縁部の形態や口縁部と第2突帯間の長さの違いからさらに2分類される。



第41図 第7区第1号墳



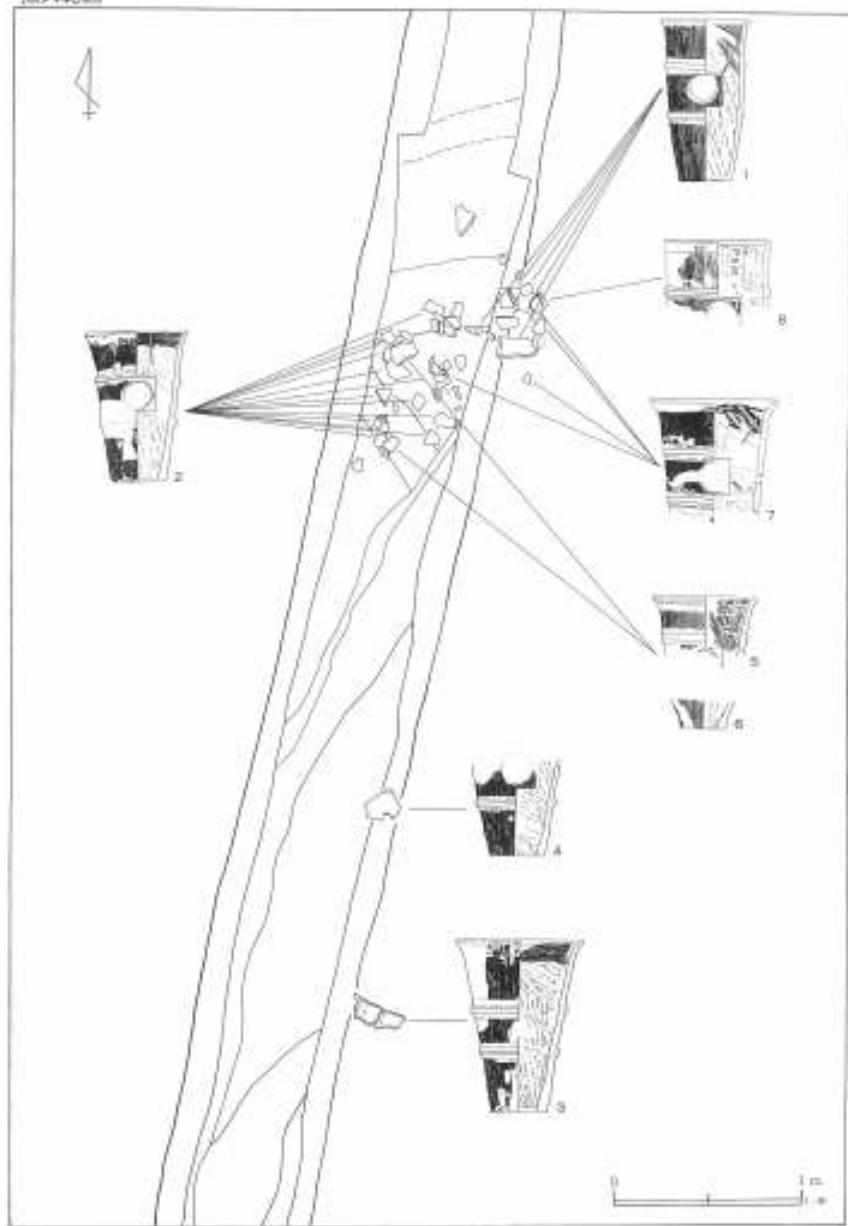
[九一五]

- 1 深灰色粘質土 2.5Y-4/1 (灰白色シルト 7.5Y-8/2 ブロック・粒子少々、埴輪片含む)  
1 日照灰黄色粘質土 2.5Y-4/2 (黒褐色粘質土 2.5Y-3/1 ブロック・粒子多量、黑色粘質土  
2.5Y-4/6 小ブロック・粒子若干含む)  
1 深灰色粘質土 10YR-4/1 (シート質、灰白色粘質土 2.5Y-8/1 多量に混じる、黒褐色土  
10YR-3/1 粒子含む)  
1 黄灰色粘質土 2.5Y-6/1 (灰白色粘質土 2.5Y-4/1 ブロック・粒子少々、埴輪片含む)  
1 黑褐色粘質土 2.5Y-5/1 (黒色粘質土 2.5Y-2/1 ブロック多量、灰白色シルト 3GY-8/1 ブロ  
ック多量、埴輪片含む)  
# 深灰黄色粘土 2.5Y-4/2 (黄灰色粘土 2.5Y-8/6 粒子若干含む)  
B 黑褐色粘質土 10YR-4/2  
B 黑褐色粘質土 2.5Y-3/1 (黒色土 2.5Y-8/1, 3/1 混じる、黑色粘質土 2.5Y-8/6 粒子多量に  
含む)  
7 黑色粘質土 2.5Y-3/1 (黑色粘質土 2.5Y-4/6 粒子若干含む)  
# 灰色粘質土 2.5Y-4/1 (灰色粘質土 2.5Y-4/1 粒子含む、灰白色粘質土 2.5Y-8/1 ブロ  
ック少々含む)  
9 黑褐色粘土 2.5Y-7/1 (粘性多量、マンガン粒子含む)  
10 黄褐色粘土 2.5Y-5/1 (灰白色シルト 2.5GY-4/1 ブロック多量、粒分少々、マン  
ガニ粒子、埴輪片含む)  
11 灰白色シルト 2.5Y-8/1 (灰褐色粘土 2.5Y-5/1 小ブロック・粒子若干、粒分多量、マン  
ガニ粒子、埴輪片含む)  
12 黑褐色粘土 2.5Y-6/1 (粘性つよい)、灰白色シルト 2.5GY-4/1 多量に混じる、粒分若干、  
マンガニ粒子多量に含む)  
13 灰白色粘土 2.5Y-8/2 (オーリーブ黒色粘土 2.5Y-3/1 小ブロック・粒子少々、粒分多量に含  
む)  
14 オーリーブ黑色粘土 2.5Y-3/1 (黑色粘土 2.5Y-2/1 粒子若干含む)  
15 黑褐色粘土 2.5Y-3/2 (灰白色粘土 2.5Y-8/2 粒子ごくわずか)、灰白色シルト 2.5GY-4/1 ブ  
ロックごくわずか、埴輪片含む)
- 16 深灰褐色粘質土 10YR-4/1 (灰白色粘土 7.5Y-8/2 粒子ごくわずか、暗黃褐色土 2.5Y-1/6  
ブロック、マンガニ粒子含む)  
17 灰褐色粘質土 2.5Y-4/2 (灰白色シルト 2.5GY-8/1 ブロックごくわずか含む)  
18 灰褐色粘質土 2.5Y-4/1 (灰白色シルト 2.5Y-8/1 ブロック、灰白色シルト 2.5GY-8/1 ブ  
ロック、黑色粘質土 2.5Y-2/1 ブロック含む)  
19 オリーブ黑色土 2.5Y-3/1 (暗黃褐色粘質土 2.5Y-4/2 混じる)  
21 黑褐色粘質土 2.5Y-3/1 (黑色粘質土 2.5Y-2/1 ブロック、黑色粘質土 2.5Y-4/6 ブロック  
・粒子含む)  
22 灰褐色粘質土 10YR-4/1 (黄色粘質土 2.5Y-8/6 ブロック・粒子少量含む)  
23 黑褐色粘質土 2.5Y-4/1 (粘性つよい)、黑褐色粘質土 10YR-4/1 混じる、黑色粘質土 2.5Y-8/6  
粒子少量含む)  
24 黄褐色粘質土 2.5Y-4/1 (黄色粘質土 2.5Y-8/6 粒子、マンガニ粒子含む)  
25 灰色粘質土 2.5Y-4/1 (黄色粘質土 2.5Y-8/6 ブロック・粒子少量含む)  
1 (白一白)  
1 前オーリーブ灰褐色粘土 2.5GY-4/1 (深灰褐色土 2.5Y-5/2 ブロック多量に含む)  
2 深灰褐色粘質土 2.5Y-5/2  
3 深灰色粘質土 10Y-4/1  
4 深灰褐色粘質土 2.5G-2/1  
5 墓碑灰褐色粘質土 2.5GY-3/1  
6 オリーブ灰褐色粘土 10Y-3/2  
7 オリーブ灰褐色粘土 2.5Y-3/2  
8 前オーリーブ灰褐色粘土 2.5GY-3/1  
9 オーリーブ灰褐色粘土 2.5Y-3/1 (粘性やや弱い)、暗黃褐色粘土 2.5Y-3/6 少量含む)  
10 黑褐色土 10YR-3/2 (暗黃褐色土 2.5Y-3/6 和少量含む)  
11 黑褐色土 10YR-3/2 (暗黃褐色土 2.5Y-3/6 粒子少量含む)

第42図 第1号土壤層断面図

- B 第44図2～4も突帯の形状、ハケ目の本数が14～17本/2cm、内面の口縁部ハケ目調整及びそ  
れ以下の右傾斜指ナデ調整など共通点がある。但し、3は口縁部から第2突帯までの長さが長いと  
いう相違点がある。第45図10、16も該当する。
- C 第44図7は口縁部が大きく外反し、ハケ目が34～35本/2cmと非常に細かい。また、内面の口  
縁部付近のハケ目調整や指頭圧痕を残す調整など特徴的である。
- D 第44図8は口縁部の開きが少なくほぼ直立し、内面の調整が右傾斜ハケ目の後縦方向に指ナデを  
施しハケ目を消しているなどが特徴である。
- E 第45図11は内面調整に特徴があり全て縦方向の指ナデ調整である
- F 第45図12は口縁部がS字状に開き、胎土に金雲母が多量に含まれる。
- G 第45図14は直線的に開く口縁、ハケ目が10本/2cmの特徴がある。  
詳細は観察表を参照されたい。

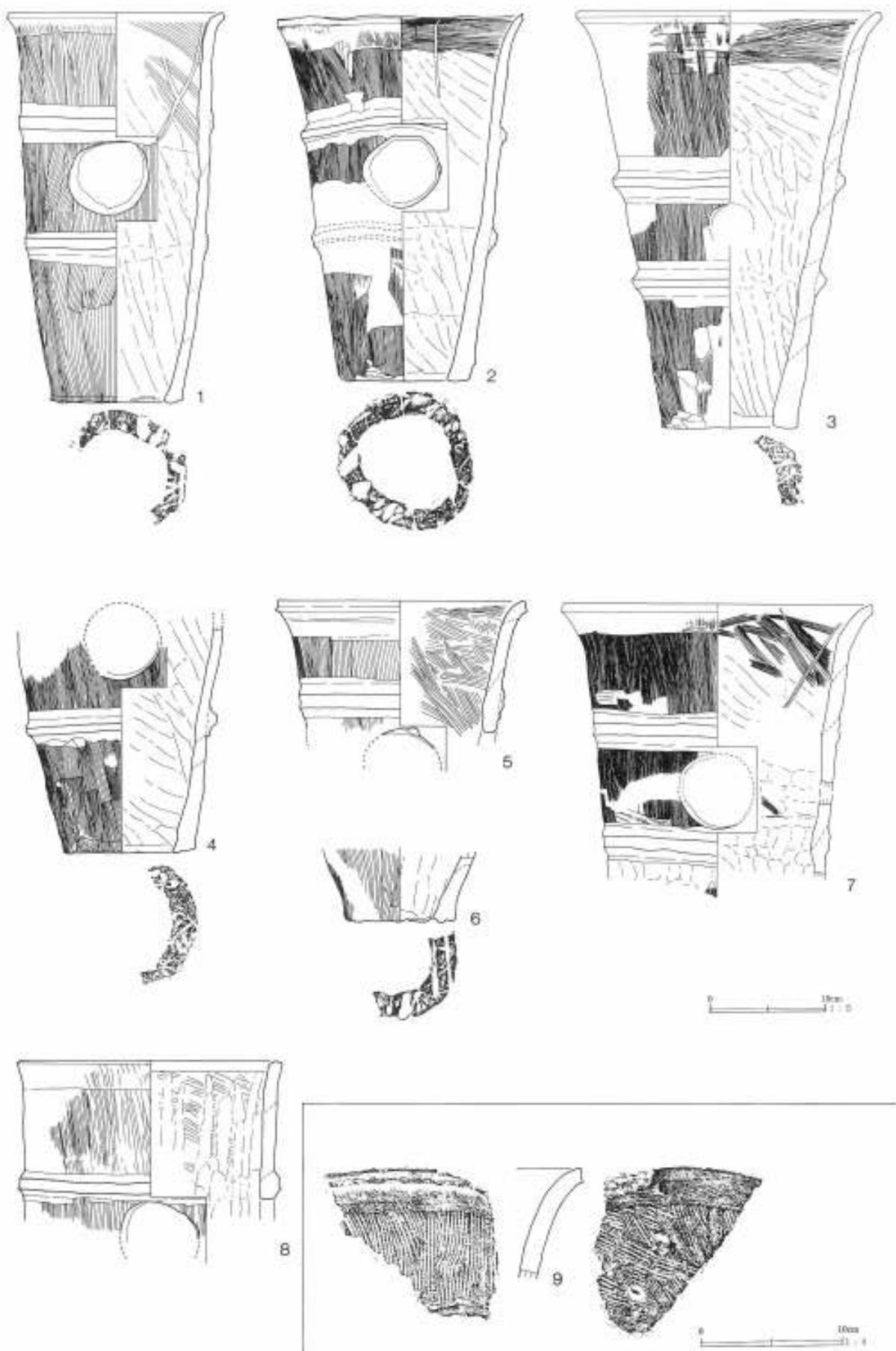
拡大範囲



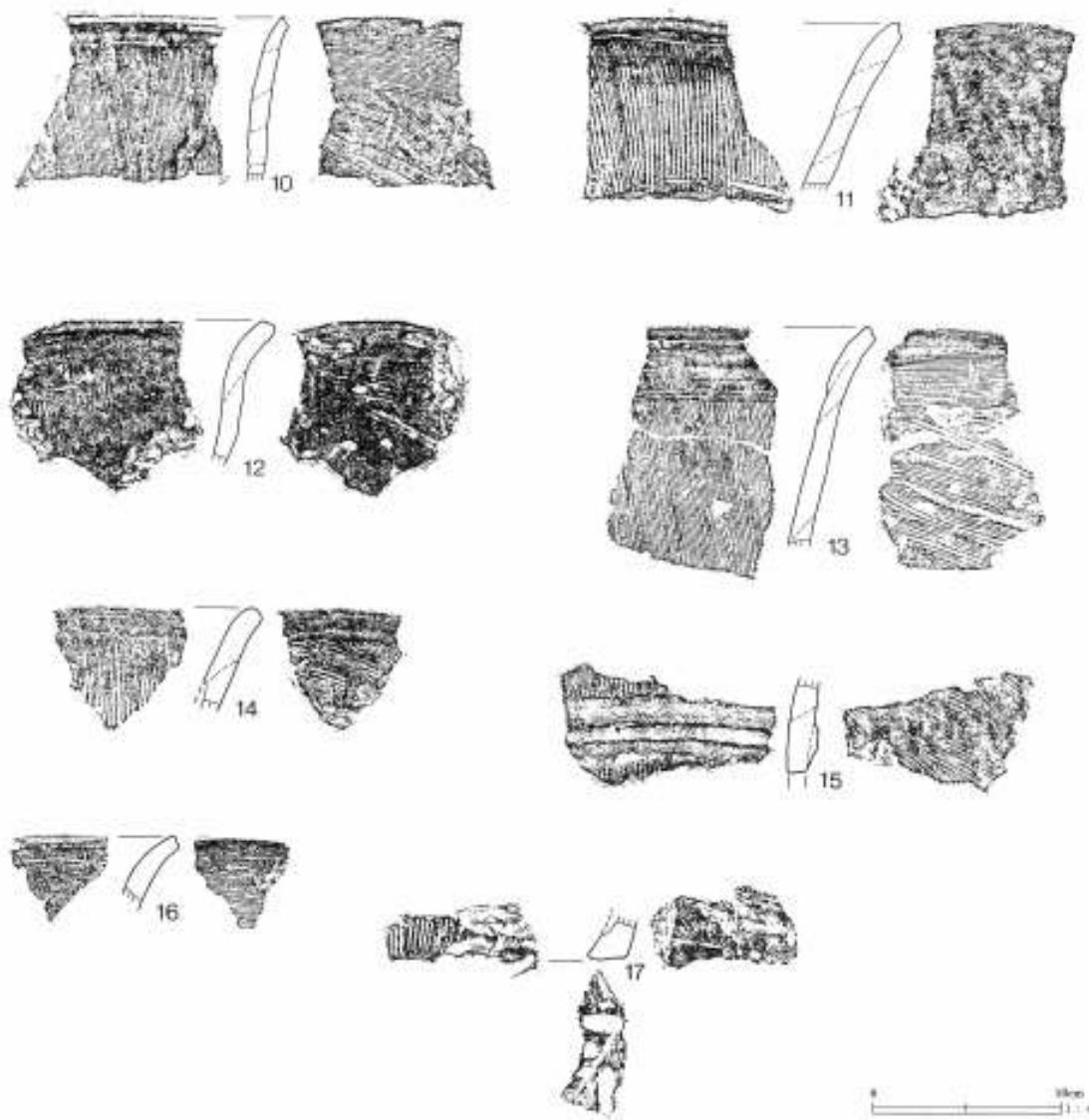
第43図 第1号埴円筒埴輪出土状況

第7表 第1号埴出土円筒埴輪観察表（第44・45図）

番号	胎土	色調	焼成	残存率	外面調整 本/2cm	内面調整 本/2cm	備考
1	白色粒子、赤褐色粒子、長石粒、砂粒、細礫、黒雲母含む。	橙色7.5YR-6/6	良好	50%	縦ハケ 突帯部：ヨコナデ 口縁部：縦ハケ→ヨコナデ 口縁端部：内外面ヨコナデ	8 右傾斜ハケ 口縁部付近・第2突帯部付近 右傾斜ハケ 以下：縦・右傾斜指ナデ	8
2	白色粒子、赤褐色粒子、長石粒、砂粒含む。	外面：明赤褐色 10YR-7/6、明褐色 5YR-5/6 内面：橙色5YR-7/6	良好	80%	縦ハケ 突帯部：ヨコナデ 口縁部：縦ハケ→ヨコナデ 口縁端部：ヨコナデ	17 横ハケ 口縁部付近：横ハケ 以下：右傾斜指ナデ	17



第44図 第1号墳出土円筒埴輪 (1)



第45図 第1号墳出土円筒埴輪(2)

番号	胎土	色調	集成	残存率	外面調整 本/2cm	内面調整 本/2cm	備考
3	白色粒子、赤褐色粒子、長石、黒雲母、砂粒含む。	明赤褐色2.5YR -5/6	普通	口縁の20%及び基部から第2突帯までの40%	縦ハケ 突帯部:ヨコナデ	16 横ハケ 口縁部付近:横ハケ 以下:縦・右傾斜指ナデ	
4	白色粒子、赤褐色粒子、長石含む。	橙色7.5YR-6/6	普通	第2突帯 基下付近以下破片50%	縦ハケ 突帯部:ヨコナデ	14 右傾斜指ナデ (基部付近は横に近い傾斜)	
5	白色粒子、長石、黒色粒子、砂粒多量(Φ5~12mm大)含む。	墳赤褐色5YR -5/6	良好	口縁の15~20%	縦ハケ 口縁部:縦ハケ→ヨコナデ 突帯部:ヨコナデ 口縁端部:ヨコナデ	8 横・右傾斜ハケ 口縁部:ヨコナデ	No.6と同一
6	白色粒子、砂粒多量、長石、礫(Φ7mm大)含む。	赤褐色5YR-4/8	良好	基部の45%	縦ハケ 基部付近は左傾斜ハケもあり	7 傾方向の指ナデ	No.5と同一

番号	胎土	色調	焼成	残存率	外面調整 本/2cm	内面調整 本/2cm	備考
7	白色粒子、黒色粒子、石英、砂粒多量、細繩含む。	にぶい赤褐色 2.5YR-4/4	良好	口縁の30%	縦ハケ 突帯部：ヨコナデ 口縁部：縦ハケ→ヨコナデ 口縁端部：内外面ヨコナデ	35 右傾斜ハケ 以下：右傾斜指ナデ、指頭圧痕 残る	34 もろい
8	白色粒子、赤褐色粒子、砂粒含む。	外面：明赤褐色 5YR-5/6 内面：赤褐色 2.5YR-4/6	良好	口縁の40%	縦ハケ 口縁部：縦ハケ→ヨコナデ 突帯部：ヨコナデ 口縁端部：内外面ヨコナデ	8 右傾斜ハケ +縦方向指ナデ消し	8
9	白色粒子、赤褐色粒子、長石、砂粒多量含む。	赤褐色2.5YR-4/8	良好	口縁の10%	縦・右傾斜ハケ 口縁部：右傾斜ハケ→ヨコナデ 口縁端部：内外面ヨコナデ	8 右傾斜ハケ(角度2種類) 口縁部：右傾斜ハケ→ヨコナデ	8
10	白色粒子、赤褐色粒子、長石、砂粒多量含む。	外面：赤褐色 2.5YR-4/8 内面：褐色7.5 YR-6/6	良好	口縁の10%	縦ハケ 口縁部：縦ハケ→ヨコナデ 口縁端部：内外面ヨコナデ	15 横・右傾斜ハケ +一部ナデ	15
11	白色粒子、長石、砂粒多量、黒雲母若干含む。	明褐色5YR-4/8	良好	口縁の10%以下	縦ハケ 口縁部：縦ハケ→ヨコナデ 口縁端部：内外面ヨコナデ	7 縦方向の指ナデ(指一本分の痕跡残る)	
12	白色粒子、黒色粒子、赤褐色粒子、金雲母多量、片岩、砂粒含む。	褐色5YR-6/6	不良	口縁の10%以下	縦ハケ 口縁部：縦ハケ→ヨコナデ 口縁端部：内外面ヨコナデ	7 横ハケ +ナデ	？ 摩滅著しく 調整不明瞭
13	白色粒子、赤褐色粒子、細繩、砂粒多量含む。	明赤褐色5YR-5/8	良好	口縁の10%以下	縦ハケ 口縁部：縦ハケ→ヨコナデ	13 右傾斜ハケ 口縁部：右傾斜ハケ→横ハケ 口縁端部：ヨコナデ	11
14	砂粒多量、繩(Φ12mm大)含む。	褐色5YR-6/6	普通	口縁部破片	縦ハケ 口縁部：縦ハケ→ヨコナデ 口縁端部：ヨコナデ	10 右傾斜ハケ→縦方向の指ナデ 口縁部：ヨコナデ	
15	白色粒子、赤褐色粒子、砂粒多量、細繩、長石含む。	明赤褐色5YR-5/8	良好	突帯部 破片	縦ハケ 突帯部：ヨコナデ	8 右傾斜ハケ 一部指ナデ	8
16	白色粒子、黒色粒子、黒雲母、砂粒含む。	明赤褐色2.5YR-5/6	良好	口縁部破片	縦ハケ 口縁部：縦ハケ→ヨコナデ 口縁端部：ヨコナデ	16 横ハケ 口縁部：ヨコナデ	15
17	砂粒多量、長石含む。	赤褐色5YR-4/6	良好	基部破片	縦ハケ	7 ナデ	

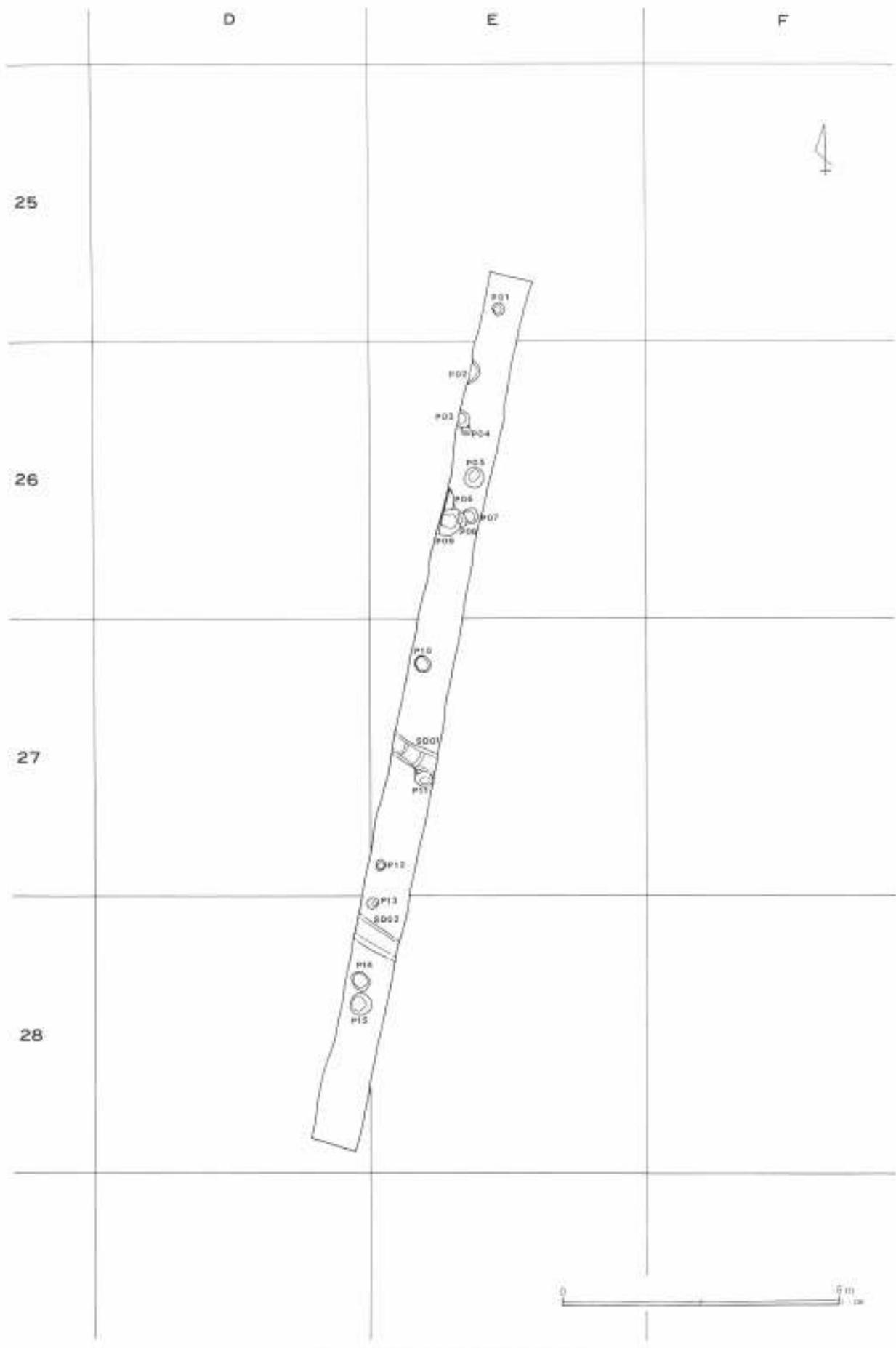
## 8 別府氏館跡第8区の調査

第7区の南に位置し、全長約15.9mの調査区である。標高29.50～29.60mであった。地表から遺構確認面までの厚さは表土を含めて約2.00mを測り、主に灰色、緑灰色、オリーブ灰色土が堆積していた。遺構確認面の直上は厚さ0.10～0.15mの黒色土の縄文土器包含層が堆積していたが、縄文土器出土量は少なかった。

遺構はピット15基、溝跡2条であった。

### (1) ピット

ピットは、総数にして15基検出した。ピットは主に調査区の北部と南部に集中して検出した。平面プランは円形ないし椭円形を呈し、深さは0.15m前後が主体であった。遺物を出土したピットは少な



第46図 別府氏館跡第8区遺構図

く、3基だけであった。時期は縄文時代前期、中期と思われる。詳細は一覧表にして記載する。(第47~49図、第8表)



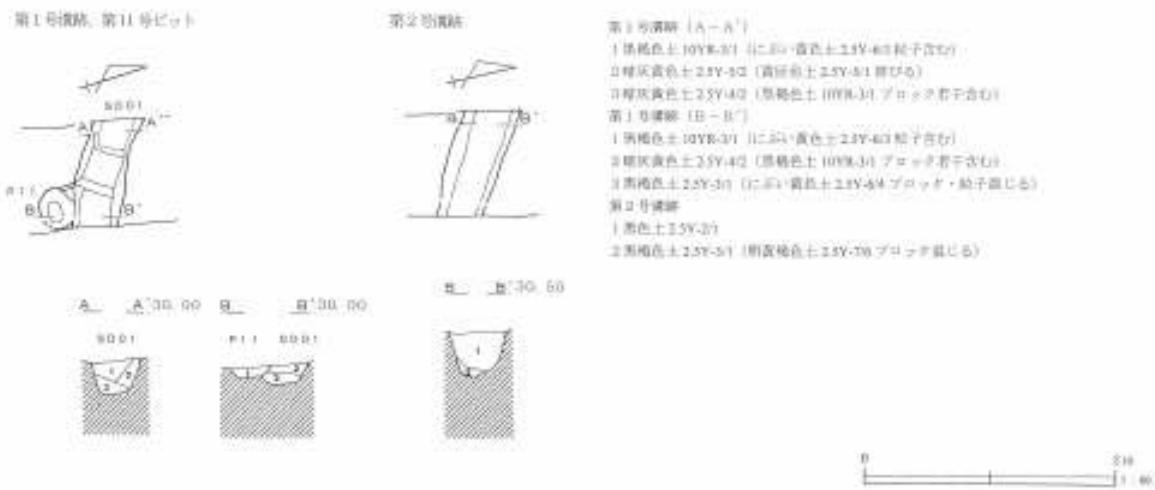
第47図 第8区第1~10・12~15号ピット



第6号ピット出土土器 (第48図1)

胎土に纖維を含む前期の土器と思われる。藤状縄文施文。

第48図 第8区第6号ピット  
出土遺物



第49図 第8区第1・2号溝跡、第11号ピット

第8表 第8区ピット一覧表 (表中、括弧付数值は推定値)

番号	位 置	プラン	長軸×短軸×深さ(cm)	出土遺物	時期	重複関係
1	E-25	円形	2.2×2.1×1.1	なし		
2	E-26	楕円形	4.0× ×7	なし		
3	E-26	楕円形	3.0× ×1.2	なし		
4	E-26	円形	1.6×1.4×9	なし		
5	E-26	円形	3.6×3.5×1.2	なし		
6	E-26	楕円形?	× ×1.3	縄文土器	前期	
7	E-26	楕円形	2.8×2.4×1.2	なし		
8	E-26	楕円形?	2.6×1.3×1.7	なし		
9	E-26	円形	4.8× ×2.3	なし		
10	E-27	楕円形	3.2×2.8×1.5	なし		
11	E-27	楕円形?	(3.3)×2.7×8	なし		
12	E-27	円形	2.0×1.8×1.4	なし		
13	D-E-28	円形	2.2×2.1×1.2	なし		
14	D-28	楕円形	3.7×3.0×8	縄文土器	中期	
15	D-28	円形	4.0×3.8×1.5	縄文土器	中・後期	

## (2) 溝跡

溝跡は、2条検出した。調査区の南半部に並行して検出した。

### 第1号溝跡（第49図）

E-27グリッドから検出した。遺構は第11号ピットと重複関係にあり、第11号ピットが第1号溝跡を壊していた。また、遺構の両側は調査区域外のため検出できなかった。

溝はやや南に傾き東西に走っていた。規模は検出長0.70m、幅0.42mであった。底面が3段に落ち込んでいた。

出土遺物は縄文土器を検出したが、図示可能な遺物ではなかった。

### 第2号溝跡（第49図）

D-E-28グリッドから検出した。遺構の両側は調査区域外のため検出できなかった。

溝はやや南に傾き東西に走っていた。規模は検出長0.66m、幅0.42mであった。

出土遺物は検出されなかった。

## 9 遺構外出土遺物

重機による表土除去の際に出土した遺物および遺構外グリッド遺物を掲載する。（第50～53図）

第1区～第7区から出土した縄文土器、弥生土器、石器、円筒埴輪、須恵器を掲載する。土器は、縄文時代前期、中期前半、中期後半、後期初頭、後期中葉、弥生時代中期及び底部に分類する。

### (1) 土器

#### 第1群（第50図1～3）

縄文時代前期の土器を一括する。いずれも織維を多く含む。関山式期の土器と思われる。1は多条縄文LR施文、2は蕨状縄文、横位にコンパス文、半截竹管文施文。3は刻み目が施される口縁部破片と思われる。

#### 第2群（第50図4）

縄文時代中期前半の土器を一括する。勝坂式期の土器と思われる。隆帯が楕円区画文を描くと思われ、その隆帶上に連続爪形文が施文される。

#### 第3群（第50図5～23）

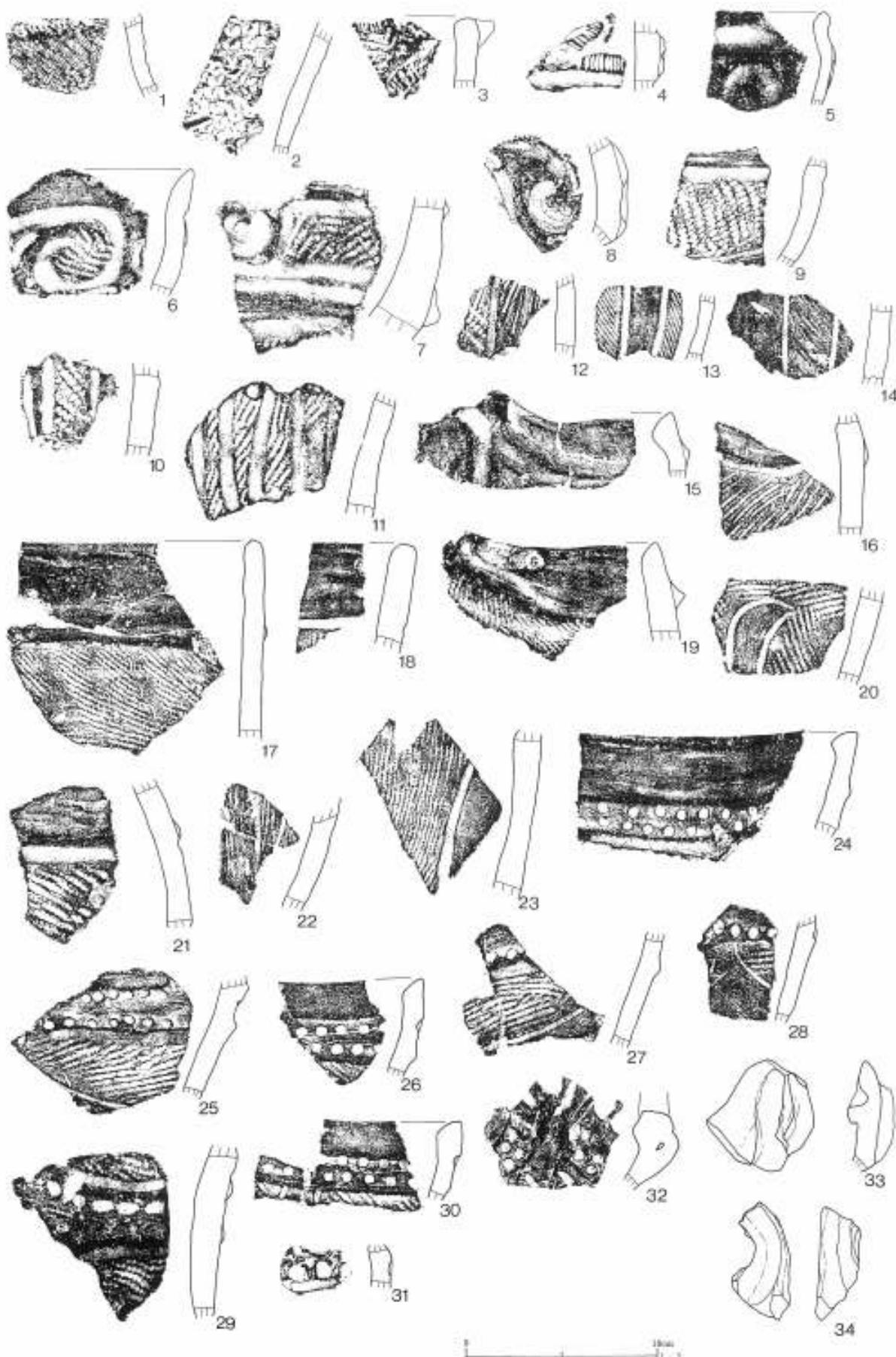
縄文時代中期後半の土器を一括する。加曾利E式期の土器と思われる。

5～9は口縁部文様帶をもつキャリバー形土器である。5・6・8は口縁部に渦巻文が隆帶で表現され、5・6は単節RL縄文を施文する。7は渦巻文を連続モチーフで描き、余白が区画文となる。9はその区画文部分破片であるが、沈線文で描かれている。7・9とも単節RL縄文施文する。

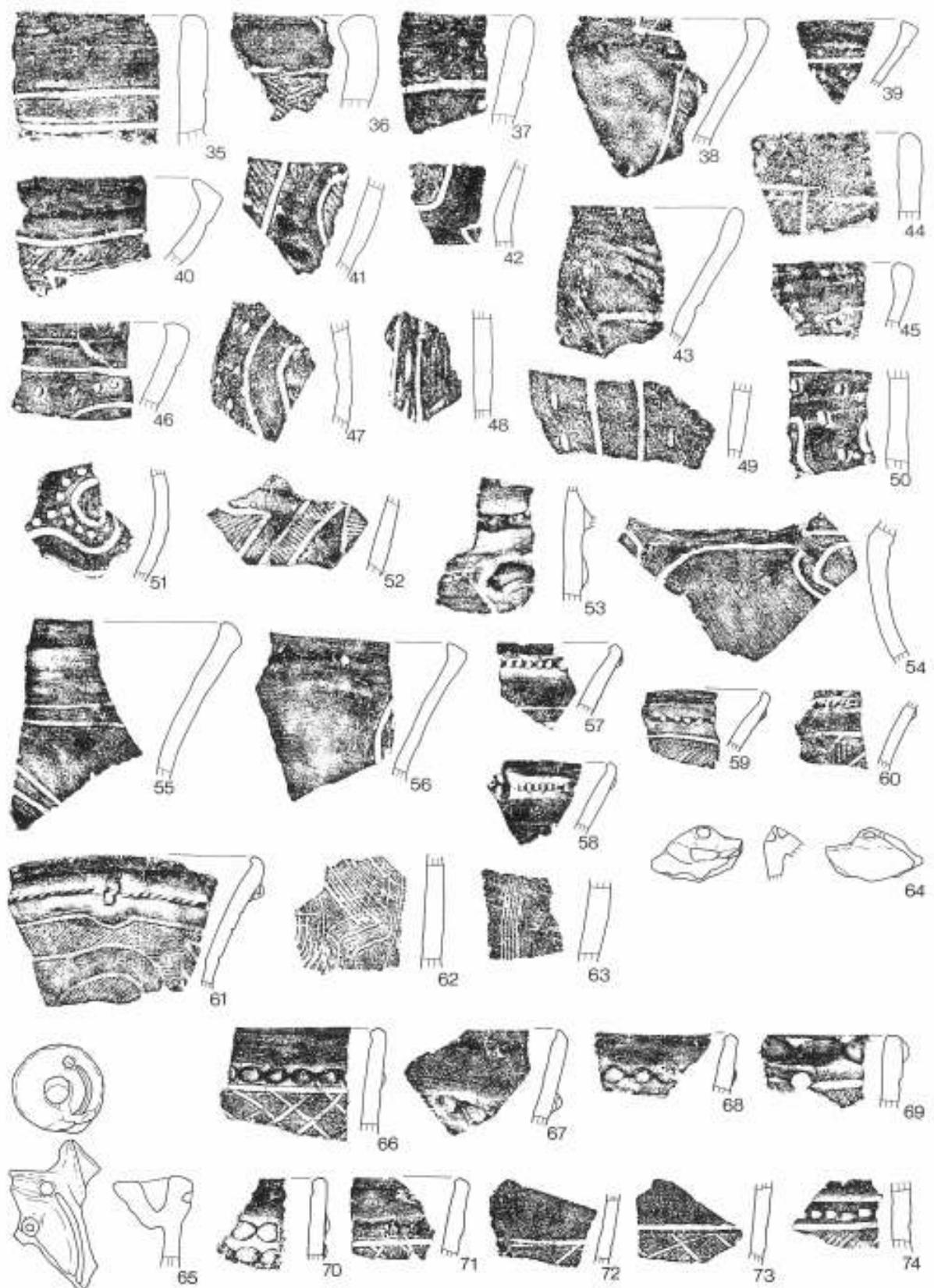
10～14・23は磨消懸垂文が垂下する胴部破片である。10・12～14・23は単節LR縄文施文。11は単節LR縄文施文し、沈線文が垂下する。

15・19は波状縁の土器である。口縁部無文帶を弧状隆帶で区画する。19は隆帶下に単節LR縄文施文。

16・17・21は口縁部無文帶が隆起線で区画され、単節LR縄文施文する。

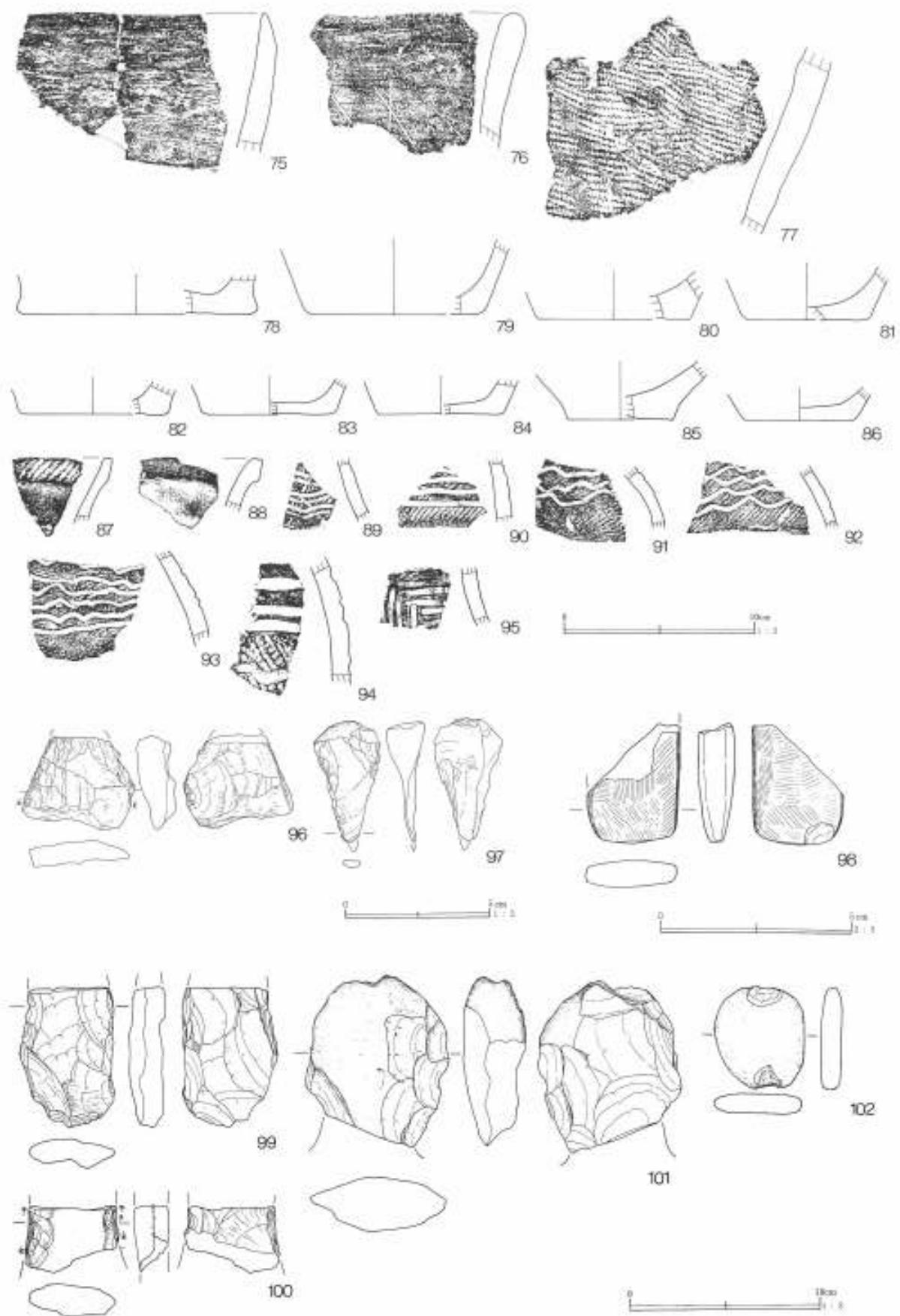


第50図 遺構外出土遺物 (1)



第51図 遺構外出土遺物 (2)

1mm



第52図 遺構外出土遺物 (3)



第53図 遺構外出土遺物(4)

18は口縁部無文帯が沈線で区画され、条線文が施される。

20はU字状文が沈線により描き出され区画内は磨消されている。地文は単節L R縄文施文。

22は条線文を施文するものである。

#### 第4群 (第50図24~34、第51図35~65)

縄文時代後期初頭及び初葉の土器を一括する。称名寺式期及び堀之内式期の土器である。特徴から10分類される。

##### 第1類 (第50図24~32)

隆起線と沈線文で描かれる土器群である。24~32は波状口縁の深鉢形土器である。口縁部に2条の隆起線を巡らしその内面に2列の刺突文を施す。25~28・30~32は口縁部文様帶下に弧状の沈線文区画を描く部分が残る破片である。すべて単節L R縄文を施文する。32は波頂部のC字状文が対向する形状の捻軸状突起が残る破片である。29は2条の隆起線による区画帶に上方の隆起線に沿って1列の刺突文を施し、この文様帶を挟んで単節L R縄文を施文する。

##### 第2類 (第50図33・34)

称名寺式期の突起を一括する。33は対向するC字状文を波状縁の波頂正面に施す。内面には盲孔がある。34は捻軸状突起の一部と思われる。

##### 第3類 (第51図36・38~41)

沈線間に縄文が充填される称名寺式期の土器群である。

38~40は口縁端部が内屈する口縁部破片である。38は口縁部上面に盲孔を起点とした沈線文施す。41は無節L縄文を充填する。

##### 第4類 (第51図35・37・43~45)

沈線のみで文様が描き出される土器群である。35・37は口縁に並行する沈線文施文。44はJ字状文がモチーフか?

##### 第5類 (第51図42・46~51)

沈線間に列点を施す土器群である。いずれも刺突文による列点で、48は長めの列点である。

##### 第6類 (第51図53)

隆帶によって文様を構成する土器である。

##### 第7類 (第51図54~56)

器面を丁寧に研磨し沈線のみで文様を描く土器群である。54はJ字状文を描く。

#### 第8類（第51図57～61）

堀之内2式土器を一括する。52は横帯区画を配し三角形文を描き、単節RL縄文を充填する。57～61は口縁部に刺突を施す隆帯が巡る深鉢形土器の口縁部である。器形は底部から外反気味に開くものと思われる。58・61は8の字状貼付文が付く。隆帯下には平行沈線による文様帯を配し沈線文間に縄文を充填すると思われる。60は三角形文を配し細かい単節LR縄文を充填する。また、61は渦巻状の文様を施し細かい単節RL縄文を充填する。

#### 第9類（第51図62・63）

条線文を施文する土器群である。62は曲線及び蛇行する条線文である。

#### 第10類（第51図64・65）

突起を一括する。堀之内式期のものと思われる。64は上面の内外に盲孔があり、正面に橋状の把手脱落痕がある。65はねじれた筒状突起である。上面の中央に盲孔、周囲に盲孔を起点とするC字状文が施される。正面にも盲孔を起点とするC字状文が施され、注口状の円形貼付文が付く。

#### 第5群（第51図66～74）

縄文時代後期中葉の土器を一括する。

66～70は紐線文の土器である。66は紐線文下に格子目文を施文する。69は内外に貫通する孔があげられる。70は2条の紐線文が施される。

71～73は無文帯を沈線で区画し、格子目文を施文する。

74は平行する沈線文間に列点の竹管による刺突文を施す。それ以下は縄文施文。

#### 第6群（第52図75～77）

その他無文の土器、縄文のみの土器等を一括する。76は格子目文が施される。77は単節LR縄文施文。

#### 第7群（第52図78～86）

底部を一括する。

#### 第8群（第52図87～95）

弥生時代中期の土器を一括する。

87・88は口縁部破片である。87は口縁端面に単節LR縄文施文。88は無文である。

89～95は胴部破片である。89～93は地文に縄文施文し、横走の波状文が数条施される。91～93は同一個体である。90が単節LR、91～93が単節RLである。94は横走沈線文下に単節RL縄文施文区画がありその中に波状沈線文を施文する。95はコの字重ね文施文、地文に単節RL縄文施文。

## （2）石器

#### 搔器（第52図96）

撥形のもので、石材は黒色頁岩と思われる。

#### 石鏟（第52図97）

つまみをもち先端部を細身に尖らせたものである。先端部が欠損する。チャート製。

#### 打製石斧（第52図99～100）

99は短冊形で基部を欠損する。ホルンフェルス製。100は撥形と考えられ、基部と刃部を欠損する。

ガラス質黒色安山岩製か？。101は分銅形と考えられる。両面に自然面が残るため基部・刃部が欠損したと思われる。ホルンフェルス製。

#### 石錐（第52図102）

両端を打ち欠いて切り込みを施した完形の礫石錐である。砂岩製。

#### 玉斧（第52図98）

丁寧に研磨されたミニチュアの磨製石斧である。定角形で刃部は丸い。緑色凝灰岩製か？。

### （3）円筒埴輪

103はスカシ孔部分の破片である。外面調整は縦ハケ16本／2cm、突帯部はヨコナデ。内面調整は右傾斜及び縦ハケ18本／2cm、縦方向の指ナデ。胎土は白色粒子、黒色粒子、赤褐色粒子、砂粒多量に含む。色調は明赤褐色2.5Y-5/6。焼成は良好。

104は口縁部破片である。外面調整は縦ハケ15本／2cm、口縁部は縦ハケの後ヨコナデ、口縁内外面ヨコナデ。内面調整は縦ハケ16本／2cm。胎土は白色粒子、赤褐色粒子、砂粒を含む。色調はにぶい赤褐色2.5Y-4/4。焼成は良好。

105はスカシ孔の部分破片である。外面調整は縦ハケ14本／2cm、突帯部はヨコナデ。内面調整は指ナデ。胎土は白色粒子、黒色粒子、赤褐色粒子、砂粒、細礫を含む。色調は外面が褐灰色10YR-4/1・明黄褐色10YR-7/6、内面が橙色5YR-6/8。焼成は良好。

106は底部破片である。外面調整は縦ハケ10本／2cm、基部端はヨコナデ。内面調整は右傾斜指ナデ。胎土は白色粒子、黒色粒子、赤褐色粒子、砂粒を含む。色調は外面が黄灰色2.5Y-4/1、内面がにぶい黄橙色10YR-6/3。焼成は良好。

### （4）須恵器

107は須恵器の底部破片である。内外面回転ナデ調整。高台脱落痕らしき痕跡あり。底部は回転糸切りか？。体部は底部から大きく開いて立ち上がる。胎土は白色粒子、赤褐色粒子、雲母、長石を含む。色調は灰色N-6/。焼成は良好。底部の40%残存。

第9表 石器一覧表

団版番号	出土位置	器種	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石質
13-10	1区P109	打製石斧	8.9×6.2×2.0	125	ホルンフェルス
25-167	1区SX01	石錐	3.4×1.3×0.5	4	チャート
25-168	1区SX01	石錐	3.3×2.1×0.9	6	チャート
25-169	1区SX01	擦器	3.5×4.2×0.9	15	チャート
25-170	1区SX01	擦器	3.4×2.6×1.0	5	黒曜石
25-171	1区SX01	擦器	4.2×4.7×0.7	15	黑色安山岩?
25-172	1区SX01	擦器	3.1×2.9×0.4	5	黑色頁岩?
25-173	1区SX01	擦器	4.5×2.2×0.7	5	ガラス質黑色安山岩
25-174	1区SX01	打製石斧	8.9×9.4×3.7	245	砂岩?
25-175	1区SX01	打製石斧	6.7×6.9×2.6	120	ホルンフェルス
25-176	1区SX01	敲石	12.0×6.7×4.0	360	砂岩
25-177	1区SX01	磨石	12.7×8.0×2.5	457	花崗岩
25-178	1区SX01	磨石(鐵石)	10.2×7.2×3.1	345	砂岩
25-179	1区SX01	磨石	8.9×7.8×4.1	400	花崗岩
28-4	2区SK02	擦器	3.3×2.1×1.1	10	チャート
30-8	2区谷	磨石	5.9×4.5×1.8	83	綠色凝灰岩?
52-96	1区	擦器	3.3×3.9×1.3	15	黑色頁岩?
52-97	1区	石錐	4.3×2.3×1.3	10	チャート
52-98	1区	玉斧	2.9×2.4×1.0	10	綠色凝灰岩?
52-99	1区	打製石斧	7.8×5.1×1.9	85	ホルンフェルス
52-100	1区	打製石斧	3.4×4.9×1.8	35	ガラス質黑色安山岩?
52-101	7区SS01	打製石斧	8.9×7.6×3.3	220	ホルンフェルス
52-102	1区	石錐	5.3×4.7×1.1	36	砂岩

## V 調査のまとめ

### (1) 寺東遺跡について

寺東遺跡では、縄文時代前期から後期、弥生時代中期、古墳時代後期、平安時代の遺構、遺物が検出された。遺跡の主体となる時期は、縄文時代後期初頭を中心として縄文時代中期から後期の時期となる。

今回の調査は第2回目となり、昭和58年1月から2月にかけて送電鉄塔建設に伴う発掘調査を実施している。この調査では、縄文時代中期から後期にかけての遺構・遺物が確認されている。敷石住居跡1軒、埋甕4基、土坑1基などが検出された。敷石住居跡は約1/3の部分的な調査だが、柄鏡形を呈すると考えられる。長楕円形を呈する土坑内からは完形に近い深鉢形土器が出土している。また、敷石住居跡・埋甕からは縄文土器の他、打製石斧・磨製石斧・石皿・磨石・圓石が出土している。これらの縄文時代の集落跡は現地表面から約2~3mの深さで確認されている。

また、時期は不詳だが溝跡が6条が検出され、土師器・須恵器が出土している。この溝跡は水田を区画するものと考えられ、現地表面から深さ1mの面で確認されている。

今回の調査では、縄文時代の遺構は住居跡と推定されるピット群、土坑、土器廃棄遺構などである。住居跡はやはり前回の調査と同様部分的な調査のため、全体像がつかめなかった。時期はやはり中期から後期であったし、住居跡の所在する西側に検出された土器廃棄遺構から出土した土器も前期の土器が若干含まれるが主体は同様の時期であった。土坑は総数にして12基検出されたが、遺物を出土しない4基を除いてこちらは後期（後期初頭及び初葉）だけであった。出土遺物は、深鉢形土器・浅鉢形土器などの縄文土器、石鎌・搔器・打製石斧・磨石・敲石の石器が出土した。住居跡から出土した土器は非常に少なく実態に迫るのに足りうるものではなかったが、土器廃棄遺構及び土坑から出土した土器は、比較的良好な状態で検出され、復元できた個体も多かった。石器の中には、玉斧と推測される丁寧に表面が研磨された磨製石斧が第1区の包含層から出土した。これは実用品ではなく特殊な利用法があったと考えられており、中期の東日本地域に点在するように分布するといわれている。本遺跡から出土した意味合いは何であろうか。本遺跡の集落を営んでいた人々によって特殊な利用法すなわち呪術的な使われ方がなされていたのであろうか。

一方、地形的な観点から本遺跡を見てみると、今回の調査により検出された集落跡は、現地表面から約1.8~2.0mの深さであった。前回の調査区は今回の調査区の南東約100m離れた所に位置するが、前述のとおり深さ約2~3mであった。よって本遺跡の位置する地形は東に傾きがあるよう読みとれる。そして、第2区においては北に向かって傾斜があり地形が落ちていく。また、第2区で北端に谷が、第3区で南端に谷が確認されている。これらから地形の復元をしてみると、東に向かって突き出した岬状の高台が北、南そして東の低地に囲まれていたと推定される。これは本遺跡の西及び南に広がる櫛挽台地の地形的位置と合致し、その先端部の突き出した所に本遺跡が所在するということである。

これらから、本遺跡の縄文時代の集落を概観してみると、目の前に低地を望む高台に沿って中期から後期の人々の集落が営まれていたことになる。目の前の低地は、水の恵みをおそらく与えていたであろうし、住空間としては非常に良いところであったと推測される。また、前期の土器片もわずかながら見られることから、当地区ないしはあまり離れないところに前期の人々の生活拠点、集落も存在していた

ことが想像できる。

弥生時代では、中期の土器片がわずか出土している。弥生時代中期に至っても当地区で人々が活動していたということが窺える資料である。低地ではあるがおよそ 1.1 km 離れた位置に中期（須和田式期）の再葬墓群が確認された横間栗遺跡が所在し、横間栗遺跡に近接する閑下遺跡でも同時期の住居跡が確認されている。

この後に人々の活動の跡が辿るのは、古墳時代の埴輪片が散見されるものの、平安時代になってからである。しかし、当時期も 9 世紀末から 10 世紀の溝跡が検出されているだけで明確な生活活動を捉えるには心許ない状態である。

## (2) 別府氏館跡について

別府氏館跡では、縄文時代前期から後期、古墳時代後期の遺構、遺物が検出された。

別府氏館跡は、東西 200 m、南北 150 m 四方の別府氏一族の居館跡と考えられている。中席という地名や別府小太郎忠澄（清重）が父義重の追福のため開基したと伝えられる香林寺を中心に所在する。西隣は、別府氏の祖である別府二郎行隆から 12 代までの別府氏の居館であったと伝えられる別府城跡が所在する。今回の調査区は館跡の東縁にあるが、残念ながらこの別府氏館跡の時期にあたる平安時代末期の遺構・遺物は確認されなかった。

縄文時代の遺構はピット、溝跡である。大半のピットからは出土遺物が検出されず、遺構確認面上の遺物包含層から縄文土器が出土した。主に中期から後期初頭の遺物が検出され、前期の土器もピット出土遺物と合わせてわずかながら見られた。寺東遺跡と同様に近隣における前期の人々の活動が予感される。

古墳時代後期では、包含層からの円筒埴輪片の出土がみられる。また、驚いたことに偶然にも現地表面下約 2 m の深さに古墳が確認された。ごく一部分の調査ではあったが、周溝内から円筒埴輪が比較的多く出土し、復元できる個体もあった。本遺跡の主に南、西には古墳が点在することで知られる。これらは別府古墳群と称され、総数にして 17 基で前方後円墳 1 基と円墳 16 基で構成される。本遺跡の第 1 号墳は 18 基目になる。現在はほとんどが消滅または墳丘が削平を受けた状態で、墳丘の規模が分かるものはわずかに 5 基だけである。それも半壊や墳丘削平の状態である。出土遺物が確認されたものも少なく 8 基である。円筒埴輪、形象埴輪、土師器・須恵器であるが、円筒埴輪・形象埴輪出土の古墳はすべて本遺跡所在の古墳の南に分布する。中には、埼玉県立さきたま資料館所蔵の農夫の埴輪を出土したヤス塚古墳や、馬形の形象埴輪を出土した前方後円墳のカンニチ山古墳が存在する。また、この古墳群中唯一調査された仲席古墳が、最も近距離の南にわずか 170m に所在する。この古墳からは円筒埴輪列が地表面下 60 cm の地点から確認された。

古墳の分布状況を見てみると、1 基だけ離れて低地の自然堤防上に所在するが、ほとんどが櫛挽台地上に所在する。その分布も、本遺跡第 1 号墳を含めて計 9 基が台地の縁辺部の低地を望む地区に所在し、計 7 基が台地の中程に所在する（残る 1 基は台地縁辺部所在古墳群近くの低地、自然堤防上に所在）という特徴を示す。さらに、前述したが、埴輪を出土する古墳が前方後円墳を含める台地縁辺部分布古墳に限られ、台地中程の所在古墳では確認されていないという特徴を示す。これは、埴輪の消滅と呼応して古墳築造箇所を変え、台地の中程に選んだとも考えられるのではないだろうか。確認されている古墳の詳細なデータ（出土遺物、時期等）が乏しいという現状でここまでいえるかどうかという問題は残る

が、いずれにしても、今回の調査のように地下に埋没した古墳が発見され、さらに検証資料が増えていくと、この問題にも深く迫ることができるのでないかと考える。

以上、各々の遺跡について過去のデータも交えてまとめてみた。これを本報告のまとめに加えたいと思う。

#### 引用・参考文献

- 『熊谷市史』前編 熊谷市 1963  
『新編 埼玉県史』資料編1 1980  
『新編 埼玉県史』資料編2 1982  
『新編 埼玉県史』資料編3 1984  
大里郡市文化財担当者会「大里地域の遺跡」『埼玉考古』第29号 埼玉考古学会 1992  
小久保徹他「三尻天王・三尻林(1)」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第23集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1983  
高山清司「三ヶ尻上古遺跡」『埼玉縣土器集成』4 埼玉考古学会 1976  
鈴木敏昭他「横間堀遺跡」熊谷市教育委員会 1999  
木戸春夫「根格・横間堀・開下」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第153集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1996  
中島 宏也「袖守・池上」埼玉県教育委員会 1984  
鈴木孝之「北島遺跡」IV 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第195集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1998  
吉田 駿徳「小畠田遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991  
浦瀬芳之他「上牧免遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第128集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993  
田中広明「新屋敷東・本郷前東」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第111集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1992  
岩瀬 譲「前・居立」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第151集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1995  
磯崎 一「新田裏・明戸東・岸邊跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第85集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1989  
大星道則「清水上遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第152集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994  
寺社下博他「中条条里遺跡調査報告書1」熊谷市教育委員会 1979  
寺社下博他「天神遺跡」熊谷市教育委員会 1988  
寺社下博「中条遺跡群III 檜原山古墳・常光院東遺跡」熊谷市教育委員会 1982  
浦瀬芳之「東川塙遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第94集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1990  
増田逸朗他「横塚山古墳」埼玉県遺跡調査会 1971  
山川守男「城北遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第150集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1995  
鶴持和夫「ウツギ内・砂田・柳町」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第126集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993  
寺社下博「天神下・土用ヶ谷戸遺跡」熊谷市教育委員会 1984  
寺社下博「三尻中学校遺跡」『埼玉県埋蔵文化財調査年報』昭和55年度 埼玉県教育委員会 1982  
金子正之「三尻遺跡群 黒沢館・樋ノ上遺跡」熊谷市教育委員会 1985  
小川良祐他「樋の上遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第59集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1986  
坂野和信他「樋の上／皇山」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第205集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1998  
金子正之「三尻遺跡群 上辻・下辻遺跡」熊谷市教育委員会 1982  
金子正之「三尻遺跡群 上辻・下辻遺跡」熊谷市教育委員会 1984  
中村貞司「下辻遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第69集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1987  
川口 潤「本郷前東遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第78集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1989  
利根川章彦他「新ヶ谷戸」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第9集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982  
権田宣行「天神前遺跡」熊谷市教育委員会 1992

- 寺社下博「熊谷市龍原裏遺跡の調査」[第 20 回遺跡発掘調査報告会発表要旨] 埼玉考古学会他 1987
- 『埼玉県古代寺院調査報告書』 埼玉県県史編さん室 1982
- 佐間孝志他「北武藏における古瓦の基礎的研究 1」[研究紀要] (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 吉野 健『西別府廃寺(第 2 次)』 熊谷市教育委員会 1994
- 大堀磐雄・小沢國平「新発見の祭祀遺跡」[史料と美術] 第 338 号 1963
- 富田和夫『在家遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 220 集 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1998
- 浅野晴樹「北島遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 81 集 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 中村聰司『北島遺跡』 II 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 88 集 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 大谷 勲『北島遺跡』 III 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 103 集 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991
- 『埼玉の館城跡』 埼玉県教育委員会 1968
- 『埼玉の中世城館跡』 埼玉県教育委員会 1988
- 金子正之『三尻遺跡群 若松遺跡、黒沢遺跡、東遺跡』 熊谷市教育委員会 1986
- 金子正之『三尻遺跡群 社裏遺跡、社裏北遺跡、社裏南遺跡』 熊谷市教育委員会 1986
- 吉野 健『西方遺跡』 熊谷市教育委員会 1989
- 『中世の熊谷の武士たち』 熊谷市立図書館 1998
- 今村啓爾「称名寺式土器の研究(上)」[考古學雑誌] 第 63 卷第 1 号 日本考古學会 1977
- 今村啓爾「称名寺式土器の研究(下)」[考古學雑誌] 第 63 卷第 2 号 日本考古學会 1977
- 鈴木篤雄「称名寺式の変化と文様帶の系統—「文様帶系統論」と文様連續説の再検討—」[土曜考古] 第 16 号 土曜考古学研究会 1991
- 山田仁和「出口遺跡 称名寺 I (古) 期Ⅲ頸土器について」[栃木県考古学会誌] 第 12 集 栃木県考古学会 1990
- 細田 瑞也『桶ノ下遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 135 集 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994
- 元井 茂也『石神遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 182 集 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1997
- 金子直行他『戸崎前遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 187 集 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1997
- 金子正之『寺東遺跡』[埼玉県埋蔵文化財調査年報 昭和 57 年度] 埼玉県教育委員会 1984
- 小沢國平「別府古墳群(仲郷古墳)」[埼玉県埋蔵文化財発掘調査要覧(昭和 40 ~ 昭和 45 年度)] 埼玉県埋蔵文化財調査報告書第 8 集 埼玉県教育委員会 1979

# 写 真 図 版



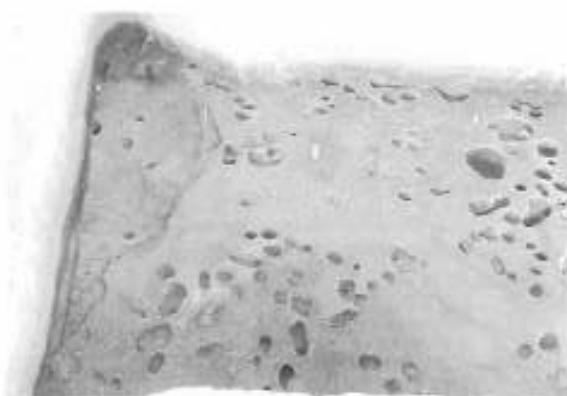
第1区第1面第1号溝跡



第1区第1面第2・3号溝跡



第1区第2面遺構(東から)



第1区第2面遺構(西半分)



第1区第2面遺構(東半分)

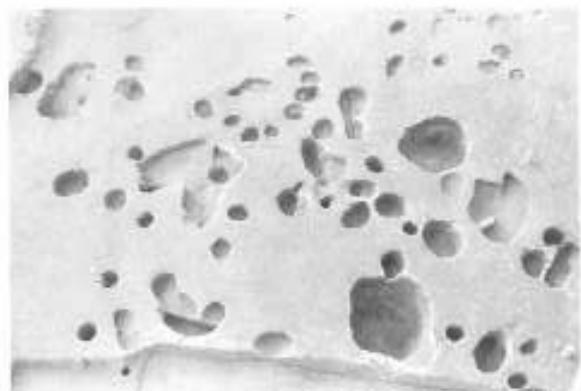


第1区第2面ピット群(1)



第1区第2面ピット群(2)

図版2



第1区第2面ピット群(3)



第1区第2面第109号ピット遺物出土状況



第1区第2面土器廃棄遺構



第1区第2面土器廃棄遺構遺物出土状況(1)



第1区第2面土器廃棄遺構遺物出土状況(2)



第1区第2面土器廃棄遺構遺物出土状況(3)



第1区第2面土器廢棄遺構遺物出土状況(4)



第1区第2面第1号土坑遺物出土状況



第1区第2面第2号土坑



第1区第2面第2号土坑遺物出土状況



第1区第2面第3号土坑



第1区第2面第3号土坑遺物出土状況



第1区第2面第4号土坑



第1区第2面第4号土坑遺物出土状況

図版4



第2区遺構(南半分)



第2区遺構(北半分)



第2区第2号土坑遺物出土状況



第2区第3号ピット遺物出土状況



第3区第1号土坑



第3区第1号土坑遺物出土状況(1)



第3区第1号土坑遺物出土状況(2)



第3区第2号土坑



第5区遺構



第6区遺構



第7区第1号墳



第8区遺構



第7区第1号墳周溝遺物出土状況



第8区第1号溝跡、第11号ピット

图版6



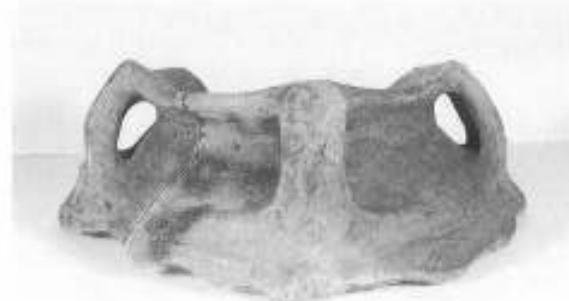
第1区第2号土坑1



第1区第3号土坑1



第1区第3号土坑2



第1区第3号土坑3



第1区第4号土坑1



第1区土器廃棄遺構2



第1区土器廃棄遺構3



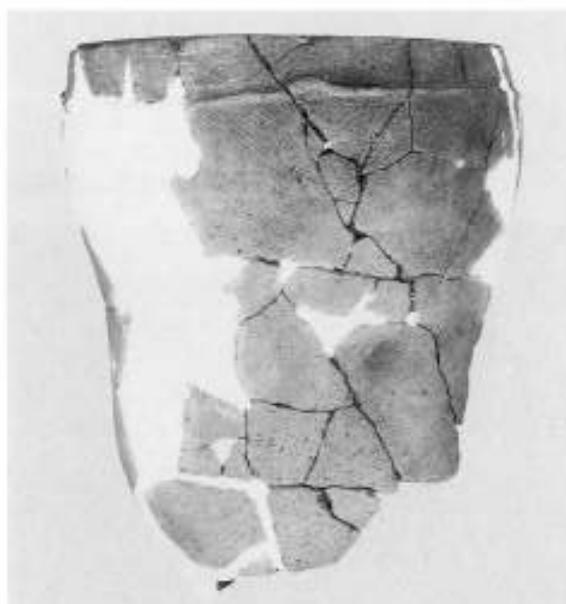
第1区土器廃棄遺構5



第1区土器廃棄遺構6



第1区土器廃棄遺構4



第1区土器廃棄遺構8

図版8



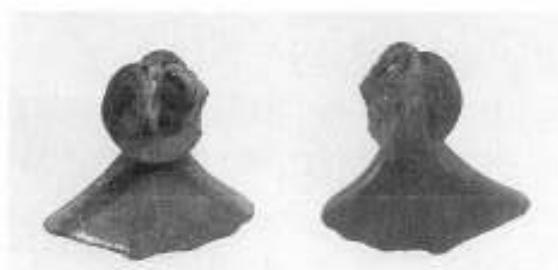
第1区土器廃棄遺構7



第3区第1号土坑1



第1区第1号土坑出土遺物



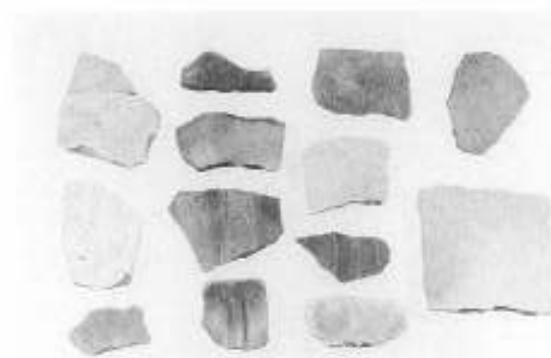
第1区第2号土坑3



第1区第3・4号土坑出土遺物  
(左下が第4号土坑)



第1区土器廃棄遺構出土土器(1)



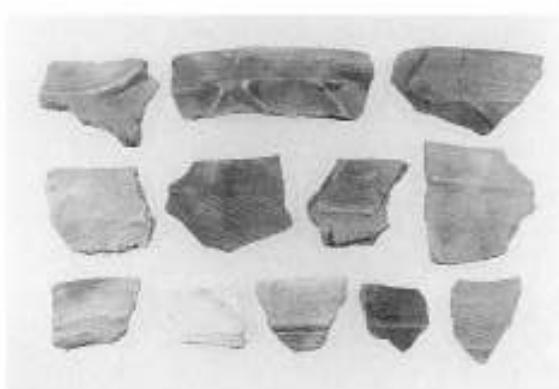
第1区土器廃棄遺構出土土器(2)



第1区土器廃棄遺構出土土器(3)



第1区土器廃棄遺構出土土器(4)



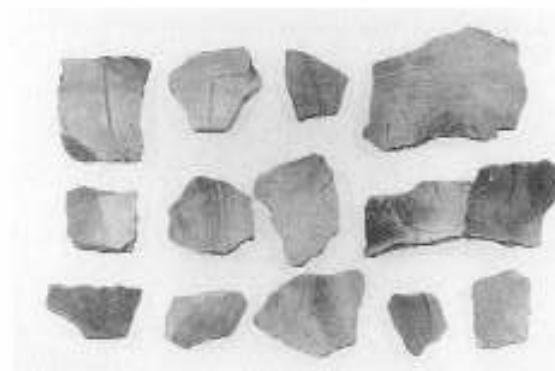
第1区土器廃棄遺構出土土器(5)



第1区土器廃棄遺構出土土器(6)



第1区土器廃棄遺構出土土器(7)



第1区土器廃棄遺構出土土器(8)



第1区土器廃棄遺構出土土器(9)

図版10



第1区土器廃棄遺構出土石器



第3区第1号土坑出土土器



第3区第2号土坑出土土器



遺構外出土土器(1)



遺構外出土土器(2)



第1区ピット、遺構外出土石器



第7区第1号墳1



第7区第1号墳2



第7区第4号墳4

## 報告書抄録

ふりがな	てらひがしいせき・べっぴしやかたあと								
書名	寺東遺跡・別府氏館跡								
副書名	平成11年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書								
編集者名	吉野 健								
編集機関	埼玉県熊谷市教育委員会								
所在地	〒360-8601 埼玉県熊谷市宮町二丁目47番地 1				TEL048-524-1111				
発行年月日	西暦2000(平成12)年3月31日								
所収遺跡名	所在地		コード		北緯 (°'")	東経 (°'")	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
	市町村	遺跡番号							
てらひがしいせき 寺東遺跡	埼玉県熊谷市大字東別府 字入生田9-9-4番地1他	11202	089	36°11'06" 139°21'01"	19981007 19981217	233	配電用変電所建設 ・配電用管路工事		
べっぴしやかたあと 別府氏館跡	埼玉県熊谷市大字東別府 字入生田9-8-8番地他	11202	041	36°11'03" 139°21'01"	19981007 19981217	78	配電用管路工事		
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
寺東遺跡	集落跡	縄文時代	前期	住居跡	2軒	縄文土器			
			中期	住居跡	6軒	石器			
			後期	土坑	12基	土師器			
			中・後期	ピット	212基	須恵器			
			平安時代	溝跡	3条	埴輪			
別府氏館跡	城館跡	縄文時代 中・後期	ピット	22基	縄文土器	別府古墳群中の1			
		古墳時代	溝跡	2条	石器	基が新たに発見された。			
			古墳	1基	埴輪				

平成 11 年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

**寺東遺跡・別府氏館跡**

平成 12 年 3 月 31 日発行

発行／埼玉県熊谷市教育委員会

印刷／関印刷株式会社



さくらのまち“桜谷”